

大和物語詳解  
全

089064-000-6

913.33-I432y

大和物語詳解

井上 覺藏

栗島 山之助 / 述

M34

DBL-0314



913.33  
I432y  
W



大  
學  
中  
心  
年  
報



中華教育漢文講義之內

91333  
I432y

落合直文 闕  
中村秋香 序

# 大和物語詳解

井五覺藏 共著  
栗島山之助

立会  
29. 7. 22  
図書館

336547



## 大和物語講義序

清水瀆臣大和物語を評していへらく、此物語の大むねは打聞のまに、記せるものにて、作物語にはあらず、その打聞も歌を本としたるものにて、文は末なり、されば文の體撰集家集などの端書にちかくして、作者の歌とおぼしきものは見え、もはら古今の人々の歌を打聞のまに記したるもの、み文は伊勢物語に似かよひたるやうなれど、更によく味ふれば、中々に宇治大納言物語のかきぶりにちかくおぼえたり、さるは作りもの語にあらずして、打聞物語にて、その



打聞も歌を書きとめんとて、はしがきせるほどのものとおぼし、さるからにうたはよくて文は拙きなり、されどこはまことに拙きにはあらず、伊勢のごとくわざと作りかまへたるものにあらざればなり、古今後撰の歌など載せたる中に、彼集にはよみ人しらずとあるが、此物語には作者をたしかに記せるあり、これはたかの伊勢のことさらに引きたがへ作りなしたる例とは違ひて、さる傳へを打聞のまゝに記し、なれば、なか／＼に勅撰中にかくれたるよみひとを知る便あり、たとへばかの桂の皇子の歌などは、古今にはよみ人しらずと記されたるを、この物語にてしらるゝなど、古今に

は憚るところありて、わざと御名をばしるされざりけむかし、すべて勅撰の集に讀人しらずと載するもの、さまざまの例あるが中に、作者は明かなれど時にさゝはりて讀人しらずと書けるものあり、桂の皇子の御歌の如きは、やがて其一例ともいふべし、又此物語にはいにしへ今の人々の歌ども、ついでに定めず相交れるも打聞のならひなり、いにしへありし事どもを、今人のかたりきかするまゝにやがて書きこりたるもあるべし、文體に巧拙ありて、一人の手になりしものならぬやうにみゆるも、打聞には人の書き置けるを、たま／＼そがまゝかき寫すとなきにしもあらざればなり、心し



て味へみむには、作りものがたりにあらずして、打聞物がたりなる事、おのづからしらるべしと、此説大かたいひえられたり、たゞし文體拙しとはいふべからず、子めき大どかなるさま、伊勢とはまたやうかはりて、あどけなく匂ひやかなるげそへるなど、おのづから一つのすがたあり、ぬしが宇治大納言物語といへるは、即、今昔物語をさせるものにて、そはむねと打聞のまゝを記せるうへにつきていふものなるべく、文體の如きは彼のてづゝにこそとゞしきものとは異にて、深くもてあそぶべきものなるを、たゞ古く世に行はるゝなごも、活字本刊本はさらにもいはず、季吟が抄本、首書本、さて

は井上文雄が冠注、ともに、誤多ければ、いかで細らかに校訂して略注をも加へばやと、濱臣校本、夏蔭手入本、さては進藤千尋が校正本などによりて、年頃正しおきつれど、尙疑はしき節もあれば、さながらにして、さしおきつるを、一日栗島井上兩氏此稿本を携へ來て、これかれに校へ合せて略注をも施せるよし、かたりて、いかでこれがはしに一言をも乞はるゝに、まづ我が心を得られつるが、いさうれしければ、ごみにうべなひぬ、されど此頃殊に事しげくて、まだ一ひらだに開きみぬほど、印刷すでに成りぬるよしにて、さくゝとあわたくしくせめまどはさるれば、いせめてこの物がたりよ



む人の心得草にもと、やがて清水ぬしが説をしるし、さて我  
がおもふ旨をもおろく、書いつけてかへし送るになむ、  
明治三十四年七月廿日ばかり五月雨くらきふじのやの  
窓のもごにて

中 邨 秋 香

## 大和物語詳解

はしがき

一この書は、物語とはいへど、全篇を通徹したる脚色あるにあらず。たゞ歌を主とせる簡單なる事柄を、あまた集録したるものにて、寧ろはじがされほさ歌集の文の如く、其の体裁、伊勢物語に倣へるものなり。一所載の事柄は、概ね見聞の事實を、いさゝか敷衍し、且つ修飾したるものにて、中には古歌などにより、全く作りまうけたるも、はた虚實相錯へたるもあり。

一作者は、季吟の抄に、作者の説も一かたならず、あるは在原滋春業平次男號、あるは在次所作也、あるは花山院之御作り物語とも申つたへて侍り云々、この



二  
兩説を案じ侍るに、滋春のかげりとさだめん事おぼつかなき、このものがたりのうちに、在次君とさこゆるが甲斐のくにて身まかるとて、かりそめのゆきかひちとぞ思ひことよめりし事は、古今集にも、まさしくしげはるが母にみせよといひおきつるよしみえ侍る、しかあれば、いかゞとぞ思ひ侍る、一條禪閣御所の歌林良材集には、偏に花山院のやまと物語とかへせ給へるこそ、たゞに故なきには侍らじとおははかられ侍れ、又此ものがたりにも、此みかどの御時まで侍りし人々のうた、折々まじはりてみえ侍り、いまひそかに思ひ侍るに、滋春のかきたまへるといふも古人の説なれば、ひたすらに誣ひがたし、かのいせ物がたりを、業平の朝臣の自記とも、いせのごの筆作とも、一かたに定めがたきにとりて、かの自記の物有じに、又伊勢のごのつくりくはへて伊勢物がたりと名づけたりとかや諸説に決し侍れば、この物語をも、はじめ在次君のあ

三  
らましゝるしれきつらんに、又彼みかどの製作にて、其後々の事どもをも補ひおはしましけるとやみ侍らん、或人の云、しげはるのかきたりといはんことのおぼつかなきは、其いはれあまたあり、しかあれど花山院のかへせ給へりといはんことも、何のより所にてかだしく定めさこえんと、やつがりがいはく、是だゞ舊説にまかするばかりにて、いづれもさせる證跡は侍らず、さりながら、又管見のよりどころは、此花山の帝は、冷泉第二之御子御諱師貞御母は皇太后宮懷子攝政太政大臣伊尹女安和元年に降誕あり、永觀二年十月十日に御ゆづりをうけさせたまひ、御在位二年にて、寛和二年六月廿二日にれりおさせ給ひつゝ、花山寺にして御かざりをおろし、こゝかじと深山にいりなど、佛道をおほしこめにけり、元亨尺書有傳、此やまとものがたりに、はじめには、亭子の帝れりおの御心ある事をかき、つぎに御ぐしおろしやまぶみせさせ給ふ事などかさつ



らねつゝ、巻軸には、花山の僧正の、うつぶしぞめのあさのけさなりとよめるをもて、一部をとゞめさせ給へりけり、これらの文体をみるに、かの帝の御心有てもや、かくものせさせ給へるならんところ、愚意にはおしはかられ侍れ、但清輔の説に袋双紙云、作者不審、まつ朱雀院の御時、天曆の始の事にや、先帝は延喜御宇、れほさおほいまうちさみと號するは貞信公也、兼盛並檜垣の嬭等のうたありと云々、愚案に、貞信公は朱雀院の御宇承平六年に太政大臣になり給へり、兼盛は後撰集のところより、花山のみかどの御比ほひまでもながらへ給ひしよしに侍り、檜垣の嬭は、天慶四年純友がさわぎのところ、わがくろかみも白河のとよめり、いづれも時代其ころ也、猶此説により侍らば、清慎公號「小野宮左大臣」を此ものかたりに、いまのひだりのおとゞと侍り、是も天慶年中に左府に任じ給へるよし成ければ、いかさまにも此比出來たりといはんにつきなさには

侍らじかし、清輔卿のところほひだに、すでに作者はつまびらかならずと侍るは、其後の説より、さもやとこゝろもまどはるれば、たゞ京極黃門の、伊勢物語の奥書に、上古之人強不可尋其作者、只可翫詞花言葉而已とかゞせ給へる金言にならひて、このものがたりもさておさ侍らんか云々とある如く、何人とも詳ならず。思ふに清輔の袋草紙にいへる如く、この書の出で來たるは、全く天曆の頃にて、後、花山天皇時代の人、又所々書き加へなどしたるものと見て可ならんか。

一題號を大和物語と名づけたるは、あるは畿内大和の國の物語ある故なりとも、あるは大和は日本の總名にして、諸國の事どもをしるしたれば、唐土の稗史小説に區別して、我が日本の物語なりとの意なるべしともいへり。後の説、やゝ穩やかなるが如し。

一この書の註釋には、北村季吟の抄六冊、及井上文雄の冠註二冊あるの

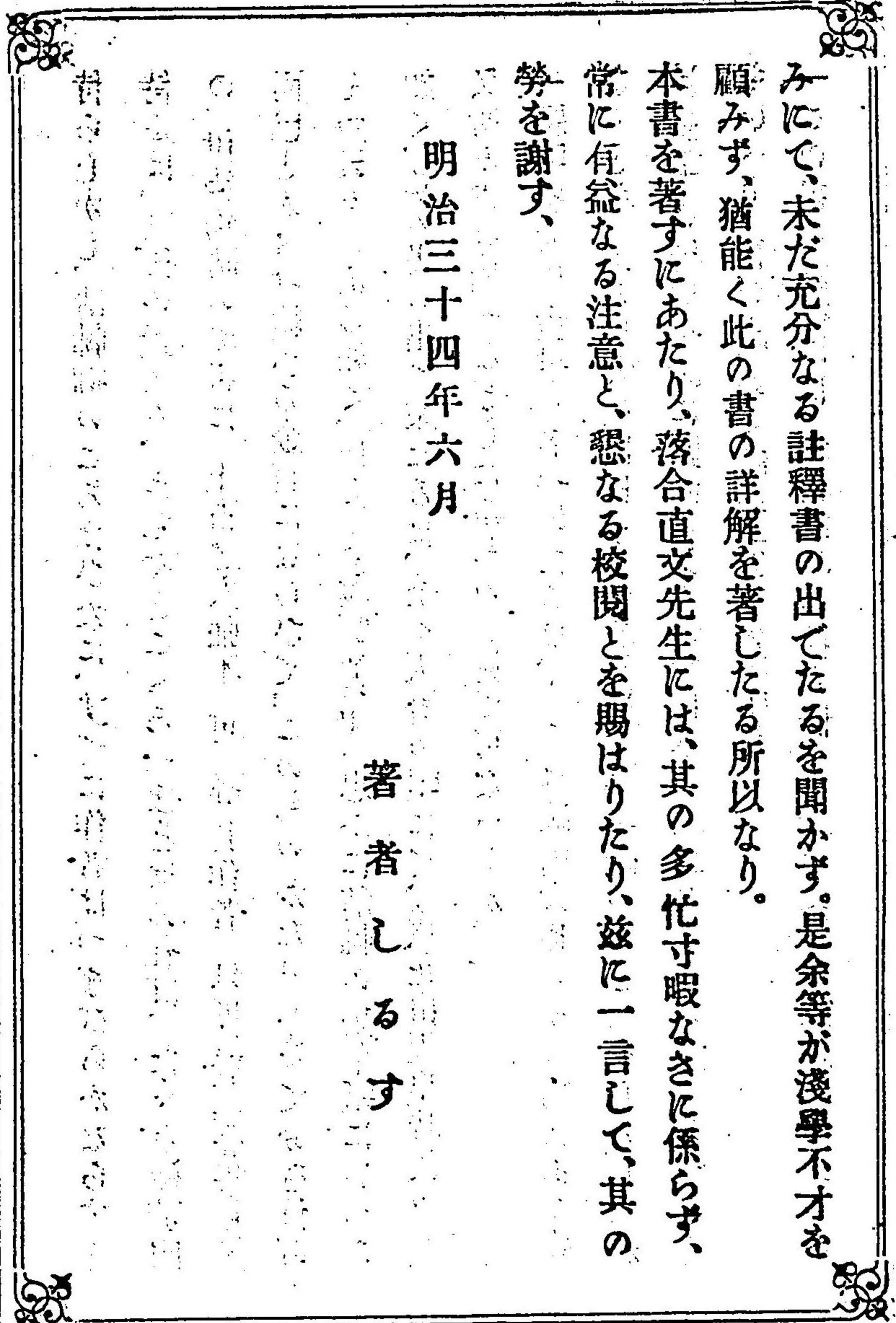


みにて、未だ充分なる註釋書の出でたるを聞かず。是余等が淺學不才を顧みず、猶能く此の書の詳解を著したる所以なり。

本書を著すにあたり、落合直文先生には、其の多忙寸暇なきに係らず、常に有益なる注意と、懇なる校閲とを賜はりたり、茲に一言して、其の勞を謝す、

明治三十四年六月

著者 しるす



# 大和物語詳解

落合直文校  
井上覺藏講  
栗島山之助



第一段

亭子院のみかど、今はおりの給ひなんとするころ、弘徽殿の壁に、伊勢の御のかさつけける、

わかるれどあひも惜まぬも、しきを見ざらんことのならにかかなしきとありければ、みかど御覽じて、りのかたはらにかさつけさせ給うける、身一つにあらぬばかりをおしなべて行きめぐりてもなどか見ざらんとなんありける。

○亭子院のみかど、宇多天皇の御事なり。光孝天皇第三の皇子にて、御諱は定省、御母は皇后班子なり。さて亭子院は、宇多帝の御讓位後にはしまし、所にて、拾芥抄に、七條坊門北、西洞院西二町、寛平法皇御所、元東七條后と見えたり。○今はおりの給ひなん云々、ねりのは御位を去らせ給ふをいふ。給ひなんは給はんといふにねなじ。○弘徽殿、内裏十七殿の中に

○大和物語詳解



て、清涼殿の北にあり。女御などの居る所なり。○伊勢の御、古今集目錄に、大和守從五位上藤原繼蔭女、七條后宮女房、寛平間爲更衣詭皇子と見え、次に、繼蔭者、參議從三位家宗一男、母刑部氏、貞觀十三年四月十七日補文章生云々、仁和元年八月十五日任伊勢守、三年正月七日叙從五位上、寛平三年正月任大和守、爲伊勢守之比號伊勢歟とあり。伊勢の御は婦人に對する尊稱。○書きつけける、の下の、歌の文字含まれたり。○わかるれとの歌、百數とは宮中の事也。一首の意は、わが仕へまつりし天皇は、やがて御位をれりさせ給へば、われも共に、この宮中と別るべけれど、最早や天皇の御外に、われに名残を惜むべきものは、この宮中に一人としてなければ、戀しく思はるべき筈もなきに、いかなれば、かく別の惜まれて悲しくのみ覺ゆるぞとなり。○身ひとつの歌、天皇は我一人にてもなきに、同じ次々の天皇にも仕へまつらば、しか名残をしき宮中も、又立ちかへり見らるべきを、いかで見られぬことのあらんやとなり。この歌、二首共に、後撰集離別の部に出で、其の詞書に、亭子院のみかど、おりぬ給うける年の秋、弘徽殿の壁にかきつけると見え、また大鏡には、伊勢の君の、弘徽殿の壁にかきつけ給へりし歌ころは、ろのかみにあはれなること、人申し侍りしか。「わかるれとあひも思はぬも、しきを見ざらんこと、のなにか悲しき」法皇の御かへし、「身ひとつにあらぬばかりをおしなべて行きかへりてもなきか見ざらん」といへば、かたはらなる人、法皇のかせ給へりけるを、延喜の、後に御覽じつけて、かたはらにかきつけさせ給へるとも承るは、いづれかまことならんとあり。

第二段

帝かりぬ給うて、又の年の秋、御髪おろし給うて、とことろ山ぶみ給うて、行ひ給うけり。肥前の掾にて、橘の良利といひける人、うちにおはしける時、殿上よさぶらひて、御髪をおろし給うてければ、やがて御供よ、頭おろしてけり。

○帝、おなじく亭子院を申せり。○又の年、翌年をいふ。○御髪おろし給うて、御落飾し給ひてなり。給うては給ひての音便。さて皇胤紹運録には、宇多天皇、寛平九年七月三日遷位、同日尊號、昌泰二年十月十四日出家、法諱空理と見え、其の他、王代記なども、皆同じさまなれば、ここに又の年の秋と云へるは誤なるべし。○どころ山ぶみし給うて、山々寺々に詣でたまふをいふ。延喜年中、熊野及び高野などに御幸し給ひしことあれば、これらの時をさしたるなり。○肥前の掾、掾は諸國の官にて、介の次なり。○橘の良利、肥前の人、出家して寛蓮といふ。極めて園基に妙を得しかば、菩提大徳と稱せられたり。○うちにはしける時、うちには内裏なり。帝の未だれりさせ給はで、内裏にれはしまし、時なり。○殿上にさぶらひて云々、殿上は清涼殿の南側にありて、大臣以下殿上人の伺候する所。やがては其のまゝの意。願えろしは剃髪するをいふ。良利の殿上の間に伺候してありしに、帝の御落飾し給ひければ、ろのまゝ御供に剃髪したりとなり。

人にも知られ給はで、歩きたまうける御供に、これなん後れ奉らでさぶらひ



ける。かゝる御歩さし給ふ、いと悪しきことなりとて、うちより少將中將など、これかれさぶらへとて奉らせ給ひけれど、たがひつゝありき給ふ。和泉の國に至り給うて、日根といふ所にねはします夜あり。いと心細うかすかにてねはしますことを思ひて悲しかりけり。さて日根といふことを歌によめどおほせごとありければ、この良利大徳、

ふるさとのたびねの夢に見えつるは恨みやすらんまたと訪はねば

とありけるに、皆人泣きてえよますなりにけり。その名をなん寛蓮大徳といひて後までもさぶらひけり。

○うちより、内裏よりにて、當代すなはち醍醐天皇を申せり、○少將中將など、誰とも知られず。○これかれさぶらへとて、院の御供になり。○たがひつゝありき給ふ、内裏よりの御志に違ひて、かく人々を奉らせ給へど、更に召し具し給はず、なほかすかなる御有様にてありかせ給ふとなり。○日根といふ所に云々、熊野へまうで給ひし折のことなるよし、大鏡にも此事見ゆ。日根は和泉國日根郡にあり。○いと心細う云々、御供にさぶらふ人々の心なり。○大徳、元來道徳高き僧をいふ詞なれど、後には、たゞ僧のことに廣く用ゐられたるやうなれり。○ふるさとの歌、旅寝の夢に故郷の見えしは、旅にありて久しく訪はざりし

かば、ろの恨みにて、かく夢にも見ゆるならんとなり。さてたひねといふに日根をかくせり。この歌、新古今集露旅の部に出でたり。

故源大納言、宰相にねはしける時、京極の御息所より、亭子院の御賀つかうまつり給ふとて、かゝる事をなんせんと思ふ、捧物一枝二枝せさせて賜へと聞え給うければ、髭籠をあまたせさせ給うて、俊子に色々に染めさせ給うけり。敷物のをりものども色々に染めよりくみ、何かと皆あつけてせさせ給うけり。ろのものどもを、なが月つごもりに皆いそぎはてけり。さてろのみな月ついたちの日、このものいろぎ給うける人のもとにねこせたりける、千々の色にいろぎし秋は過ぎにけり今はしぐれになにを染めまし

○故源大納言、陽成院の御子正二位大納言清蔭なり。延長三年姓を賜り、天曆四年七月薨す。大納言は大政官の次官にて、職原鈔に大納言令四人、相當正從三位、唐名宰相、其職掌、與右大臣以上參議天下事云々、然者大臣不候之間、奉行與大臣同、故云、亞相之官也云々、凡當官人臣重職也、可昇大臣之人任之、而光頼卿以來、爲諸大夫輩又任之、而至今爲重寄と見ゆ、また百寮訓要抄に、天子喉舌の官也、下の申事を上へ申し、上の事を下にのふる職也、又君の悪き事を被仰をばすて、よき事をば申由令條にも見えたり、始は四人にてありしが、次第に多くなり



て、當時は十人にて有也云々とも見ゆたり。○宰相、參議をいふ。職原鈔に、參議八人（附）大夫、相參議者、諸官之中、四位以上有「其才之人、奉勅參議官中政」之意也、故非「正官、然而除目任」之又例也、四位任之者、猶稱某朝臣、三位以上稱「姓朝臣」也、八座者、異朝八座其職各別也、本朝聖武天皇天平三年置參議、大同御宇、罷參議置「五畿七道觀察使、合八人、弘仁御宇、罷觀察使、皆爲參議云々、八人自「此而始、依之有八座之號、任參議有數道、左右大辨並近衛中將有「其才者、藏八頭、及勘七箇國公文、受領等是也」とあり。○京極の御息所、宇多天皇の皇后褒子なり。藤原時平の女にて、雅明親王、載明親王など生み給へり。御息所とは、御子の生れ給ひて後申す稱なり。また東宮の妃をも御息所といふ。○亭子院の御賀、賀とは四十歳より、十年毎に、年老いたるをよるこひ祝ふことなり。貫之集に、延長四年九月廿四日、法皇の六十の賀、京極の御息所つかぐまつり給ふ時の御屏風の歌、若菜つむ、「春たゝんすなはちてどに君がため千年へぬべき若菜なりけり」若菜生ふる野べといふ野べを君がため萬世しめてつまんとぞ思ふ」などあるも、この時の事なり。○かゝる事をなんせんと思ふ、御息所より、斯様なる事をせんと思ふなりと、御賀の設けの事を、清蔭の所へ云ひつかはし給ふなり。○捧物、奉り物なり。○聞え給うければ、申し給ひければにれなじ。○毘籠、あみ残したるすゑを、毘の如くしてつけたる竹の籠なり。○俊子、作者部類に、大江玉淵の女と見ゆ。「藤原千兼の妻なり。○敷物のをりもの、棒物の毘籠などに敷くをりものなり。をりものは和名抄に、綺、蔦、蔦切韻云綺（虚彼反俗云）一破一出（三於利）似錦薄者也云々とあり。○何かと皆あつて

云々、何やかやと、すべて俊子に任せて爲しめ給ふなり。○なが月、夜長月の義にて九月をいふ。拾遺集に、「秋ふかみ戀する人のあかしかね夜を長月といふにやあるらん」○つこもり、月隠の義にて月の最終の日なり。○いそぎ、用意なり。○神無月、十月をいふ。この月は諸國の神々、出雲の國へはしますゆゑこの名あり。よりて出雲にては、この月を反對に神有月といふ。○このもの急ぎ給うける人、清蔭のことなり。○千々の色にの歌、今日よりは十月にて冬となりたれば、木々の梢をさまざまの色に紅葉するに急がしかりし秋も、最早やきのふにて過ぎ去りたり。されば今よりは時雨に何を染めんか、更に染むべきものもなしとの意にて、おのれのあつらへられし品を、全く染め果てたるよしをたどていへるなり。その物いそぎ給うける時は、ひまもなくこれよりもかれよりも云ひかはし給うけるを、うれより後は、りの事やなかりけん、消息もいはで、しはすの晦日（つひ）になりければ、

かたかけの船にやのりじら浪のさわぐ時のみおもひ出づる君  
 となん云へりけるを、その返をせせて年越江にけり。さてささらさばかりに、柳のしなひ、物よりけに長さなん、この家（あ）にありけるを折りて、  
 青柳のいとうちはへてのごかなる春日しもころおもひ出でけれ



どてなん遣り給へりければ、いと二なくめで、後までなん語りける。

○消息、文にても言葉にても音信をいふ。○しはす、十二月なり。○かたかけの歌、かたかけは片帆のことなり。上の句は、たゞ騒ぐといはん序詞にて、躬恒集わかれの歌に、「かたかけの舟にやのれる白浪も立つはわびしくれもはゆるかな」とあるに全くおなじ。歌の意は、うの事いとなみ騒ぎし時のみ、君は思ひ出で給ふよとなり。○ささらぎばかりに、二月頃になり。ささらぎは衣更着の義にて、二月は氣候なほ寒く、更に衣を重ね着ることあればいふとぞ。好忠の歌「我妹子が衣ささらぎ風さむみありしにまさる心地かもする。」○柳のしなひ、柳の芽ざしなり。しなひはすべて物の靡き撓みたることをいふ。○物よりけに、けは勝りての意。他の物より勝りてなり。○この家、清蔭の家なり。○青柳の歌、いと柳のしなひをいふ。うち延へてはしなひの長さを、春の日のうち續きのどかなるにいひかけたり。春日しものしは強辞。歌の意は、かくうち續き長閑なる春の日にさへ思ひ出づるものを、騒ぐ時のみ思ひ出づる君など云はれしは如何なる事ぞとなり。○二なく、たぐひなくの意。○めで、よろこび愛するをいふ。

野大貳、純友がさわぎの時、うての使にさへれて、少將にて下りけり。おほやけにもつかうまつり、四位にもなりぬべき年にあたりければ、む月の加階たうばりのこと、いとゆかしく覺はけれど、京より下る人もをさへ聞はず。或

人に問へど、四位になりたりともいふ。或人はさもあらずともいふ。さだかなること、いかで聞かんと思ふほどに、京よりたよりあるに、近江守公忠の君のふみをなんもて來たりける。いとゆかしく嬉しうて、あけて見れば、よろづのことども書きもていきて、月日などかきて、奥に、

玉櫛笥ふたとせ逢はぬ君が身をあけながらやはあらんと思ひ

これを見て、限なく悲しくてなん泣さける。四位にならぬよし文の詞にはなくて、たゞかくなんありける。

○野大貳、小野好古なり。太宰大貳葛弦の子にて、天慶三年、藤原純友反するに及び、追捕使となりて下れり。時に正五位下左近少將たり。さて野大貳といふは、後に太宰大貳となりたれば、小野の野と、大貳とを取りてかく呼ぶなり。太宰府は九州二島を管し、大貳は其の次官にて、官職秘鈔に、參議散三位任之、其中以大辨爲最、或四位殿上人中、御侍讀合格良吏任之、但故人難之云々、權帥在任之時不任之、權帥大貳間一人爲吏務故也と見たり。○純友がさわぎ、純友は權中納言長良の曾孫にて、長範の子なり。承平中乱を伊豫に起し、天慶四年博多に於て好古に滅さる。○うての使、討手の使なり、うてはうちての略。○おほやけにもつかうまつり、おほやけは朝廷なり。つかうまつりは仕へ奉りなり。朝廷のみやづ



かへも等閑ならざりしをいふなり。○四位にも云々、今は少將にて五位なり。○ひ月の如階、ひ月は正月をいふ。陸月の義なり。この月は親戚朋友、相親み樂む月なればなり。加階は位を加へ上ぐることなり。これは縣召ふかためしの除目とて、正月十一日に、諸國の官人を任せらるゝことあり。それをいへり。なほ官職難儀に、縣召除目と申は、式日は正月十一日より三ヶ日なり、五ヶ日七ヶ日に行たる例も有、式日延引すれば、他日又二月三月の間に行なふ、近くは多分三月なり、希に四月に行たる例有、不吉なる例也、是を春の除目とも外官除目とも申、同除目也、此除目に外國を本として内官をも任ずる也、諸國の人を召て任ずる故に、縣召と號する由申説有、殊外なる誤也、諸國の司様目に任じて諸國へ下る也、是を赴任と申なり、諸國に人を任ずる心にあや云々と見えたり。○たうばり、たまはりの音便。○いとゆかしく云々、好古の討手の使に下り居て、京の事を思ひやり、加階の沙汰のいと知らまはしく覺ゆるなり。○をさし、アマリなといふ意。○さだかなることいかで聞かんと云々、確なることを、いかにもして聞かばや思ふほどになり。○近江守公忠、源公忠なり。光孝天皇の孫にて、大藏卿國紀の男。天慶四年三月近江守となり、天曆二年十月六十歳にて卒す。○書きもていきて、段々と書き續けてなり。○玉櫛笥の歌、玉櫛笥は枕詞。二年は蓋といふにいひかけたり。後撰集この歌の詞書に、小野好古朝臣、西の國のうての使にまかりて、二年といふ年、四位には必ずなるべかりけるを、さもあらずなりにければ云々とあり。あけながらやは云々は、五位の人の袍は、淺緋を着るものなれば、匣の縁にてあくるといふに緋をかね、なほ今年も緋

第五段

袍の儘にてあらんとは思はざりしに、氣の毒なることよといふ意を含めたり。やはは反動の辞。この歌、後撰集雜一に出で、「あけながら年ふることは玉くしげ身のいたづらになればなりけり」といふ好古のかへしあり。○たゞかくなんありける、歌にのみかくありしなり。前坊の君うせ給ひにければ、大輔かざりなく悲しくのみおぼゆるに、ささいの宮、后に立ち給ふ日になりければ、ゆゝこととて隠しけり。さりければよみて出しける。

わびぬれば今はともを思へどもこゝろに似ぬはなみだなりけり

○前坊、前の皇太子保明親王をいふ。坊は東宮にて、皇太子の御座所なれば、やがて皇太子のことを坊ともいふ。さて親王は、醍醐天皇の皇子にて、延長元年三月廿一日薨じ給へり。○大輔、前坊の御乳母なり。○ささいの宮、后に立たせ給ふ宮をいへり。ささいはささいの音便にて、これは前坊の御母穩子のことなり。さて穩子の立后ありしは、延長元年四月廿六日にて、前坊の薨じ給へる翌月なり。○ゆゝしとて云々、かゝるめでたき折から、不吉の涙を見するは思々しければとて、人々の大輔を物蔭などに隠したるなり。○わびぬればの歌、今はと物を云々は、今は早や、前坊の御事は、思ひまゐらせじと思へともなり。一首の意は聞かたり。

朝忠の中將、人のめよてありける人に、忍びてあひわたりけるを、女も思ひ交

第六段



してすみけるほどに、かの男、人の國の守りなりて下りければ、これもかれもいさあはれと思ひけり。さてよみてつかはしける。

たぐへやるわが魂をいかにしてはかなささらにもてはなるらんとなん下りける日いひやりける。

○朝忠、右大臣藤原定方の男にて、天慶五年正月廿日左近中將に、六年十二月參議に、後中納言となり。○中將、近衛府の次官にて、職原鈔に、中將中將、相當四位下、唐名羽林中郎將、又對衛中郎將、或云、虎賁、中郎將、花族四位任之、執柄息若一世二世源氏中納言時兼之、凡人兼之賢朝公是也、非常之極歟、清花之人參議時兼之、中絶家兼帶爲、無念儀也、二位三位中將非大臣子若孫者不任之、至二位中將者執柄息外希例也、五位時任之執柄息外不可然云々、英雄大臣息任之近代事也云々と見たり。ろもく六衛府中、左右衛門、左右兵衛は、外衛といひて、門外を警固し、左右近衛は、宮城内にて、近く君をまもり奉る職なり。なほ同じ書に、左右近衛府唐名羽林中郎將、又對衛中郎將、或云、虎賁、元者近衛中衛也、平城天皇御宇大同二年、勅以近衛爲左近衛、以中衛爲右近衛、唐朝殊重此職、統領諸宿衛禁軍故也、木朝又爲重任とあり。○め、妻なり。○かの男、女の本夫なり。○人の國の守に云々、人の國は、京より他國をさしていふ。守は受領にて國司なり。百寮訓要抄に、諸國の守をば受領と申也、國司の事也、當時の守護人の如し、當任は四ヶ年也、よき國司をば重任とて、重ねて又四ヶ年たぶ、又延任とて任をのべらるゝ事もあり云々。また職原鈔

に、第十三代成務天皇四年、始定國造、同六年始分國境、國造乃國司之名、後改云守也、凡國司之撰、和漢重之、此云烹鮮之職、又云分愛之官、漢宣帝常稱云、與我共治者、唯良二千石乎云々、誠是當一方重寄、察百姓之寒苦、非庸才之所可企望、故昔時固設格制、以勸治否、合格者蒙賞、違格者被黜、是所以擇良吏也など見たり。○これもかれも、朝忠も女もなり。○いと哀と思ひけり、かの男、女を具して下ればなり。○たぐやるの歌、たぐへは添ゆる意なり。我が魂を女に伴はせやるなり。はかなき空に云々は、ろのたぐへやる我が魂をば、いかなれば、はかなき空にもてはなら給ふならんといへるにて、我はかくまで名残を惜みて、別れがたく思へと、君はさる心もなく、いと平氣にて下り給ふべしとの意なり。

をどと女、あひ知りて年へけるを、いさかなることによりてはなれにけり。飽く年もなくて止みしかばにやあらん、男もあはれと思ひけり。かくなん云ひやりける。

逢ふことは今はかぎりとおもへども涙は絶えぬものにありける  
女、いとあはれと思ひけり。

○止みしかばにやからん、止みしゆるにやからんなり。○逢ふことはの歌、意は聞えた



り。

監の命婦の許に、中務の宮おはしまし通ひけるを、方のふたがれば、今宵はえなんまうでぬとの給へりければ、うの御返事に、

逢ふことの方はさのみぢふたがらん一夜めぐりの君とおもへば

とありければ、方ふたがりたりけれど、ねはしましてなんおほこのごもりにける。

○監の命婦、誰とも知りがたし。將監などのひすめなるべし。命婦は五位に叙せられたる女官の稱なり。○中務の宮、さだかならぬと、元良親王なるべし。親王の事は下に註せり。○ねはしまし通ひけるを、通ひ給ひけるにの意。○方のふたがれば、ふたがるはふさがるなり。方の塞るとは、行かんと思ふ方角に、天一神、太白神などが居て、行く事の能はざるをいふ。○えなんまうでぬ、まわり得ぬの意。○逢ふことの方の歌、まことに一夜めぐり(大白神)の如き君と思ひまわらすれば、逢はんとし給ふ方は、さぞ塞ることにて侍らんといへるに、君のしかの給へるは、實に方の塞りしにはあらで、我に逢ひ給はじと思召すより、假托(かたが)けての給へるなるべしと、深く恨みたる意なり。次に方塞りたりけれどと、わざとことわりたるを思ふべし。この歌、五の句、一本、君となれはとあり。○おほこのごもりにける、御寢

なりしなり。おほのごもりは大殿隱の義。

かくて又、久しく音もし給はざりけるに、嵯峨の院に狩すとてなん、久しく消息なども物せざりける、いかに覺束なく思ひつらんなどの給へりける御かへしに、

大澤のいけの水ぐさ絶えぬともなにかうらみんさかのつらさは

御かへしはこれにや劣りけん、人忘れにけり。

○久しく音もし給はざりける、更に音信もなかりしなり。○嵯峨の院に狩すとてなん云々、中務の宮の云ひたくれる詞なり。嵯峨は山城國葛野郡にあり。○物せざりける、物すとは、恰も代名詞の名詞に於ける如く、それと定かに云はでも明に覺り得らるべき、種々の動詞の代りに用ゐらるゝ詞なり。ゆるに其の意は、文脈によりて一定せず。こゝなるは爲すといふ代りに用ゐたるなり。○大澤の歌、大澤の池は嵯峨にあり。水莖絶えぬともは、御消息は絶えたりともこの意。水ぐさは筆のことにて、ぬは過去の助動詞なり。一首の意はさこえたるべし。

桃園の兵卿部の宮うせ給うて、御はて九月晦日にし給うけるに、俊子、かの宮の北の方に奉りける、

おほかたの秋のはてだに悲しきに今日はいかでか君くらすらん



かぎりなく悲しと思ひて、泣き居給へりけるに、かくいへりければ、  
あらばこり初も果もれもほえめ今日にも逢はて消江にしものを  
となん返し給うける。

○桃園の兵部卿の宮、宇多天皇の皇子敦固親王をいふ、御母は女御胤子にて、内大臣藤原高藤の女なり。さて兵部卿は、兵部省の長官にて、職原鈔に、兵部省傳名兵部、周禮、夏官、大司馬之職也、軍旅兵馬及諸武官之籍、皆是當官之所掌也、本朝又同之と見ゆ、次に、卿一人相正四位下、唐名兵部近代多爲公卿以上兼官四位不任之、或親王任之、凡八省中、中務式部親王官也、兵部時々任之、此外不任親王公卿以上任之、時民部兵部是爲重、治部形部其次也、大藏宮内又其次也、然乃近代治部刑部大藏宮内雖四品待臣任之、民部兵部更不任四品待臣等也とあり。○御はて、喪の果なり。○かの宮の北の方、醍醐天皇の皇女慶子内親王なり。北の方は高貴なる人の妻をいふ。○大方の歌、大方の云々は、何事もなき、世の常の秋のはてさへ、いと悲しく覺ゆるにとなり。秋のはてに、喪のはてを添へたり。いかでかはいかにしてかなり。○かぎりなく悲しく思ひて云々、北の方のさまなり。○あらばこりの歌、あらばこるは、北の方みづからの事なり。兵部卿の宮をいふにはあらず。おもはえはたばえの意。今日にも逢はて云々は、あまりの歎きに、人心地もなく消え入りたれば、あるもなきに等しき身なるよしを、かくいへるなり。一首の意は、我が身の消えずしてあらばこり、秋の果とやら、初

第十段

とやらも思ひわくべけれど、われはすでに、今日をも待たで消え果てし身なるものを、いかで何事をか覺ゆべきととなり。いたく心を取乱して、前後を忘れしさまなり。  
監の命婦、堤にありける家を、人に賣りて後、粟田といふ所にいさけるに、  
りの家の前をわたりければ、よみたりける。

ふる里を川と見つゝもわたるかな淵瀬ありとはうべもいひけり  
○堤、加茂川の堤なるへし。○粟田、山城國愛宕郡にあり。○ろの家、かの賣りし家なり。ろの前を命婦の渡りしなり。○ふるさとをの歌、ふるさとはもと住みし里をいふ。こは古今集雜下に、伊勢の家を賣りてよめる歌、「飛鳥川ふちにもあらぬ我が宿もせにかはりゆくものぞありける」とあるを思ひてよめるなるべし。意は明なり。

故源大納言の君、忠房ぬしの御女東の方を、年ごろ思ひて住み渡り給うけるを、亭子院の若宮につき奉り給うてほどへにけり。小供などありければ、事も絶えず、おなじ所になん住み給うける。さてよみてやり給うける。  
住の江の松ならなくにひさしくも君とねぬ夜のなりにけるかな  
とありければ、かへし。

久しくはおもほえねども住の江の松やふたゝび生ひかはるらん

第十一段



どなんありける。

○忠房、右京大夫藤原忠房なり。太宰大貳廣敏の孫にて、信濃攝是嗣の子。○ぬし、人を尊敬していふ時に用ゐる詞。○亭子院の若宮、こゝにかくあれど、宇多天皇の皇女にはあらず。實は醍醐天皇の皇女にて、前齋院韶子内親王なり。齋院記に、醍醐天皇第十三皇女也、母女御和子、光孝之女也、延喜二十一年二月廿五日卜定、時四歳、延長八年九月廿九日廢之、圓融院天元三年正月十八日薨、系譜曰、韶子、配大納言、清隆並河内守惟風等と見えたり。○子供などありければ云々、忠房の女に、清隆の子どもなどありしかば、若宮を得奉りて後も、絶えず消息などはありしとなり。○住の江の歌、住の江の松は、古今集雜上「われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらん」などあるより、久しき例に引けり。住の江は今の住吉にて、攝津の國住吉郡にあり。松の名所なり。ならなくには、にはわらぬになり。なくはぬの延音。一首の意は明なるべし。この歌、拾遺集(戀二)には、松ならなくにを、松ならぬともしたり。○久しくはの歌、さばかり久しくは覺えざれども、住の江の松の、ふたゝび生ひかはるほどならんといへるにて、恨みあまりたる意なり。これも同じ集に、一の句、久しくもどあり。

第十二段

れなむれど、かの宮を得奉りて、帝のあはせ奉り給へりければ、はじめころ忍びて、夜々通ひ給ひけるころ、かへりて、

あくといへばしづこゝろなさ春の夜の夢とや君をよるのみは見ん

○れど、大臣のことなれど、こゝは大納言をいへり。○かの宮、韶子内親王なり。○あくといへばの歌、しづ心は静なる心なり。夢とや君を云々は、夢と思ひてや、君を夜ばかりは見んとなり。短き逢ふ瀬を、他かず思へるよしなり。この歌、新古今集戀三に載せたり。

第十三段

右馬の允藤原千兼といふ人の妻に、俊子といふ人なんありける。子ども數多出て来て、思ひて住みけるほどに、なくなりにはければ、悲しくのみ思ひありくほどに、内の藏人にてありける一條の君といひける人は、俊子をいよく知れりける人なりけり。かくなりよける程よも訪はざりければ、怪しと思ひありくほどに、訪はぬ人のずさの女なん逢ひたりけるを見て、かくなん、思ひさや過ぎにし人のかなしさに君さへつらくならんものとはと聞江よと云ひければ、かへし、

なさを君がさかくにかけじとて泣くくしのふほどな恨みり

○右馬允藤原千兼、忠房の男なり。右馬允は右馬寮の判官にて、官職秘鈔に、瀧口、院武者所、先坊帶刀成功者等任之、又御監請任之、或自諸司三分遷之、皆用重代者云々と見え、又左右馬寮は、百寮訓要抄に、諸國の牧の馬を立たかる、延喜式にのする所、毎年の御馬數百疋に及べり。諸國の牧又其數をしらず、駒牽といふは八月ばかりにて當時は侍れども、月



々の駒牽其數有云々と見えたり。○なくなりなければ、千兼のなり。○一條の君、貞平親王の女。下にも出でたり。○訪はぬ人のすさなん、すさは從者なり。一條の君の從者をいふ。○思ひきやの歌、やは反動の辞。さへは物のある上に添ひ加はる意。○聞およ、申せよにねなじ。○なき人を慕ふ心の歌、さかくはささくの延音。一首の意は、われは亡人を慕ふ心を、君に聞かせじと思ひて、泣く／＼泳居るほそなれば、しか恨み給ふなどなり。

本院の北の方の御れとうどの童名を、おほつふねといふいますがりけり。陽成院の帝に奉りけるに、れはしまさがりければ、よみて奉りける。

あらたまの年はへねどもさる澤のいけの玉藻は見るべかりけり

○本院、左大臣藤原時平の事なり。本院は其の住第の名にて、拾芥抄に、中御門北、堀川東一町、左大臣時平家とあり。○北の方、從五位上在原棟梁の女なり。○れとうど、女弟にて妹をいふ。○いますがりけり、れはしけりに同じ。いますがりありの略なり。○陽成院の帝、御名は貞明、清和天皇第一の皇子にて、御母は皇太后藤原高子なり。○あらたまの歌、こは拾遺集哀傷の部に、猿澤の池に采女の身なげたるを見て、人應、「わきもこがねくたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき」とある歌によりてよみたるなり。一首の意は、未だ年へて仕へまつりし身にはあらねど、やがてかくふるされたるが、いと恨めしう思ひまわらせらるれば、我もかの、ねくたれ髪と歌はれし采女のやうに、君を戀ひわぶるあまり、身をも投げたき心

地し待るよとなり。あらたまのは年の枕詞。猿澤の池は大和國奈良にあり。玉藻の玉は美稱。なほかの采女がこと、本書の下に委し。

また釣殿の宮に、若狭の御といひける人を召したりけるが、又もめしなかりければ、よみて奉りける。

數ならぬ身に置くよひのしら玉は光り見はさすものにぎありける

とよみて奉りければ、見給うて、あなかもしろの玉の歌よみやどなんの給ひける。

○釣殿宮、光孝天皇の皇女綏子内親王なり。皇胤紹運録に、綏子内親王、三品、配陽成院、號釣殿宮と見えたり。○若狭の御といひける人を云々、釣殿宮なる若狭の御といひし人を、陽成院の召し給ひしなり。○數ならぬの歌、數ならぬは身しき意。白玉は帝をたどへて申せり。見はさすのさすは、書さす、云ひさすなどのさすにて、其の事のなし終らざるをいふ。光り見はさすとは、又も召させ給はぬことを云へるなり。一首の意は明なるべし。この歌、後撰集(雜二)には、陽成院の帝、時々どのぬにさぶらはせ給ひけるを、久しうめしなかりければ奉りける、武藏とあり。○あなかもしろの玉の歌よみや、歌に白玉とあればなり、やは歎辞。

陽成院のすけの御、まゝ父の少將のもとに、



春の野ははるけながらも忘草れふるは見ゆるものにありける  
少將、かへし。

春の野にれひしとす思ふわすれ草つらさころの種しなければ

○すけの御、陽成院の官女なるべし。○繼父の少將、不詳。○春の野はの歌、はるけな  
がらは、一本はるけきながらとあり。忘草は萱草をいへど、其の名の忘るゝといふより、人を  
忘るゝことに、多く歌などによみならへり。「戀ふれどもあふ夜のなさは忘草ゆめ路にさへや生  
ひ茂るらん」忘草かれもやするとつれもなき人の心に露はおかなん「忘草種とらましを逢ふこ  
とのいとかくかたきものとしりせば」(以上古今集)など。一首の意は、春の野はいと廣やかな  
れど、中に生ひたる忘草はなほ見ゆる如く、君もうちつけに、つれなきさまにはもてなし給は  
ねど、なほ御心の中に、我を忘れ給ふ忘草の生ひそめたるは、いとしく見まわらせらるゝも  
のよとなり。○春の野にの歌、我が心には、忘草の種なければ、君の云はるゝ忘草は、まこ  
とに春の野におひしものならんと思ふとなり。古今集戀五(素性法師)「忘草なにをか種と思ひ  
しはつれなき人の心なりけり」

故式部卿の宮の出羽の御に、まゝ父の少將の住みけるを、離れて後、女、薄に  
文をつけてやりたりければ、少將、  
あき風になびく尾花はむかし見したもどに似てそ戀しかりける

出羽の御、かへし。

たもともこのばざらまし秋風になびく尾花のれどろかさずば

○故式部卿の宮、敦慶親王なり。宇多天皇の皇子にて、延長八年二月薨す。年四十四。玉光  
宮と稱す。御母は藤原胤子なり。さて式部卿は、式部省の長官にて、職原鈔に、式部省舊唐  
周禮、天官、太宰之職也、國家典章皆是此官所統也、本朝文官除授考選舉、今猶掌之と見え、  
次に、卿一人相當正四位下唐名吏部尚書、大常卿、近代親王四品以上任之人臣任之希例也、凡當職其寄異、他、毎  
年於本省行諸國一分召也、一分召者任諸國史生之名也、史生謂之一分、内給院宮大臣以  
下參議以上皆有年給式部卿、行之、近代其禮久絶、件日式部卿乘鹿差絲毛車、殿上丞一人  
乘結唐尾馬、前驅云々とあり。○出羽の御、この宮の官女なるべし。○秋風にの歌、かく  
れたるところなし。棟梁の歌「秋の野の草の袂か花すゝきはに出で、招く袖と見ゆらん」など  
もあり。○袂どもの歌、我より驚かしまゐらせられたればころ、戀しなごもの給へ。さらすば思  
ひ出でもし給ふまじとのころなり。

故式部卿の宮、三條の御息所に絶え給うて、又の年の正月の七日の日、若菜奉  
り給うけるよ、

ふるさど、荒れにし宿の草の葉も君がためとすまづは摘みける  
とありけり。



第十九段

○三條の御息所、醍醐天皇の女御藤原善子なり。三條右大臣定方の女なれば、三條の御息所とはいへるなり。○正月の七日の日若菜たてまつり。正月七日に、其の年の若菜七種をとり、これを羹として服する時は、よく萬病を除くといへり。七種とは、せり芹、なづな薺、こぎやう御形、はこべら藜、すずな鈴菜、すししろ鈴白、たびら薺等にて、御息所より、其の若菜をば、式部卿の宮へ奉りたるなり。○ふるさとの歌、御息所の歌にて、意はあらはなり。

おなじ人、おなじ親王のもとに、久しくればしまさへりければ、秋のことなりけり、

世にふれど戀ひもせぬ身の夕さればすゝろに物の悲しさやなげとありければ、かへし、

ゆふぐれに物おもふ時はかみな月われも時雨にれとらざりけりとなんありける。心に入らで悪しくよみ給うけるとぞ。

○ねなじ人、三條の御息所なり。○おなじ親王、式部卿の宮なり。○世にふれどの歌、夕さればは、夕しあればにて、夕方になればなり。すゝろは、ろろともいふ。なにどなく、むやみになどの意。悲しきやなそは、戀もせぬ身の、かくろろに悲しきは、如何なることぞとなり。○夕ぐれにの歌、時雨に劣らざりけりとば、まことの時雨に劣らざるほど、涙に袖

のぬれたりとなり。

第二十段

故式部卿の宮を、桂のみこ、せちによばひ給うけれど、れはしまさへりける時、月のいとれもしろかりける夜、御文たてまつり給へりけるに、

久方の空なる月の身ありせば行くとも見はてさみは見てまじとなんありける。

○桂のみこ、宇子内親王にて、宇多天皇の皇女なり。○せちに、切の字音にて、しきりにの意。○よばひ、よびの延音。戀ひ慕ふことなり。○久方の歌、久方のは空の枕詞。月ののは、の如きの意。行くとも見はて云々は、いつこへ行くとも人には知られで、心のまに君をば見まらすべしとなり。見てましのましは、假りに事を設けて、想像する時に用ゐる辭。こはみこの歌なり。

良少將、兵衛の佐なりける頃、監の命婦になん住みける。女のもとより、

柏木の森の下草かいぬとも身をいたづらになさずもあらなかへし、

かしは木の森の下草かいの世にかゝる思ひはあらとぞと思ふとなんいひける。



○良少將、良峯義方なり。大納言安世の曾孫にて、參議衆樹の子。天曆元年卒す。姓良峯にて、官少將なれば良少將といへり。さて義方の少將となりしは、承平六年にて、天慶八年には中將たり。○兵衛の佐、兵衛府の次官にて、職原鈔に、佐一人相當五位上、唐名武衛次將、五位殿上人中可、然之置任之、但英雄強不望之、即任少將故歟と見えたり。○監の命婦に住みける云々、監の命婦を妻として、其の家に通ふをいふ。當時の風、妻を我が許に迎へ入るゝ事なく、多く男の方より、女の家に通ひたりしなり。○かしは木の歌、かしは木の森は、兵衛の異稱を柏木といへば、良少將を添へ、又下草には、我が身をたどへて、いかに年老いたりとも、いたづらにふるさせ給ふなどなり。なんは希望の辞。古今集雜上、「大荒木の森の下草老いぬれば胸もすさめず刈る人もなし」○かへしの歌、老いの世には、老いの世までへの意。かゝる思ひは云々は、かやうに深き思ひはあるまじと思へば、なごか徒らにはなしまゐらすべきとなり。

第二十二段

良少將、太刀の緒にすべき革を求めければ、監の命婦なん、我が許にありといひて、久しく出さゞりければ、

あだ人のたのめわたりしうめかのは色の深さを見てや止みなん  
とよめりければ、監の命婦めてくつがへりて、もとめてやりけり。

○あだ人の歌、あだ人は浮薄なる人なり。たのめはたのましめたり。當にさすることな

り。そめかは、染革を、筑前の名所なる染川に取りなしたり。こは伊勢物語に、むかし、男、つくしまでいきたりけるに、これは色好むなり。好色者ぞと、簾の中なる人のいひけるを聞きて、「うめかはを渡らん人のいかでかは色になるてふことなかるべき」などあるによりて詠めるなるべし。○めでくつがへり、めづることの甚しきをいふ。

第二十三段

陽成院の二の皇子、後蔭の中將の女に、年ごろ住み給うけるを、女五の皇女を得たてまつりて後、さらにはざりければ、今ははしますまじきなめりと思ひ絶えて、いとあはれにて居たまへりけるに、いと久しくありて、思ひがけぬほごにおはしましければ、はものも聞えて、逃げて戸のうちに入りけり。かへり給うて、皇子あしたに、なごか年ごろの事も申さんとて、まうで來たりしに、隠れ給ひにしとありければ、詞はなくて、かくなん、

せかなくは絶えと絶えにし山水のたれしのべとか聲を聞かせん。

○陽成院の二のみこ、陽成院第二の皇子、三品彈正尹元平親王をいふ。○後蔭の中將、中納言藤原有穂の二男にて、母は肥後介安部與氏の女なり。○女五のみこ、依子内親王なり。宇多天皇の皇女にて、母は更衣源貞子。○なめり、なるめりの略。○はものも聞えず、後蔭の女のさまなり。○なごか年頃の云々、皇子の文の詞なり。まうで來りしの來りしは、行きししの意なり。こなたの行くは、かなたに取りては來たるなれば、行くことをも來たるといへ



第二十四段

る例、古文には少からず。○せかなくにの歌、せきとめられて、心にもわらず絶わし水ならば、水のづから井堰にもあまりて、聲をも立てつべけれど、水のれと水上より絶わし絶わし水は、いかでか聲も響も立つべきよしはあらん。われもそれと同じく、君のことは、わが心より深く思ひ絶われば、何しに物をも申し、聲をも聞かせ侍らんやとなり。

先帝の御時に、右大臣の女御、うへの御局にまうのほり給うて、おはしましやずると、下待ちたまうけるに、おはしまさゞりければ、

日ぐらしに君まつ山のほどゞぎすとはぬ時にうこゑもをしまぬ  
となん聞えける。

○右大臣の女御、三條の御息所なり。右大臣の女なればかく云へり。○上の御局、女御更衣などのまうのぼる所。○下待、心の中にて待つをいふ。○日ぐらしにの歌、日ぐらしには終日の意。君まつ山は、君を待つといふを松山にいひかけたり。身を郭公にたとへたる歌にて、意は明けし。

第二十五段

比叡の山に、念覺といふ法師の山籠にてありけるに、侍讀にてましくける大徳の早う死にけるが室に、松の木のかれたるを見て、

ぬしもなき宿の枯れたる松見れば千代すぎにける心地こりすれ

とよみければ、かの室にとまりたりける弟子ども、あはれがりけり。この念覺は俊子がせうとなりけり。

○山籠、山寺または山中の庵に籠るをいふ。○侍讀、東宮に讀書を教へ奉る役。○室、僧房なり。○ぬしもなきの歌、むかしの跡の、いたくかはれるさまをよめるにて、意は明なり。○せうと、せびとの音便にて兄なり。

第二十六段

桂のみこ、みりかに逢ふまじき人に逢ひ給ひたりけり。男のものとよみておこせ給へりけり。

うれをだに思ふことゝてわが宿を見さどないひり人の聞かくに  
となんありける。

○桂のみこ、上に出でたり。○みろか、ひろかなり。○うれをだにの歌、うれをだには、我が宿を見しといふことをだになり。だには俗言のサへに當る。思ふことゝて云々は、たとひ思ふことなりとも、口に出しては、人の聞くべければとなり。この歌、古今集(戀五)には、よみ人しらすとあり。

第二十七段

戒仙といふ人、法師となりて、山に住むあひだに、あらはひなどする人のなかりければ、親のものと、衣をなん洗ひにおこせたりけるを、いかなる折に



かありけん、むづかりて、親はらからのいふことも聞かで、法師になりぬる人は、かくうるさきこといふものかといひければ、よみてやりける。

今は我いづち行かまし山にても世のうきことはなほもたえぬか

○戒仙、後撰集の作者。○はらから、日本紀に、母弟をよめり、母兄も同じ、同母をいふ、自腹の義、腹族の義、同胞といふが如しと和訓栞に見ゆたり。○あらはひ、洗濯なり。○むづかりて、日本紀に憤の字をよめり。いさよほるをいふ。○かくうるさきこといふものか、かは反動の辞、かくうるさき事をいふものかは、いふべきものにあらすの意。○今はわれの歌、絶えぬかのかは、歎辞にてかなに同じ。古今集雜下、(躬恒)「世をすて、山に入る人山にても猶うき時はいづちゆくらん」

同じ人、かの父の兵衛佐、うせにける年の秋、家にこれかれ集りて、宵より酒のみなごす。いますぐらぬことの哀なることを、まらうどもあるじも戀ひけり。朝ぼらけに霧立ち渡れりけり。まらうど、

朝霧のなかに君ますものならば晴るゝまにゝうれゝからまゑといひけり。戒仙かへし、  
ことならば晴れずもあらなん朝霧のまぎれに見えぬ君と思はん

第二十八段

まらうどは、貫之、友則などになんありける。

○いますぐらぬことの云々、父の兵衛の佐の、いさよぬ事の哀なるをなり。○まらうど、客人。○あるじ、主人にて戒仙をいふ。○朝ぼらけ、夜のあけがた。○渡れり、渡りてありの約。○朝霧のゝ歌、ますは居るの敬語。晴るゝまにゝは、晴るゝまゝになり。晴るゝにしたがうての意。○ことならばの歌、ことならばは、同じくはの意。晴れずもあらなんは、晴れずまてもあれかしとなり。なんは希望の辞。○貫之、紀の貫之なり。孝元天皇の遠孫本道の孫、望行の子にて、有名なる歌人、また書を能くす。延喜年中、醍醐天皇の勅を奉じ、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等と古今和歌集を撰べり。なほ三十六歌仙傳に、延喜六年二月任、越前權少掾、御書所預、同七年二月任、内膳曲膳、同十八年二月任、美濃守、延長元年六月任、大監物、同七年九月任、右京亮、同八年正月任、土佐守、天慶三年三月任、玄番頭、同六年正月七日叙、從五位上、同八年三月廿八日任、木工權頭、同九年卒と見ゆたり。○友則、紀の友則なり。貫之の從兄にて、有友の子。また歌に巧なり、寛平九年正月土佐権となり、延喜四年正月、累進して從六位大内記に至る。

故式部卿の宮に、三條の右の大臣、こと上達部など類して参り給うて、基うち御遊などし給うて、夜更けぬれば、これかれ酔ひ給うて、物語し、かづけ物などせらる。女郎花をかざし給うて、右大臣、

第二十九段



女郎花をる手にかゝるしら露はむかしの今日にあらぬなみだか  
どなんありける。こと人々のも多かれど、よからぬは忘れにけり。

○故式部卿の宮、 上に出でたり。○三條の右の大臣、 藤原定方なり。内大臣高藤の二男、  
胤子の兄にて、式部卿の宮の伯父なり。延長二年正月廿二日任右大臣、大將如元、同四年正月  
七日從二位、同八年十二月十七日遷左近大將、承平二年八月四日薨、六十三、十一日賜贈從一位  
號三條右大臣と古今目錄に見えたり。○こと上達部、 他の上達部なり。上達部は三位以上  
の人をいふ。○類して、伴ひてなり。○かづけ物、 たまはりものなり。纏頭なり。○女郎花  
の歌、 むかしの今日に云々は、式部卿の宮のいまそがりし、むかしの今日をしのびたる意な  
るべし。

第三十段

故右京の大夫宗子かみむねこの君、なり出づべきほどに、我が身のえなりいでぬことを  
思ひ給ひけるころほひ、亭子の帝に、紀伊國より石つきたる海松をなん、奉  
たりけるを題にて、人々歌よみけるに、右京の大夫、

かさつ風ふけひの浦に立つ浪のなごりにさへやわれはまづまん

○右京の大夫、 右京職の長官なり。職原鈔に、左京職唐名京兆、掌京中事、昔者宅地以下  
悉京職之所知也、近代移檢非違使廳。大夫相當從四位下、唐名京兆尹、四位以上任之、或爲公卿兼官。  
右京職同左京、と見ゆたり。○宗子、 三十六歌仙傳に、源宗子、正四位下右京大夫、光孝孫是親王男、寛平六年正

月七日叙從四位下、改姓爲臣、八年正月任丹波權守云々、承平三年十月廿四日任右京大  
夫、天慶二年正月七日叙正四位下、同年卒と見ゆたり。○なりいづ、 立身するをいふ。○海  
松、 石に生ふるものなり。和名抄に、如松而無葉と見えたり。○沖つ風の歌、 沖つ風は、  
ふけひの吹くといふに掛けて、枕詞のやうに置きたり。吹飯浦ふけひの浦は和泉の國にも、紀伊の國にも  
あれど、こゝは紀伊の國のをいへること論なし。なごりは波殘の義にて、風の止みたるあとに、  
なほしづまらぬ波をいふ。石のつきたる海松に、我が身のなり出でがたく、沈み勝なるを寄せ  
て述懐せるなり。

第三十一段

れなじ右京の大夫、監の命婦に、  
よそながら思ひまよりの夏の夜の見はてぬ夢うはかなかりける

○よそながらの歌、 夏の夜のは短きことにいへり。一首の意は、いま逢ひ見ざりしをり、  
よそながらこがれまゐらせしよりも、見はてぬ夢のやうに、いとも短き逢ふ瀬は、なほさらは  
かなかりしよとなり。

亭子の帝に、右京の大夫よみて奉りける、

あはれてふ人もあるべく武藏野の草とだにころ生ふべかりけれ  
また、

第三十二段



とぐれのみ降るやま里の木の下はをる人がらやもりすぎぬらん  
とありければ、願み給はぬ心はへなりけり。帝御覽じて、何事ぞ、これを心得  
ぬとて、ちうづの君に見せ給うけると聞さまかば、かひなくなんありと語  
り給うける。

○あはれてふの歌、 此は古今集雜上（よみ人しらす）に「紫の一もとゆるに武藏野の草は皆  
がら哀とぞ見る」とあるにて其の意明なるべし。○しぐれのみ歌、 をる人からは、居る人  
がらを、折る人からにかけ、もりすぎぬらんは、上の撰びにもれて、同じ地位に有り過ぐるを、  
時雨のもりすぎるに掛けていへり。○願み給はぬ心はへなりけり、 作者の自註なり。○ちう  
づの君、 ちうづは僧都なるべけれど、誰とも知りがたし。○聞きしかば、 宗千のなり。○  
語り給うける、 作者になり。

第三十三段

躬恒が、院によみて奉りける、

立ち寄らん木のもともなさ鶯の身は常盤ながらに秋がかなしき

○躬恒、 凡河内躬恒なり。有名なる歌人にて、貫之、忠岑等と並び稱せらる。三十六歌仙傳  
に、寛平六年二月廿八日任甲斐少目、延喜七年正月十三日任丹波權目、御厨子所、同十一年正月  
十三日任和泉權掾云々とあり。○院、 享子院なり。○立ち寄らん木、 上の句は、這ひ

かゝらん木の本もなさ鶯に、わが身のなり出づべきたよりなきをたどへ、下の句は、躬恒は目  
の官にて、縁杉の地位なれば、五位の人の緋の袍着るを、他の美しき紅葉によそへて、見榮な  
さ鶯の身は、ろをいと美しく思ふよしなり。

第三十四段

右京のかみのもとに、女、

色うとはおもほえずともこの花は時につけつゝおもひ出でなん

○色ぞとはの歌、 色はよき色の意。此の花は、我が身をたどへていへり。おもほえずは思は  
れずなり。思ひ出でなんは、思ひ出で給へかしの意。なんは希望の辞。

第三十五段

堤の中納言、ちうちの御使にて、大内山に、院の帝おはしますに参り給へり。も  
の心細げにておはします。いと哀なり。高き所なれば、雲はしもより、いと多  
く立ちのぼるやうに見えければ、かくなん、

白雲のこのへに立つ峰なればおほうち山といふにがかりける

○堤の中納言、 藤原兼輔なり。良門の孫にて、左中將利基の六男。延喜年中從四位上參議と  
なり、延長五年正月從三位中納言に至る、加茂川の堤に家居せしかば、堤の中納言と稱せり。  
○大内山、 山城國葛野郡にあり。○しら雲の歌、 このへといふより、おほうちとぞけ  
たるなり。

第三十六段

伊勢の國に、前齋宮おはしましける時に、堤の中納言、勅使にて下り給うて、



くれ竹のよゝのみやこと聞くからに君はちとせのうたがひもなし  
御かへしは聞かず。かの齋宮のねはしますところは、竹の都となんいひける。

○前齋宮、 柔子内親王にて、宇多天皇の皇女なり。齋宮とは、天皇の即位し給ふ時に、未婚の内親王、または女王を簡まびて、伊勢の大神宮に奉仕せしめ給ふをいふ。垂仁天皇の皇女豊御入姫に始り、後鳥羽天皇の皇女齋子内親王にて絶ゆ。其間四十二人なり。○中納言、 前段にいふべきを落したれば、こゝに註すべし。職原鈔に、中納言今外官也、職官古來有之、持統天皇六年始置此官、其後罷之、大寶二年、定官位令日、無此官、仍爲令外今外官也、職官古來有之、、但慶雲四年又置之、相當三位也、四位參議任之時、執筆人即書從三位、人數近代爲十人、先朝被言八人、其後又不、凡任當官者、參議勞廿年以上、檢非違使別當、大辨宰相、攝政關白子、爲二位三位中將者、近代大臣也、三位中將、等直任非舊職者也、納言以上殊可撰其人、之官也と見ゆたり。○くれ竹の、歌、くれ竹は、竹の節と節との間を、よといふより、よといはん爲に置きて、齋宮の御住所を竹の都といへば、しもの都といふにつけて、竹の都ときかせたるなり。よゝの都とは、齋宮の久しく絶えせぬことをいふ。この歌、新勅撰集賢の部に出でたり。

第三十七段

出雲がはらから、一人は殿上して、われはえせざりける時に、よみたりける、  
かく咲ける花もこそあれわがためにおなじ春とやいふべかりける

○出雲がはらから、 出雲は人名にや。はた出雲の守のはらからなといふ意にや、若し然らば、

出雲の下、脱落あるべし。○殿上して、 昇殿を許されたるなり。○かく咲けるの歌、 かく咲ける花とは、殿上したる方をいひ、ろれにむかへて、未だえせざる我は、花も咲かずのこゝろにて、同じ春とは云ふべからずと羨みたるなり。春とやのやは反動の辞。

第三十八段

先帝の五のみこの御女は、一條の君といひて、京極の御息所の御許に、さぶらひ給うけり。よくもあらぬことありてまかて給うて、ゆさの守の妻にいて、  
ますがりて、

たまさかに問ふ人あらばわたの原なげさほにあげていぬと答へよ

○先帝の五のみこの御女、 清和天皇の皇子貞平親王の女なり。○ゆさ、 壹岐なり。○たまさかにの歌、 たまさかにはまれくになり、わたの原は海原なり。なげさほにあげては、歎きの聲を高くわぐるをいひて、船に帆をわぐることをうへたり。いぬは行くなり。

第三十九段

伊勢の守もろみちの女を、正明の中將の君にあはせたりける時に、そこなりけるうなるをば、左京の大夫呼び出で、かたらひて、あじたによみてれこせたりける、

おく露のほどもを侍たぬあさ顔は見ずなかくあるべかりける

○伊勢の守もろみち、 詳ならず。○正明、 源正明なり。南院式部卿是忠親王の男。○誓



第四十段

髪かみ、いまだ髪あげせざるほどの女をいふ。○おく露の歌、うなむを朝顔にたどへてよめり。れく露の云々は、極めて短くはかなき逢ふ瀬をいふ。なか／＼はかへりてなり。一首の意は明けし。この歌、新勅撰集(戀三)には、上の句、しら露のおくをまつまの朝顔はどしたり。桂の皇女みかみよ、式部卿の宮すみ給うける時、その宮よさぶらひけるうなるなん、このをどと宮を、いとめてたしと思ひかけ奉りけるをも、え知り給はざりけり。螢の飛びありさけるを、かれ捕へてと、この童よの給はせければ、汗衫の袖に、螢を捕へて、包みて御覽せさすとて、聞えさせける。

つゝめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり

○式部卿の宮、上に故式部卿の宮とある宮なり。○汗衫あせあらい、小兒及び官女など、初夏の頃の上着なり。○つゝめどもつづめどもの歌、夏虫は螢をいふ。わが思ひの包みきれぬを、かざみの薄き袖より、螢の光りの洩るゝにたどへたるなり。この歌、後撰集夏の部にも出でたるに、其の詞書には、桂のみこの、螢を捕へてといひ侍りければ、童のかざみの袖につゝみてとありて、戀のれもぶきにはあらず。

第四十一段

源大納言の君の御許に、俊子は常にまゐりけり。曹子そうしして住む時もありけり。をかしき人にて、よろづのことを常にいひかはし給ひにけり。つれづれなる

日、このれど、俊子、またこのむすめ姉にあたるあやつ子といひてありけり。母に以て心もをかしかりけり。またこのれど、よぶ子といふ人ありけり。それも物のあはれ知りて、いと心をかしき人なりけり。この四人つどひて、よろづの物語し、世の中のえかなきこと、世間のあはれなることいひくゝて、かのおとこのよみ給うける。

いひつゝも世ははかなさを形見にはあはれといかて君に見えまじ

とよみ給うければ、誰もく返しはせて、集りてよとなん泣さける。怪じかりけるものどもにこそはありけれ。

○源大納言、清陰なり。○曹子して、曹子は部屋なり。部屋をもちての意。○またこのむすめ姉にあたる、俊子の女にて、最も姉なるをいふ。○いと心をかしき人なりけり、をかしは風流なるをいふ。○いひつゝもの歌、見ゆましの見ゆは見られの約。一首の意は、今は口にはがり、はかなしくと云ひてあれど、まことに世はかなはきものにて、我どていつはなくならんも知れねば、若し亡からん後には、切めて君に哀としのばるべき形見を、いかにもして残したきものぞとなり。この歌、新勅撰集雜三に出でたり。○よ、れい／＼と泣く聲なり。



惠秀といふ法師の、或人の御驗者つかうまつりけるほどよ、とかく世の中よ  
いふ事のありければ、よみたりける。

里はいふ山よはささぐしら雲のそらよはかなき身をやなりなん  
となんありける。またこの人の御許によみたりける。

朝ぼらけわか身は庭のしもながらなにを種にてこころれひけん

○惠秀、比叡山の法師なり。○或人、この人は女なり。○御驗者つかうまつりて、加持、  
祈禱などするをいふ。○とかく世の中に云々、惠秀の、この女と、浮名の立ちたるなり。○  
里はいふの歌、さとはいふ云々は、里にも山にもこの事を云ひ騒ぐをいふ。○朝ぼらけの歌、  
庭のしものしものは、霜を下にいひかけたり。女は高さ人なりしなるべし。心れひけんとは、女  
を戀ふる心のさとしたるをいふ。

この大徳坊よしける所の前に、切懸をなんせさせける。そのけづりくづに書  
きつけゝる。

籬ずる飛彈のたくみのたつぎ音のあなかしがましなうや世の中

などいひくして、行ひじに、深き山に入りなんとすと云ひていにけり。ほどへ  
て、何所にかあらんといひて、深き山よ籠り給ひぬとありしは、いづとすと云

ひやり給ひたりければ、

何ばかり深くもあらず世のつねの比叡を外山と見るばかりなり

となん云ひたりける。横川といふ所よあるなりけり。

○さりかけ、板にて牆の如く圍ひたるもの○まがきするの歌、まがきするは、切懸をつく  
るをいふ。飛彈の匠工は、たゞ木工をいふ。古へ飛彈の國より、毎年木工をみつぎ奉りしより、  
かくいふ事となれり。たつぎねどのたつぎは、鑼にて、又の廣き斧なり。さて上の句は、次の  
かしがましと云はん爲に置きたる序詞にて、音のゝのは、の如くの意。あなかしがまし云々は、  
これも、かの女と立ちし浮名の、云ひ騒がるゝをよめるにて、なせ世の中は、かくかしましき  
ものにやとなり。○何所にかあらんといひて云々、かの女の、惠秀のいつこに籠れるならん  
と云ひて、次の消息したるなり。○何ばかりの歌、比叡は比叡山にて、山城國愛宕郡にあり、  
外山は端なる山をいふ。端山なり。さて比叡を外山と見るとは、横川の山深き所に居ればなり。  
○横川、叡山三堂の一にて、往生要集記に、東塔名止觀院、西塔名寶塔院、横川名楞嚴院  
とあり。

おなじ人に、ある人、山へのぼり給ふべき日は遠くやある。いつとといへりけ  
れば、

登りゆく山の雲井のとほければ日も近くなるものにありける



とすいひれこせたりける。かくのみよからぬことの、あるが上に出て來ければ、

のがるともたれか着ざらんぬれ衣あめの下にし住まんかざりは  
といひけり。

○登りゆくの歌、雲井はたゞ雲のことなり。日も近くなるの日は、空なる日を、時間の日に  
かけたり。○かくのみよからぬことの云々、こゝにいへる或人も、惠秀と相知れる女などな  
るべし。それより、山へのぼるべき日は、いつぞと問ひたるは、名残を惜みての故なるべく、  
それをさしてかくは云へるなり。○通るともの歌、ぬれ衣は無實の浮名をいふ。あめの下の  
あめは、天を雨にかけたり。

第四十五段

堤の中納言の君、十三のみこの母御息所を、内裏よ奉りけるはとめよ、帝はい  
かゝ思召すらんなど、いとかしこく思ひ歎き給うけり。さて帝よりて奉り  
給うける、

人の親の心はやみよあらねども子をおもふ道よまごひぬるかな

先帝いとあはれと思召したりけり。御返はありけれど、人えしらす。

○十三のみこ、醍醐天皇の皇子彈正尹章明親王なり。○母御息所、桑子にて、即ち兼輔の

女。○帝はいかゞ思召すらんなど云々、親の心には、容姿より心操まで、何一つ、足はぬ所  
なく生ひ出でたりとは思へど、帝の御目には、なほいかゞと氣遣ひたるなり。○かしこく、  
甚しくの意。○人の親の歌、後撰集雜一に出でたり。子を思ふあまりには、親の心のまご  
はるよしにて、人情をありのまよにのみ出でたるが、いともあはれ深く、ろごろに涙ぐまる  
ゝ心地す。後撰集の詞書には、太政大臣（忠平をいふ）の左大將にて、相撲のかへり、あるじ  
し侍りける日、中將にてまかりて、これかれまかりあがれるに、やんどとなき人、二三人は  
かりどとめて、まらうとあるじ、酒あまたゝびの後、酔に入りて、子どもの上など申しけるつ  
いでにとあり。○先帝、醍醐天皇なり。

第四十六段

平仲、開院のごに絶えて後、ほどへてあひたりけり。さて云ひおこせける、  
うちとけて君は寝つらんわれはしも露のおき居て戀にあかした  
女、かへし。

白露のおさふし誰を戀ひつらん我は聞さおはずいそのかみにて

○平仲、平定文なり。字を仲といふより、平仲と號す。右中將好風の男にて、刑部卿茂王の  
孫。延喜十九年正月左兵衛佐となり、同廿二年正月從五位上に叙せらる。極めて好色の名あり  
し人なり。○開院のご、源宗千の女なり。○うちとけての歌、中絶せし後なれば、君は何  
ども思すまじく、打ちとけて寝たまひつらんが、我は夜すがら起き居て、つくぐと戀ひに明



第四十七段

し侍りつとなり。露のは、露の降るを置くといへば、たゞ起きと云はん料にて、次の白露のも  
ねなじ。○しら露の歌、さうねはずは、きもたずといふに同じ。聞き入れざる意なり。  
いろのかみは、ふるにかゝる枕詞なるが、轉じては、たゞ物事の古き事に用ゐるより、我が身  
のふるされたるを、たはむれてかく云へるなり。歌の意は、君の、起き居て戀に明しつとは、  
誰をしか戀ひ給ひしならん。我は君にふるされし身なれば、さる事は聞されはずとなり。

陽成院の一條の君、

れく山よこゝろを入れたつねずばふかさ紅葉の色を見まじや

○れく山にの歌、意はさこえたり。

第四十八段

先帝の御時、刑部の君とてさぶらひ給うける更衣の、里よまかり出て給うて、  
久しう参り給はざりけるよつかはしける、

大空をわたる春日のかげなれやよそにのみじてのどけかるらん

○先帝、宇多天皇。○里にまかり出でたまうて、更衣の退出して、我加里第にかへりたる  
なり。○大空をの歌、なれやはなればにやなり。よろにのみしては、里第にのみあるをいふ。  
更衣の久しく参らざるを、帝のいと戀しがり給へるなり。この歌、新古今集戀一に入れり。

第四十九段

おなト帝、齋院のみこの御許よ、菊よつけて、

行きて見ぬ人のためよと思はずはたれかをらまじとがやどの菊

齋院の御返事、

とがやどの色をりとむる君なくばよそよも菊のはなを見ましや

○齋院の皇女、君子内親王なり。齋院記に、宇多天皇第十皇女也、母女御橘義子、参議廣相  
之女也、寛平五年卜定云々と見ゆ。齋院とは、天皇即位の時、未婚の内親王または女王をぬら  
びて、山城の加茂神社に奉仕せしめ給ふをいふ。嵯峨天皇の皇女有智子内親王に始り、土御門  
天皇の皇女膳子内親王にて絶えたり。其の間三十四代なり。○行きて見ぬの歌、行きて見ぬ  
は、齋院の方より云へるなり。誰か折らまし云々は、帝のいたく賞翫し給ふ菊を奉らせ給ふよ  
しなり。○わがやどのの歌、色をりとむるは、美しさ色のを折り止むるをいふ。よろにも  
は、よろにてももの意。

戒仙山にのぼりて、

雲ならで小高き峯に居るものはうさ世をそむく我が身なりけり

○雲ならでの歌、意は聞えたり。

齋院よりうちよ、

おなじ枝をわきて霜れく秋なれば光りもつらくれもほゆるかな

御返じ、

第五十二段

第五十段



花の色を見ても知りなん初霜のこゝろわきてはかかじとぞ思ふ  
○れなむの歌、連枝の御中にも、隔てればしますよしと、日影のうつるとうつらざる  
あるより、同じ枝ながら、霜のれくにも、深き淺きがあるに寄せてよまれたるなり。○花の色  
をの歌、花の色は、同じ枝なる花の色なり。その等しきを見て、隔てなきよしは知らるべ  
しとなり。

これもうちの御みま

わたつみの深き心をかきながら恨みられぬるものよりありける

○御、御歌といふべきを省けるなり。ねはん(御)はねはみ(大御)の音便。○わたつみの  
歌、わたつみは海なり。深きと續けたり。ねきながら、うらみられ、皆海の縁語。我は  
と心深く思ひ居れども、なほかやうに恨まらるるものにてありしよとなり。

陽成院よりありける、坂上のとほみちといふ男、同じ院よりありける女、障る事あ  
りて逢はざりければ、

秋の野をわくらん鹿もわがごとくしげさはりよ音をば鳴くらん

○坂上のとほみち、不詳。○同じ院にありける女、とほみちと深く思ひ合へる女なるべ  
し。○秋の野をの歌、しげさはりとは、野への草などの繁さをいふべし。音をば鳴くは、

聲を立て鳴くをいふ。

右京の大夫宗于の君の三郎よあたりける人、はくやうをして、親も同胞せらから  
も憎まれければ、足の向かん方へ行かんとて、人の國へいさけり。さて思ひけ  
る友たちのもとへ、よみておこせたりけり。

しをりして行く旅なれどかりそめの命しらねばかへりともせじ

○三郎、三男なり。郎は韻會に、男子之稱とあり。○はくやう、博奕なり。○足の向かん  
方へ云々、何所とさして行くべき方もなきよしなり。○思ひける友、心隔てぬ友なり。  
○しをりしての歌、しをりは、責めさいなまるゝ事をしをるといへば、るを、山などに入る  
時、かへり道のしるしに、木草の枝を折りかけなせするをいふ、道案内の意の案あんにかけたり。  
かへりしもせじのしは強辭。

男限りなく思ひける女を置きて、人の國へいにけり。いつしかと待ちけるよ、  
死にさと云ひて來たりければ、

今こんといひてわかれし人なればかざりと聞けどなほす侍たるゝ

となん云ひける。

○いつしかと云々、男の歸り來る日を、いつか〜と待つなり。○今こんとの歌、意は明けし。



越前の權守兼盛、兵衛の君と云ふ人にすみけるを、年ごろはなれて、又いさけり。さてよみける。

夕されば道も見えぬとふるさとはもどこし駒にまかせてゆゆく女、かへじ。

駒にこそまかせたりければかなくも心のくるとおもひけるかな

○越前の權守兼盛、光孝天皇の孫にて、篤行の三男なり。三十六歌仙傳に、天慶九年五月五日叙從五位下、天曆四年任越前權守、年改姓爲臣云々、康保三年正月七日叙從五位上、天元二年八月任駿河守、正曆元年十二月卒とあり。○兵衛の君、參議兼茂の女にて、後撰集の作者。○年頃、數年この方なり。○夕さればの歌、ふる里はもと住みなれし地をいふ。もどこし駒に云々は、駒は道を忘れぬ者に古くより云へればなり。○駒にころの歌、心の來るとは、心より來るの意。この歌、二首共に、後撰集戀五に、よみ人しらすとして出で、男の歌、一の句、夕闇は、女の歌、二の句、あやなくもとあり。

近江の介平中興の、女をいといたりかしづきけるを、親なくなりて後、とかくはふれて、人の國にはかなき所にすみけるを、哀れがりて、兼盛がよみておこせたりける。

をちこちのひと目まれなる山里にいへおせんとはおもひさや君とよみてなんおこせたりければ、返事もせてよと泣きける。女もいとらうる人なりけり。

○平中興、古今集目錄に、正五位下行内膳正忠望王次男、實右大辨秀長一男云々、昌泰三年八月任少内記、同月廿日轉大内記、延喜三年正月十一日兼近江權少掾、四年正月七日叙從五位下、廿五日任遠江守、十年正月十三日任讚岐守、十五年正月七日叙從五位上、十二日任近江守と見ゆ。○かしづきけるを、かしづきは、大事にはぐむをいふ。○親なくなりて、親は女の親にて、中興をいふ。○はふれて、零落してなり。○をちこちの歌、これも後撰集雜二に、むかし、同じ所に宮づかへし侍りける女の、男につきて、人の國に落ち居たりけるを聞きつけて、心ありける人なれば云ひつかはしける、よみ人しらすとして出で、次に「身をうしど人しれぬよを尋ねこし雲の八重たつ山にやはあらぬ」といふ女のかへしあり。

おなじ兼盛陸奥國にて、閑院の三の御子の女にありける人、黒塚といふ所に住みけり。そのもとにれこせける。

みちのくの安達の原のくろづかに鬼ともれりと聞くはまことかといひたりけり。かくて其の女を得んといひければ、親、まだいと若くなん



ある。今さるべからんをりと云ひければ、京よゆくとして、山吹につけて、花ざかり過ぎもやするとかはづ鳴く井手の山吹うしろめたしもといひけり。

○開院の三のみこ、開院は清和天皇の皇子貞元親王をいふ。三のみこは親王の第三子従五位下源兼信なり。○みちのくの歌、安達の原は、岩城國安達郡にあり。鬼は黒塚とあるより、美女をたはひれて云へり。この歌、拾遺集雜下に、みちのくに名取の郡黒塚といふ所に、重之が妹あまたありと聞きて、いひつかはしけり、兼盛として載せたり。○今さるべからん折に云々、嫁してもよかるべき程にならん折にとなり。折にをのをは強辞。○花ざかりの歌、女を山吹によせて、盛り過ぐるを氣遣へる意なり。蛙鳴くは、井手は山吹をはじめ、蛙の名所なれば、やがて其所の物を取りて、井手の序詞としたり。井手は山城國相樂郡にありて、井手の里、井手の玉川などいふ、皆この地なり。うしろめたしは、眞名伊勢物語に、後目痛どかけり。うしろ安きの反にて、氣遣はるゝ意。もは歎辭なり。古今集春下、「蛙なく井手の山吹散りにけり花の盛りにあはましものを」

かくて名取の御湯といふことを、恒忠の君の妻よみたりけるといふなん、この黒塚のあるじなりける。

大空の雲のかよひ路見てしがなとりのみゆけばあとはかもなし

とよみたりけるを、兼盛のおほさきみ同じ所を、

鹽釜の浦よは海人や絶えよけんなどすなごりのみゆるときなき

となんよみける。さてこの心がけし女、こと男して京よ上りたりければ、聞きて、兼盛、上り物し給ふなるを、告げ給はせと云ひたりければ、井手の山吹うしろめたしもと云へりける文を、これなん陸奥國のつとて、ねこせたりければ、をこと、

年をへてぬれわたりつるころも手を今日の涙に朽ちやしぬらん

といへりけり。

○名取の御湯、陸前の國名取郡にある温泉なり。○恒忠、誰とも明ならず。兼盛の心かけたる女は、この人の妻になれること、次に黒塚のあるじといへるは、前に鬼こもれりとよめる歌をうけて、かの女を指せるにて知らる。○大空の歌、とりのみゆけばは、鳥のみ行けばにて、これに名取の御湯をかくしたり。あとはかもなしは、跡かたもなしなり。この歌、拾遺集(物の名の部)には、一の句、覺束などしたり。○兼盛のねほさきみ、兼盛は王孫なれど、既に平姓を給はりたれば、王とは云ふまじき理ながら、もとよりはかなき物語なれば、たゞれはやうにかく云へるなるべし。○鹽釜の歌、こは、なごすなごりのみゆる時なきといふ



第五十九段

に、名取の御湯をかくせり。○こと男して云々、恒忠の妻となりて、京に上りしなり。○つと、土産なり。○年をへての歌、いつか〜と待ち渡りて、年頃ぬらし來りし袖も、いよゝ甲斐なき今日の涙に、朽ちも果てぬべしとの意なり。

世の中をうんじて、筑紫へ下りける人、女の許へれこせたりける、

忘るやと出で、來しかどいづくにもうさは離れぬものにぞありける

○うんじて、倦みてなり。厭はしくなりてなり。○忘るやとの歌、忘るやとは、世の憂さを忘るゝかとなり、うさは離れぬのうさは、憂さに宇佐をかけたなり。宇佐は豊前の國宇佐郡にありて、有名なる官幣大社宇佐神宮の所在地なり。

第六十段

五條の御といふ人ありけり。男のもとに、我が像を繪にかきて、女のもえたるかたをかきて、烟をいと多くくゆらせて、かくなんかきたりける。

君を思ひなま〜し身をやく時はけぶり多かるものにぞありける

○五條の御、山陰中納言の姪なり。○君を思ひの歌、思ひのひは火にかけたり。なま〜し身は、生々し身なり。

第六十一段

亭子院に、御息所たちあまた、御曹子して住み給ふに、年頃ありて、河原の院のいとおもしろく作られたりけるに、京極御息所、一所の御曹子のみして渡

らせ給ひにけり。春のことなりけり。とまり給へる御曹子ども、いと思ひの外に、さう〜しきことをれもほしけり。殿上人など通ひ参りて、藤の花のいとおもしろきを。これが盛をだに御覽せでなごいひて見ありくに、文をなん結ひつけたりける。あけて見れば、

世のなかの浅き瀬にのみなり行けば昨日のふちの花とて見れ

とありければ、人々見て。限なくあはれがりけれど、たが御曹子のと給へるともえ知らざりけり。男どもの云ひける、

藤の花色のあさくも見ゆるかなうつろひにけるなごりなるべし

○亭子院、御息所、御曹子、みな上に註せり。○河原の院、拾芥抄に、六條坊門南、萬里小路東八町云々融大臣家、後寛平法皇御所、本四町京極西、院六條東院と見ゆ。○一所の御曹子のみして、一所は御一人の意。たゞ京極の御息所、御一人だけ連れさせ給ひてなり。○とまり給へる云々、亭子院に止れる他の御息所たちなり。○さう〜しき、淋しきなり。○殿上人など通ひ参りて、亭子院になり。殿上人は、昇殿をゆるされたる四位五位の官人をいふ○藤の花のいとおもしろきを云々、殿上人たちの、亭子院にれもしろく咲ける藤の花を見て、この盛をさへ御覽せで、河原院へ御幸ありしことよなと云ひつゝ眺めあるくに、ろの



第六十二段

藤に、誰のしわざにかあらん、文を結びつけたりと成り。○世の中の歌、こは院の御心かはりて、我が身の寵れとるへたるよしなり。昨日のふちは、淵を藤にいひかけたり。古今集雑下、(よみ人知らず)「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬となる」○藤の花の歌、うつろひにけるは、院の御心のうつろひたるをうへたり。

のうさんの君といひける人、淨藏とはいと一なく思ひ交すなかなりけり。限なくちぎりて、思ふ事をも云ひ交しけり。のうさんの君、

おもふてふ心はことにありけるをむかしの人になにを云ひけん

と云ひたこせたりければ、淨藏大徳のかへし、

ゆくすゑのすくせをしらぬ心には君にかぎりの身とすいひける

○のうさん、不詳。○淨藏 雲居寺の僧にて、三善清行の八男なり。○思ふてふの歌、

まことに思ふといふ心は、別に君に對してころ持てるものを、昔も思ふなど云ひし人ありしが、それには如何なることを云ひしならんとなり。○行くすゑの歌、宿世は宿縁といふに

同じ。ささの世の縁なり。前世の約束なり。歌の意は、行くさき君とかやうに思ふべき、宿世あるを知らぬ心には、昔思ひし人にも、我は君を思ふかぎりの身といひたりしとなり。

故右京の大夫、人の女を忍びて待たりけるを、親聞さつけて、のしりてあは

第六十三段

ぜざりければ、佗びて歸りにけり。さてあしたによみてやりける。

さもこそは峯のあらしは荒からめなびさし枝をぞらみてそこし

○親、女の親なり。○のしりて、口やかましく制してなり。○さもころはの歌、親を嵐に、女を靡さし枝にたごへたり。

第六十四段

平仲、にくからず思ふ若き女を、妻の許にゐて来て置きたり。悪げなる事どもを云ひて、妻遂に遂ひ出しけり。この妻にしたがふにやありけん、らうたしと

思ひながらえとめず。いちはやく云ひければ、近くだにえ寄らて、四尺の屏風によりかゝりて、立てりていひける、世の中の思ひの外にあること、こと世界にものし給ふとも、忘れて消息し給へ。おのれもさなん思ふと云ひけり。この女、つゝみに物など入れて、車取りにやりて待つほどなり、いとあはれと思ひけり。さて女いにけり。とばかりありてれこせたりける。

忘らるなわすれやしぬるはる霞今朝立ちながらちぎりつること

○め、本妻なり。○らうたし、可愛しなり、○いちはやく云ひければ、いちはやくはするどくの意。妻の悪げなる事を、鋭く云ひければなり。○おのれもさなん思ふ、平仲の詞なり。○いとあはれと思ひけり、平仲の心なり。○とばかりありて、しばらくありてなり。



○忘らるるの歌、忘らるるは、忘れ給ふの意。忘れやしぬるは、忘るべきか忘れはせぬの意。春霞は、今朝をへたて、立ちといふにかゝれる序詞。

南院の五郎、三河の守にてありける、承香殿にありける伊豫の御をけさうとけり。來んと云ひければ、御息所の御許に、うちへなん參るといひれさせたりければ、

玉すだれうちどかくるはいとく影を見せじとおもふなりけりといへりけり。又、

なげきのみしげき深山のほとゝぎす木隠れ居ても音をのみうなくなどいひけり。かくて來たりけるを、今はかへりねとやらひければ、

死ねとてやとりもあへずはやらはるゝいといさ難き心地ころすれ返しをかしかりけれごえ聞かず。

○南院の五郎、南院は、光孝天皇の皇子是忠親王といふ。日本紀畧に、延喜廿二年十月廿二日、入道式部卿是忠親王薨、號南院と見えたり。五郎は、親王の第五子今扶王なり。○承香殿、光孝天皇の皇女源和子なり、醍醐天皇の女御となり、承香殿に居る。天歷三年薨す。承香殿は、在仁壽殿北と和名抄に見えたり。○伊豫の御、承香殿の官女なり。○けさう、

懸想の字音にて戀のおもひをかくるをいふ。○來んといひければ、五郎のなり。○玉すだれの歌、うちどは内外にて、伊豫の御のうちへ參るといふをうへたり。○なげきのみの歌、なげきのきは木にいひかけたり。○今はかへりぬ、ねは命する辞。今は歸れよとなり。○やらひければ、やらひは遠ふなり。○死ねとてやの歌、いさは、往きに生きをかけたなり。また雪の降る夜來たりけるを、物はいひて夜更けぬ。歸り給ひぬといひければ、かへりけるほどに、戸をさしてあけざりければ、

われはさば雪ふる空に消えねとや立ちかへれどもあけぬ板戸は  
となん云ひて居たりける。かく歌もよみ、あはれに云ひぬたれば、いかゞせま  
しと思ひて、のぞきて見れば、顔こそ猶いと悪げなりしかとなん語りしとか。

○戸をさして、歸るべき道の戸なるべし。○我はさばの歌、さばはさらばなり。あはぬ板戸は、板戸をわけざるはの意。戸を閉ちて我を苦しむるを、此處に、消えねとの事かどの意、消えねは雪に縁をひきたる詞なり。○いかゞせまし、いかゞせん、今宵は呼び入れて、とまらすべきかとなり。

俊子、千兼を待ちける夜、來ざりければ、

小夜ふけていなれほせ鳥のなさけるを君がたゞと思ひけるかな



○小夜ふけての歌、 いたく待ちわびたるさまなり。稻負鳥は、古今三鳥の一にて、あるは雀ども、雁ども、あるは山鳥ども、水鷗どもいひて定かならず。

また俊子、雨降りける夜、千兼を待ちけり。雨にやさはりけん、來たらざりけり。とぼれたる家にて、いたく漏りけり。雨のいたく降りしかば、え參らずなりにき。さる所にいかて物し給ひつると云へりければ、俊子、

君を思ひまななきやぞ思へどもこよひの雨はもらぬまがなき

○こぼれたる家、 壊れたる家なり。○雨のいたく降りしかば云々、 千兼よりの詞なり。

○君を思ひの歌、 君を思ひ云々は、君を思ふ思ひに隙のなきといふを、屋根などのすきまなきにいひかけたり。

枇杷殿より、俊子が家に柏木のありけるを、折りに給へりけり。折らせてかさつけて奉りける。

わが宿をいつかは君がならしはのならしがほには折りにれこせる御かへし。

かしは木に葉守の神のましけるを知らて折りしたりなさるな

○枇杷殿、 左大臣藤原仲平なり。枇杷殿は其の住第の名にて、拾芥抄に、左大臣仲平公宅、

昭宣公家、近衛南、室町東、或鷹司南、東洞院西一町と見たり。○折りに給へりけり、使を折りにやりたるなり。○わがやぶをの歌、 いつかは君が云々は、 いつかは君がわが宿に來馴し給ひしと云ふを、ならしはに云ひかけたり。なちしはのは、馴しの枕詞なり。○かしは木にの歌、 かしは木もならしはも同じ種類なり。葉守の神は樹木を守る神をいふ。また柏の葉を守る神とも。こは俊子に千兼といふぬしあるを知らで、折りにやりしといふを、たはむれてかくよまれたるなり。この歌、二首共に、後撰集雜二に出で、其の詞書に、枇杷の大臣、よう待りて、櫓の葉をもとめ待りければ、千兼があひ知りて待りける家に、取につかはしければとありて、俊子の歌、いつかは君がならしはのを、いつならしてかならの葉を、仲平の返歌、かしは木にを、櫓の葉のどしたり。

忠文が、みちのくの將軍になりて下りける時、それが息子なりける人を、監の命婦しのびて語らひけり。うまのはなむけに、めとりくりの狩衣、禰禰幣などやりたりける。かの得たる男、

よひくに戀ひしさまさるかり衣心づくこのものにうありける  
とよみたりければ、女めで泣きけり。

○忠文がみちのくにの云々、 忠文は藤原忠文なり。平慶三年平將門叛するにあたり、右衛門督となり、征夷大將軍に拜せられて、關東に下りし事あれば、この時を云へるなるべし。○う



まのはなむけ、 餞別なり。古へ、旅行く人を送るには、其の人の乗りたる馬の鼻を、行く方に向けて、名残を惜み、恙もなくして歸り給へなと云ひ語らひしより起る。○めどりくりの狩衣、めどちくりのは、ところく括りたる絞染をいふならんとぞ。狩衣は、もとは鷹狩の時用のしもの（よりて狩衣の名あり）なれど、後には官服となれり。絹にて作り、夏はすし一重、冬は多く紫色の裏をつく。盤領にて袖括あり。五位以上は織紋あるを、六位以下は無紋なるを用ゐる。帯にて腰をしめ、袴は指貫をはく。○裱襦、（武官の禮服にて、和名抄に、裱襦、唐韻云襦音兩襦衣名也、釋名云兩襦今按兩或作襦和名字知加介其一當胸、其一當背也云々と見ゆ。○幣、道中つゝがなからんため、道祖神へ祈る手向の料にとてなり、○よひくりにの歌、よひくはよるくりにのことにて、よひは初夜をいへるにあらす。

れなむ人に、監の命婦、楊梅をやりたりければ、

みちのくの安達の山もゝろとも越えはわかれの悲しからむを  
 となん云ひける。さて堤なる家に住みける。さて鮎をなん取りてやりける。

加茂川の瀬にふす鮎のいを取りて寝てころあかせ夢に見えつや

かくてこの男、陸奥へ下りけるたよりにつけて、哀なる文などかこせけるを、  
 道にて病してなん死にけると聞きて、女いと哀となん思ひける。かく聞きて  
 後、篠束の驛と云ふ所より、便につけて、哀なることゝもをかきたる文をなん

もて來たりける。いと悲しくて、これはいつのうと問ひければ、使の久しくな  
 りて、もて來たるになんありける。女、

篠束のうまやくと侍ちわびしきみはむなしくなりぞしにける

とよみてなん泣きける。童にて殿上して、大七といひけるを、冠して、藏人所  
 におりて、金の使かけて、親の供にいくになんありける。

○みちのくの歌、安達のやまもゝろとも越えはわかれの悲しからむを、楊梅をかくしたり。○さて堤なる家に住みける、監の命婦のなり。○加茂川の歌、鮎のいをは鮎の魚なり。一首の意は、君にまゐらせんために、我は鮎を取るとて、夜をも明したるが、これはどの志は、必ず夢にも見ゆべき筈なり。如何に、見給ひしやとなり。命婦の、手づから取りしにはあらねど、かく云へるが歌なり。○篠束、三河の國寶飯郡にあり。○篠束の歌、うまやくは、驛々に、今やくをかけたなり。むなしくなるは死ぬるをいふ。なりぞしにけるのには、過去の助動詞の變化。○童にて殿上して、童殿上とて、禁中の作法を見習はんために、幼き程にすることなり。○冠して、元服してなり。○藏人所、職原鈔に、嵯峨天皇御宇、弘仁年中初置之、摸異朝侍中内侍等職、歟云々、弘仁以往、少納言及侍從爲近習宣傳之職、而此御宇初置、當所、以公卿第一人爲別當、左大臣爲別當、是流例也、四位侍臣中殊撰補其人爲頭、但上古有五位頭近代無之、五位中又撰補三人、六位中又撰補四人、謂之職事、又爲要籍駈仕、六位中撰良家子令候、殿上謂之非藏人、凡



第七十一段

殿上事、頭以下職事所奉行也依之聽昇殿策、併以頭爲實主云々と見えたり。○金の使、陸奥の貢金使なり。○かけて、かねてなり。

故式部卿の宮うせ給うける時は、ささらぎの晦日、花の盛になんありける。堤の中納言のよみ給うける、

咲きにほひ風まつほどの山ざくら人の世よりはひさじかりけり

三條の右のかとゞの御返し、

春々の花は散るとも咲さぬべしまた逢ひがたさひとの世ぞうき

○故式部卿の宮、敦慶親王なり。○うせたまうける時、紹運録によれば、延長八年二月三十日なり。○咲き句ひの歌、ほとは間なり。人の世よりは云々は、宮は花の散るをも待たでかくれ給へればなり。○春々の歌、註なし。

おなじ宮れはしましける時、亭子院に住み給うけり。この宮の御許に、兼盛参りけり。召し出でて、ものらの給ひなどしけり。うせ給うて後、かの院を見るに、いとあはれなり。池のいとおもしろきに、あはれなりければよみける、

池はなほむかしながらの鏡にてかけ見しきみがなきぞかなしき

○ものら、物等にて、物などの意なり。○池はなほの歌、意は明けし。

第七十二段

第七十三段

人の國の守にて下りける、馬のはなむけを、堤の中納言、して待ち給うけるに、暮るゝまで來ざりければ、いひやり給うける、

別るべきともあるものをひねもすに待つとてさへも歎きつる哉

○別るべきの歌、ひねもすには終日なり。

れなじ中納言、かの殿の寢殿の前に、少し遠く立てりける櫻を、近く堀り植ゑ給うけるが、枯れざまに見ゆければ、

やど近くうつして植ゑしかひもなく侍ち遠にのみ見ゆる花かな

○寢殿、家屋雜考に、寢殿の名は、皇朝の古稱にあらず、西土に倣ひて、一家の正殿をいふなり云々とあり。○宿近くの歌、櫻の枯れかゝりたるを、花の遅きやうによめるなり。この歌、後撰集(春上)には、前栽に紅梅を植ゑて、又の春をうく咲きければとありて、五の句、にほふ花かなとしたり。

第七十五段

同じ中納言藏人にてありける人の、加賀の守にて下りけるに、わかれ惜みける夜、中納言、

君がゆくここの白山知らねどもゆきのまに〜あどはたづねんとなんよみ給うける。



○君がゆく歌、白山は加賀國石川郡にあり。雪の名所なり。次の知らねどもといふに續けてあやなしたり。上の句は、君が行く越の道は知らねども意なり。ゆきのまにしは、雪に君があとつけて行くべければ、ろれに従ひて尋ね行かんとなり。この歌、古今集離別の部に、大江の千古が、こしへまかりける馬のはなむけによめるとして載せたり。千古は音人の子にて千里の弟なり。

第七十六段

桂のみこの御許に、嘉種が來たりけるを、母御息所聞さつけ給うて門をさへせ給うければ、夜一夜立ち煩ひてかへるとて、かく聞え給へとて、門のはざまより云ひ入れける、

こよひころなみだの川にある千鳥なきてかへると君はしらすや

○嘉種、刑部卿源長猷の男にて、清和天皇の孫、正五位下美作守たり。○夜一夜、終夜なり。○はざま、間をいふ。○こよひころの歌、涙の川は、涙のいたく流れ出づるを、川にたどへて云へり。

これも同じみこに、同じ男、

ながき夜をあかしの浦に焼く鹽のけぶりは空に立ちやのぼらん

かくて忍びてあひ給うけるに、院に八月十五夜せられけるに、参り給へとあ

第七十七段

りければ、参り給ふに、院にては逢ふまじければ、せめて今宵はな参り給ひそとどめけり、されどめじなりければ、はとまらでいろぎ参り給うければ、嘉種、

竹取がよくに泣きつとどめけんさみは君にとこよひじも行く

○長さ夜の歌、これも、前と同じやうの時によめるなるべし。長さ夜を立ち明す思ひ(火)に燃ゆる煙といふを、明石の浦にかけて云ひ續けたり。○八月十五夜せられ、月見の宴を開かれたるなり。この日に月を賞する事、もと支那より傳はれる風にて、其の時代明ならねど、古今要覽稿に、八月十五夜の月を賞すること、島田忠臣の集に、はじめて見えたり、其年紀さだかならずといへども、詠史百四十六首を奉り、貞觀元年三百六十首を奉れるよし、家集の自記に見えれば、其時代大概しられたりどあり。○竹取がの歌、よきは夜々なるべし。上の句は、竹取物語の故事によりて、かぐや姫の屏天を、翁のどめたるを云へり。君は君にの下の君は、院をさせり。

第七十八段

監の命婦、朝拜の威儀の命婦にて、出でたりけるを、彈正の親王見給うて、俄にまごひ懸想し給うけり。御文ありける御返事に、

うちつけに惑ふ心と聞くからになぐさめやすくれもほゆるかな



みこの御歌はいかにありけん、忘れにけり。

○朝拜、また朝賀ともいふ。正月元日、百官朝廷に出で、祝賀を申す儀式なり。○威儀の命婦、儀式の指圖をする命婦なり。○うちつけにの歌、うちつけは卒爾になり。ふとなり。俄になり。うちつけに感ふ心ならば、また慰むることも容易なるべしとなり。○彈正の親王、章明親王なるべし。親王は上に註せり。

また同じ親王に、おなじ女、

こりずまの浦にかつがん浮海松は浪さわがしくありこそはせめ

○こりずまの歌、こは一度のみ奉りて、とかくいふ人のありしに、又逢はんなど云はれたる折、よみしなるべし。こりずまの浦は、こりずまに云ふを、須磨の浦に云ひかけたり。こりずまには、懲りもせずの意なり。浪さわがしく云々は、世の取沙汰の騒がしかるべきをいふ。

宇多院の花れもしろかりける頃、南院の君たち、これかれ集りて歌よみなどしけり。右京の大夫、

来て見れど心もゆかずふるさとはむかしながらの花は散れども

こと人のもありけらし。

○南院、拾芥抄に、四條北、壬生西、是忠親王家と見たり。○来て見れど、心もゆかずは、慰まざるをいふ。昔ながらの云々は、宇多院崩御の後なりしなるべし。○けらし、けるらしの略。

季継の少將の女右近、故後の宮にさぶらひけるころ、故權中納言の君れはしける。たのめ給ふ事などありけるを、宮に参ることを絶えて、里にありけるに、更に訪ひ給はざりけり。うちわたりの人來たりけるに、いかに参り給ふやと問ひければ、常にさぶらひ給ふと云ひければ、御文たてまつりける、忘れどたのめし人はありと聞く云ひし言の葉いづちいにけん  
となんありける。

○季継、藤原季継なり。交野の少將と號す。○少將、職原鈔に、少將權少將、相當正五位下、唐名羽林大郎、親衛都督、五位殿上人中、爲譜第公達者任之、叙四位時去其職、但叙留殊恩也、近代每人叙留、又四位後拜任常事也、三位少將者執柄息常被任之、又藏人頭時爲少將是古例也、又辨官兼之、公達中有才名人事也、近代殊執之、少納言兼任又希例也とあり。○右近、父季継、右近の少將なればかく呼びたりしなり。○故ささいの宮、藤原隠子なり。醍醐天皇の皇后にて、太政大臣基經の四女。○故權中納言、藤原敦忠なり。左大臣時平の男にて、母は在原棟梁の女。天慶六年三月薨す。年三十七。○たのめ、たのましめにて、約束などせしをいふ。○うちわたりの人



第八十二段

云々、内裏の人の、右近が里に來たりたるになり。○いかにぞ参り給ふや、中納言は内裏には参り給ふかとなり。○忘れじとの歌、たのめ給ひし人のねはせざらんには、かく打ち絶え姿をも見せ給はざるは理なれど、其の人は恙もなくありと聞けば、初の給ひし言の葉は、いづちに行きしならんとなり。この歌、後撰集(戀二)には、一の句、思はんとあり。同じ集戀五「思はんと我をたのめしこの葉は忘草とぞ今はなるらし」

れなじ女の許に、更に音もせて、雉子をなんれとせ給へりける返事に、

栗駒の山に朝たつさじよりもかりには逢はじとおもひしものを  
○栗駒の歌、栗駒山は、山城國久世郡にあり。かりは狩に假をかけたなり。一首の意は、久しく音信もなければ、最早や捨てさせ給ひしなるべく、假令かりうめにも、逢ひ給ふことはあるまじと思ひたりしに、かゝる御消息も賜はりしよとなり。

おなじ女、うちの御曹子にすみける時、忍びて通ひ給ふ人ありけり。頭なりければ、殿上につねにありけり。雨の降る夜、曹子の蔀のつらに立ち給へりけるも知らず、雨のもりければ、蔀を引さかへすとて、

思ふひと雨と降り來るものならばわがもる床はかへさくらまじ  
○御曹子、御局なり。○頭、藏人頭なり。○蔀、日影を避け、または雨風を防ぐための戸。○曹子の蔀のつらに云々、女の局なる蔀の面に、男の立ちたるをも知らずしてなり。○

第八十四段

思ふ人の歌、我がもる床のもるは、守るに漏るをかけたなり。意は明けし。おなじ女、男の忘れじと、よろづの事をかけて誓ひければ、忘れにける後に云ひやりける、

忘らるゝ身さばおもはず誓ひてし人のいのちの惜くもあるかな  
かへしはは聞かず。

○忘らるゝの歌、忘れらるゝ身のつらさは何とも思ひたらず。猶誓ひにらむさし罰によりて、御身の命も絶ぬべきが、いと惜しきことよとなり。誓ひてしのは、過去の助動詞つの変化なり。この歌、拾遺集戀四に入れり。

同じ右近、桃園の宰相の君なん、住み給ふなど云ひのゝしりけれど、虚言なりければ、かの君によみて奉りける、

よし思へ海士のひろはぬうつせ貝むなしき名をば立つべしや君

○桃園の宰相の君、中納言源保光をいふ。父は代明親王にて、醍醐天皇の皇子、母は右大臣定方の女なり。宰相は參議をいふ。上に註せり。桃園は、拾芥抄に、世尊寺、一條北大宮西、本小路東とありて、次に、桃園、同世尊寺南、保光卿家、行成卿傳之と見ゆたり。○よし思への歌、よし思へは、よしし、今は君もまことに思ひ給へとなり。うつせ貝は、虚貝にて、實

第八十五段



第八十六段

のなきものなれば、海士のひろはぬと云ひて、空しきの枕詞に置きたり。立つべしやのやは反動の辞。

む月の朔日のころ、大納言殿に兼盛参りたりけるに、物などの給はせて、すゝろに歌よめとの給うければ、ふとよみたりける。

今日よりは萩の焼原かき分けてわか菜つまんとたれをさうはん  
とよみたりければ、二二なうめて、御かへし。

片岡にわらび萌はずばたづねつゝころやりてや若菜つまし  
となんよみ給うける。

○大納言殿、藤原顯忠なり。時平の男にて、母は源昇の女。天歷中大納言に進み、正三位に叙せられ、天徳四年従二位右大臣となる。康保二年六十八にて薨す。富小路右大臣と稱す。○今日よりはの歌、後撰集春上に出でたる歌にて、意はあらはなり。○片岡にの歌、片岡は大和國にあり。心やりは、心を晴すをいふ。

但馬の國に通ひける、兵庫の督なりける男の、かの國なりける女をれきて、京へ上りければ、雪の降りけるに云ひれこせたりける。

やま里に我をどめてわかれぢのゆきのまに深くなるらん

第八十七段

といひたりければ、

やまざとに通ふころも絶はぬべし行くもとまるも心ぼそさに  
となん返じたりける。

○兵庫の督、詳ならず。○山里にの歌、雪のまに云々は、我を隔つる心の、益々深くならんと云ふを、雪の道を降り埋むよしに云ひなしたり。○かへしの歌、女の、ます隔つる心の深くならんと云へるを受けて、けに、我が心は、千たび百たび御身の許へ通へど、行くも止るも一人のみにて、いと心細き身なれば、ろの山里に通ふ心も、今は絶ゆるならんとなり。細きものは絶ゆればなり。

同じ男、紀の國に下るに、寒しとて、衣を取りにれこせたりければ、女、

紀のくよの牟婁の郡に行くひとは風のさむさもれもひしられど  
かへし、男、

紀のくよの牟婁の郡に行きながら君とふすまのなきうかなしき

○女の歌、牟婁の郡の牟婁には、室を添へたり。室は塗籠にして、温かなるものなれば、風の寒さも知られじとなり。○男の歌、ふすまは、臥す間に、衾をかけたなり。上の牟婁(室)を受けたる詞なり。

第八十八段



「條理の君に、右馬の頭すみける時、方の塞りければ、方違にまかるとて、え参り來ぬと云へりければ、

これならぬ方をもちほくたがふれば恨みん方もなきぞかなしきかくて右馬の頭行かずなりにけるころ、よみてれこせたりける、

いかでなほ網代の氷魚にこととはん何によりてか我を訪はぬといへりければ、かへし、

網代より外には氷魚のよるものか知らずは宇治の人に問へかし

○修理の君、内匠允藤原直行の女なり。○方違、行かんとする方の塞りたる時、方角を違へて、他の家に宿ることなり。○これならぬの歌、我が方のみにはあらず、何れの所をも、よく違へ給ふ君なれば、更に恨むべき方もなしとの意なるべし。○いかでなほの歌、一首の意は、たゞ、如何なる譯によりて、我を訪はざるかとなり。網代は氷魚をどらんために、冬、川の瀬に竹又は木を網み連ねて作れるものにて、氷魚は形白魚に似て小さく、色白き魚なり。こととはんは、物問はんなどいふ意。何によりてかは、氷魚は網代に寄るものなればいへり。この歌、拾遺集雜秋に、藏人、にさぶらひける人の、ひをの使にまかりにけるとて、京に侍りながら、音もし侍らざりければとあり。○網代よりの歌、宇治の人に云々は、宇治は名高き氷

魚の産地なれば、ろこの人に問へとなり。

また同じ女に通ひける時、つとめてよみたりける、

明けぬとていろぎもぞする逢坂の霧立ちぬとも人にさかかすな

○つとめて、早朝なり。○明けぬとての歌、逢坂は近江の逢坂にて、逢ふ意に取りなしていへり。霧立ちぬとは、霧は夜にても立つべけれど、朝ならでは、人の目にかゝらざるより、うちまかせて、夜の明るくすることをかく云へり。ぬは二つ共、過去の助動詞。

男はじめごろよみたりける、

いかにしてわれは消えなんしら露のかへりて後のものは思はじかへし、

垣はなるさみがあさ顔見てしがなかへりてのちは物やおもふと

○はじめごろ、同じ女に通ひはじめたる頃なり。○いかにしての歌、どうがなして、露とも消へたき事よ。さらば歸りて後の、堪へぬ思ひあるまじければとなり。○垣はなるの歌、意は明けし。

同じ女に、けぢかく物など云ひて、歸りて後によみてやりける、

心をし君にとくめて來にしかばもの思ふことは我にやあるらん



修理が返じ

魂はをかじさ事もなかりけりよろづのものはからたぞありける

○けちかく云々、 けちかくは親しき意。打ち解け物なぞ云ひてなり。○心をしの歌、 心をしのしは強辭。來にしかばのには、過去の助動詞ぬの變化。物思ふことは云々は、心は君に止めて歸りたれば、又君を思ふべき等はなきに、なは物の思はるゝは、我が上の事にやあらんとなり。○たましひはの歌、 をかじきは面白き意。からは骸なり。歌の意は、心は我に止めたりとの給へど、更に目に見ゆる者ならねば、何のれもしろき事もなし。たゞ御身の形にこそ、よろづのをかしきことも、あはれなることも待れどなり。

おなじ女に、故兵部卿の宮御消息などし給うけり。おはしまさんとの給うければ聞はける、

高くとも何にかはせんくれ竹のひとよふたよのあだのふしをば

○故兵部卿の宮、 元良親王なり。陽成天皇の皇子にて、天慶六年七月二十六日薨す。年五十四。○高くとももの歌、 高くともは、宮の身分の高きを云へり。一よ二よのよ、あだのふしをばのふし、皆竹の縁語なり。いかに身分は高くればしますとも、とても末どぐまじき、一夜二夜のあだなる契は、何にかはし待らんとなり。この歌新勅撰集戀二に出でたり。

三條の右のおとと、中將にいますがりける時、祭の使よさゝれて、出て立ち給

うけり。通ひ給うける女の、絶えて久しくなりにけるに、かゝることになん出で立つ。扇もたるべかりけるを、騒がしうてなん忘れにける。一つ賜へといひやり給へりけり。よしある女なりければ、よくておこせんと思ひ給うけるに、色などもいと清らなる扇の、香などもいとかうばしきてれこせたり。引き返したる裏の、端の方にかきたりける、

ゆゝしとて思むとも今はかひもあらじ憂さをばこれに思ひよせてん  
とあるを見て、いと哀とればして、かへし。

ゆゝしとて思みけるものをわが爲になしといはぬは誰がつらきなる

○三條の右の大臣、 藤原定方なり。○中將に云々、 古今集目錄に、延喜二年正月七日正五位下、四年三月廿六日兼近江介、六年正月廿一日從四位下、二月十五日轉權中將云々とあり。○祭の使、 祭は如茂の祭にて、卯月神の酉日なり。この祭日に参向する勅使は、必ず近衛の中少將つとむるなり。○かゝることになん云々、 これより一つ賜へまで、定方の、久しく絶えたる女の許へ、使して云ひやりたる詞なり。○よしある、 由緒あるなり。○色などもいと清らなる、 清らは、あざやかに美しきをいふ。○香などもいとかうばしうて、 ろの扇に燻きしめたるなり。○ゆゝしとて思むとも今はの歌、 ゆゝしとては、扇は夏のはどのみ愛せ



られて、やがて秋風吹けば、捨てらるゝものなれば、男女の中には、送くるとを思みたりしなり。歌の意は、かくわさし、取りにおこせ給へるを、我のみゆゝしとて思みたりとも、今は其の甲斐もあるまじければ、この扇をまわらするなり。それにつけても、憂きをばこれに思ひ寄せんとなり。この歌、拾遺集雜戀に、よみ人しらすとして出で、下の句、うさをば風につけてやみなんとあり。○ゆゝしとて思みけるものをの歌、扇を取りにやりしと、いと心なきやうに云はれ給へど、しか思むべきものならば、無しといひても賜ふまじきに、るを賜はりたる御身と、取りにやりし我とは、いづれがづらさそとなり。

故權中納言、左のおほいごの、君をよばひ給ふ年の、十二月のつごもりに、

物思ふと月日の行くも知らぬ間に今年も今日にはてぬと聞くとなんありける。又かくなん、

いかにしてかく思ふてふことをだに人づてならで君にかたらん  
かくいひくゝて、遂にあひにけるあしたに、

今日そへに暮れざらめやはと思へども堪へぬは人の心なりけり

○故權中納言、敦忠なり。○左のれはいごのの君、藤原實頼の女なり。れはいごのは大  
臣のこと。○物思ふとの歌、思ふとは思ふとてなり。物思ひにはれて、月日の過ぐるも知らざる間に、早くも年は暮れて、今年も今日一日になりしと聞かす。さてはいつまで、かくのみ歎

きてあるべきそとなり。この歌、後撰集冬の部に、二の句、過ぐる月日もかはりて入れり。  
○いかにしての歌、逢ふことは難くとも、切めてかく思ふといふ事のみなりとも、人傳なら  
で、我より直接に語り申したさが、さて如何にしてか、さはせんとなり。これも同じ集戀五に  
入れり。又拾遺集戀一にも。○今日ろへの歌、ろへには、物集氏の大辞林に、然り、然  
るに。さへに。いふにや及ぶなを解せり。一首の意は、云ふまでもなく、今日とても暮れざる  
べきか、暮るゝにちがひはなく、暮れなばやがて逢ひまわらすべしと思へど、なほ堪へがたき  
心地するは、人の情にてありしよとなり。これも同じ集戀四に。

これも同じ中納言、齋宮のみとを年ごろよばひ奉り給うて、けふあすあひな  
んとしけるほどに。伊勢の齋宮の御占に合ひ給ひにけり。いふがひなく口惜  
しと、男おもう給うけり。さてよみて奉り給うける、

伊勢の海千ひろの濱にひろふとも今はかひなくれもほゆるかな  
となんありける。

○齋宮の親王、雅子内親王にて、醍醐天皇の皇女なり。○伊勢の齋宮の御占に云々、皇女  
をぬらふには、御占にて定むるよしにて、それに合ひ給ひしをいふ。こは承平二年十二月廿五  
日のことなり。○伊勢の海の歌、伊勢の海は、伊勢の齋宮に立ち給へればかくいへり。今は



いかに慕ひまゐらすとも、ろの甲斐あるまじきをよめるなり。今はかひなくのかひは、貝と甲斐とをかねたり。この歌、後撰集(戀五)には、下の句、今は何てふかひかあるべきとあり。

故中務の宮の北の方亡せ給うてのち、小き君達を引さ具して、三條の右大臣殿にすみ給うけり。御忌など過しては、遂に一人は過し給うまじかりければ、かの北の方の御おとうと、九の君をやがて得給はんとおぼしけるを、何かはさもと、親兄弟はらからも思したりけるに、いかゝありけん、左兵衛の督の君、侍従に物し給うけるころ、御文もて來となん聞き給うける。さて心づきなしとや思しけん、もとの宮になん渡り給ひにける。その時に、御息所の御許より、

なまきのすもりにだにもなるべきに今はどかへるけふの悲しさ  
宮の御かへし。

すもりにと思ふ心はとゞむれどかひあるべくもなしとこそさけ  
となんありける。

○故中務の宮、源保光の父、代明親王をいふ。三品中務卿にて、母は更衣藤原鮮子なり。さて中務卿は、中務省の長官にて、職原鈔に、中務省當三唐中務省一八省以中務爲重職、宮中事、當省可統領之義也、異朝同重之、以尙書爲南衛、以中書爲北司、本朝近代之例、頗無其實

然而相當異于七省、又當省卿以下雖爲文官、帶劔之職也とありて、卿一人相當正四位上、親主任之、四品以上、臣下不任之と見たり。○北の方、右大臣の女なり。○三條の右大臣殿に云々、中務の宮の、幼き君達を引き連れ給ひて、右大臣殿に住み給ふとなり。○遂に一人は云々、宮の、北の方なくては、過し給ふべからずとなり。○かの北の方の御れとうと、亡せ給ひし北の方の御妹なり。○何かはさもと親兄弟も云々、何かは苦しからん、さもすべしと親兄弟も思ひたりしになり。○左兵衛の督の君、藤原師尹なり。太政大臣忠平の子にて、安和二年三月左大臣に陞り、同年十月薨す。小一條左大臣と稱す。さて兵衛督は、相當從四位下にて、中納言、參議、散二三位、非參議四位等任之と職原鈔に見ゆ。○侍従、職原鈔に、侍従八人相當從五位下、唐名拾遺補、八人之中三人者少納言兼任之、其餘君達任之、諸大夫中常不任之、又大中納言參議以上有兼任例、近代無定數、五位侍從叙四位者又去之、四位以上任之別儀也とあり。○御文もてくとなん云々、左兵衛の督の、九の君へ御文をまゐらせ給ふと、中務の宮の聞き給ひしとなり。○心づきなし、雅語譯解に、つきなきことと、心に思はるゝを云ふとありて、キニクハム事ジャと譯せり。○御息所、右大臣の女むすめ御善子なり。○なまきの歌、すもりは、鳥の巢に、孵ひ化せずして残れる卵をいふ。上の句は、九の君をも娶り給ひて、なほいつまでも、こゝにころおはしますべきにどの意なり。○すもりにどの歌、かひあるべ、もなしとは、九の君の、兵衛の督へ通じたるよしをさしたるなり。

同心おなこころ大臣の御息所、帝おはしまさずなりて後、式部卿の宮なんすみ奉り給う



けるを、いかゞありけん、おはしまさゞりけるころ、齋宮の御許より、御文奉り給へりけるに、御息所、宮のおはしまさぬことなど聞え給うて、奥に、

しら山にふりにし雪のあと絶えていまはことぢの人もかよはず  
となんありける。御かへしあれど、本になしとあり。

○同じ大臣の御息所、善子なり。○式部卿の宮、敦實親王にて、宇多天皇の皇子なり。康保三年二月薨す。母は定方の妹胤子。○齋院、柔子内親王にて、敦實親王の妹なり。○白山にの歌、白山と云より、宮のことを起路の人と云へるなり。意はかくれたる所なし。この歌、二の句、雪ふりぬればどかばりて、後撰集多の部に出でたり。

第九十六段

かくて九の君、侍従の君にあはせ奉り給うてけり。同じころ、御息所を、宮おはしまさずなりよければ、左のおとゞの左衛門の督におはしける頃、御文たてまつり給うけり。かの君、賀取られ給ひぬと聞き給うて、おとゞ御息所に、

浪のうつつ方も知らねどわたつ海のうらやましくもおもほゆるかな

○侍従の君、師尹なり。○左の大臣、藤原實頼なり。忠平の長子にて、小野宮と稱す。朝儀に熟達し、累進して、冷泉天皇の朝、從一位太政大臣に至り、圓融天皇の朝攝政たり。天祿元年五月薨す。年七十一。清慎公と謚す。さて左大臣は、太政大臣、右大臣と共に、三公と謂ひて、

第九十七段

百寮訓要抄に、諸々の政を奉行す、左大臣とは一の上の宣下といふ事有、第一の臣下なれば、太政官の内の事を悉沙汰する也、何事も禁中の公事は、一の上の参りて行ふ也、不参の時にころ、次の大臣大中納言も奉行する事にて侍れ云々と見え、又職原鈔に、左大臣一人相正從二位、唐名太傅、左丞相、左中事、一向左大臣統領之、故云一上、關白之人爲左大臣之時、右大臣行一上、事是依關白與奪也とあり。次に、太政官は、同じ齊に、太政官唐高書者、又當官統八省及諸國、天下事悉決此官也、故云都省、本名乾政官と見え、また拾芥抄に、天平寶字元年改乾政官爲太政官云々とあり。○かの君、九の君をいふ。○浪のうつつの歌、いまだ御息所のおはざりしはどの歌なり。浪のうつつ方は、御息所の心よる方をいへり。うらやましくは、海の浦といふ意にて續けたり。師尹の九の君の尊となりしを羨みて、我も御息所と、さるなからひになりたきよしの意なり。

おほさかどゞの北の方亡せ給うて、御はての日になりて、御わざの事いそがせ給ふころ、月のれもしろかりけるに、端に出て居給うて、物のいと哀にたばされければ、

隠れにし月はめぐりて來にしかど影にも人は見はずぞありける

○ねほさかどゞ、太政大臣にて、藤原忠平をいふ。忠平は關白基經の四男、母は人麿親王の女にて、寛平中正五位侍従兼肥後守となり、累進して、太政大臣に進み、關白となる。天曆三



年八月薨す。年七十。貞信公と謚す。さて大政大臣は、左右大臣の上に位する人臣の極官にて、  
 職原鈔に、太政大臣一人相嘗正從一位 唐名大相國大尉、師範一人、儀刑四海、無其人則闕云々、故曰、則闕之官、  
 有德之撰、故非其人者常不任之、又无職掌之官也、太政大臣行公事、希例也と見ゆたり。  
 ○北の方、宇多天皇の皇女もあれば、右大臣能有の女もありて、いづれともはかりがたし。  
 ○御わざ、佛事なり。○端に居給うて、忠平のなり。○ほれにしの歌、影にも人はの人  
 は、北の方をいふ。

第九十八段

かなじ太政大臣、左の大臣の御母管原の君、かくれ給ひにける御服はて給ひ  
 にけるころ、亭子の帝、うちに御消息さこえ給うて、色ゆるされ給うける。さ  
 りければ、大臣いと清らに、蘇芳襲すほうがまねなど着給うて、後の宮に参り給うて、院の  
 御消息のいどうれしく侍りて、かく色ゆるされ侍ることなど聞え給ふ。さて  
 よみ給うける、

ぬぐをのみかなしと思ひしなき人のかたみの色はまたもありけり  
 となん泣き給うける。そのほどは中辨になんものし給うける。

○左のれとど、實頼なり。○菅原の君、宇多天皇の皇女にて、母は菅原道真の女なり。○  
 亭子の帝うちに云々、うちは醍醐天皇を申す。○色ゆるされ云々、宇多法皇の御取成しに

第九十九段

て、禁色きんじきをゆるされたるなり。禁色とは、公の許なくては服用すること能はざる装束の色にて、  
 深紫と深紅とを云へり。○蘇芳襲、表は薄赤く、裏は深紅なり。○ささいの宮、藤原温子  
 なり。多字天皇の皇后にて、基經の女、忠平の姉なり。○ぬぐをのみの歌、ぬぐは喪服を脱  
 ぐなり。今まで亡き人の名残と思ひて、懐しく纏ひ居たる喪服なれば、ろを脱は、まことに  
 悲しく思はるべきなり。下の句は、北の方は、法皇の御女なれば、ろの御父の取成にて、禁色  
 をゆるされ、かく花やかなる色になりしを、亡き人の形見の色とは云へるなり。○そのほどは  
 中辨になん云々、季吟の抄に曰く、勘云貞信公不歷中辨而四位侍從任參議後右大辨云  
 々。さて中辨は、官職秘鈔に、近衛中小將、並大臣子息才能之輩、雖居四位開官直加之、往  
 年以少辨叙四位之後、多避之、以轉中辨為難、而近代每人昇之云々とあり。  
 亭子院の御供に、太政大臣、大井に仕うまつり給へるに、紅葉、小倉の山に、い  
 ろ／＼いとおもしろかりけるを、限なくめで給うて、行幸もあらんに、いと興  
 ある所になんありける。必ず奏してせさせ奉らんなど申して、ついでに、  
 をぐら山みねのもみぢばこゝろあらば今ひとたびの行幸またなん  
 となんありける。かくて婦り給うて、奏し給うければ、いと興ある事なりとて、  
 大井の行幸といふこと始め給うける。

○亭子院の御供に云々、法皇の大井へ御幸し給ふ御供に、忠平のまわりたるになり。○大井、



大堰とも書く。大井川のことにて、山城國葛野郡小倉山のほとりにあり。○行幸もあらんに云々、忠平の詞なり。行幸もあらんには、今上の御遊もあらんになり。同じくみゆきと訓めど、天皇には行幸、上皇には御幸と書くなり。○小倉山の歌、今上の行幸も、近きはとにあるべければ、それまで散らすしてあれかしと、紅葉にあつらへたるなり。この歌、大鏡にも、拾遺集(雑秋)にも出でたり。○大井の行幸、大鏡裏書に、延長四年十月十日法皇幸大井川、有詠歌事、また、延長四年十月十九日、天皇幸大井川、法皇同幸、雅明親王千時舞萬歳樂、舞間曲節不誤、主上脱半臂給、親王拜舞、又有勅、令帶劔と見たり

大井に季繩の少將すみける頃、帝の給うける、花おもしろくなりなば、必ず御覽せんとありけるを、おぼし忘れて、おはしまさざりければ、少將、

散りぬればくやしきものを、おぼはる川岸のやまぶさ今さかりなり

とありければ、いたう哀がり給うて、急ぎおはしましてなん、御覽じける。

○花おもしろく云々、花は山咲の花をいふ。○おぼし忘れて、忘れ給ひてといふにれなじ。

○散りぬればの歌、意は明なるべし。

おなじ少將、病にいといたう煩ひて、少しおこたりて、うちに参りたりけり。

近江守公忠の君、掃部助かものすけにて藏人なりける項なりけり。その掃部助に逢ひて

云ひけるやう、みだり心地はまだおこたり果てねど、いとむつかしう、心もとなく侍ればなん参りつる。後は知らねど、かくまで侍ること。罷り出て、明後日ばかり参りこん。よさに奏し給へなど云ひおきてまかどぬ。三日ばかりありて、少將のもとより、文をなんおこせたりけるを見れば、

悔しくぞ後に逢はんとちざりける今日をかざりと云はまじものを

○近江守公忠の掃部助にて云々、公忠は、延喜十八年正月掃部助に、全二月藏人になれり。掃部助は、掃部寮の次官にて、掃部寮は宮内省に屬し、宮中洒掃の事を掌る役所なり。○みだり心地、病氣に煩へる心なり。○れこたりはてねど、れこたるは癒ゆるを云ふ。○いとむつかしう、心の晴々どせざるなり。○心もとなく、待遠に思はるゝ意。○かくまで侍ること、今まで存命へたるをいふ。○悔しくその歌、新古今集哀傷の部に出でたり。其の詞書に、病にしづみて久しくこもりぬて侍りけるが、偶よろしうなりて、内にまゐりて、右大辨公忠藏人にけりけるに逢ひて、又あさてばかり参るべきよし申して、まかり出でにけるまゝに、病れもくなりて、限に侍りければ、公忠朝臣につかはしけるとあり。

いとあさましくして、涙をとぼして、使に問ふ。いかゞ物し給ふと問へば、使もいと弱くなり給ひにたりと云ひて泣くを、聞くに、更にも聞えず。みづから只



今参りてと云ひて、里に車取りにやりて待つほど、いと心もとなし。近衛の御門に出で立ちて、侍ちつけて、乗りて馳せ行く。五條にぞ少將の家あるに、いさつきて見れば、いといみじう騒ぎのこりて、門さじつ。死ぬるなりけり。消息いひ入るれど、何のかひなし。いみじう悲しくて、泣くく歸りよけり。かくてありけることを、かんのくだり奏しければ、帝も限なく哀がり給うける。

○いかゞ物し給ふ云々、少將の容体はいかにぞと問へばなり。○更にも聞えず、使の泣きながら答ふれば、聲も咽びてたしかに聞ゆるなり。○里に車取りにやりて云々、公忠のわが里第に車をとりやりて、るを待つ間、いと心もとなしとなり。心もとなしは侍遠なる意

○近衛の御門、陽明門をいふ。内裏の眞東にて、上東門と待賢門との間にあり。○馳せ行く、走らせ行くなり。○いといみじう騒ぎのこりて、いみじうは甚しうにて、のしるは聲高に泣き騒ぐをいへり。○かんのくだり、かみのくだりの音便、前にある次第をいふ。

土佐守にありける酒井人眞と云ひける人、病して、よわくなりて、鳥羽なりける家に行くとしてよみける。

行く人はそのかみ來んどいふものを心ばそしや今日のわかれば

○酒井人眞、古今集の作者なり。延喜十四年正月土佐守となり、同十七年四月卒す。○行く

人はの歌、うのかみは當時なり。一首の意は、よのつねに出でゆく人は、うの時やがて歸り來んなどいへど、我が今日の別れば、これを限と思へば、いとも心細きことよとなり。

平仲が色好みけるさかりに、市にいさけり。中頃は、よき人々、市にいさてなん、色好むわざはしける。それに故後の宮の御達、市に出でける日なんありける。平仲色好みかゝりて、二なう懸想しけり。後に文をなんおこせたりける。女ども車なりし人は多かりしを、誰にある文にかとなん云ひやりける。さりければ男の許より、

もしきさの袂のかずは見しかどもわきてれもひの色ぞとひしき

といへりけるは、武藏守の女になんありける。それなんいと濃き搔練着たりける。それぞと思ふなりけり。さればその武藏なん、後は返事して云ひつさにける。

○市にいさけり、集れる人々を見んとてなり。○故後の宮、温子なり。上に註せり。○御達、婦人の尊稱なり。こゝは後の宮の官女達をいふ。○色好みかゝりて、たはむれかゝりたるなり。○後に、市より歸りて後なり。○女ども車なりしは云々、御達より云ひやりたる詞なり。○もしきさの歌、上の句は、後の宮の官女達はわまた見たれども音。下の句



の、思ひの色は、緋の色に云ひかけて、武藏守の女を指したり。○怪練、表裏共に、紅の練絹にて作れる女の装束なり。

かたち清げに、髪長くなごして、よき若人になんありける。いといたう人々戀想しけれど、思ひ上りて、男などもせてなんありける。されどせちによびひければ逢ひにけり。そのあした、文をもおこせず、夜まで音もせず。心憂しと思ひ明して、又の日待てど文もおこせず。其の夜下侍ちけれど。あしたにつかふ人など、いとあだに物し給ふと聞きし人を、ありくして、かく逢ひ奉り給うて。みづからこそ暇も障り給ふことありとも、文をだに奉り給はぬ心憂きことなど、これかれいふ。心地にも思ひ居たる事を、人も云ひければ、心憂く悔しと思ひて泣きけり。

○思ひあがりて、心を高く持つをいふ。○切によびひければ、平仲のなり。○その夜下侍ちけれど、なほ來すなごいふ語を合めたり。○ありくして云々、今まで多くの人には麻かであり來りて、今更かゝるあだなる人に逢ひ給うて、よしなき愛目見ることよごなり。こゝも、奉り給うての下、詞省かれたり。○みづからころ云々、平仲自身にころ、さりがたき事ありて來たられずともなり。○心地にも思ひ居たる云々、わが心にも、しか思ひ居たる事をなり。

その夜もしやと思ひて待てど、又來ず。又の日も文もおこせず。すべて音もせて、五六日になりぬ。この女音をのみ泣きて物も食はず。つかふ人など、大方はなおぼしそ。かくてのみ止み給ふべき御身にもあらず。人には知らせてやみ給うて、ことわざをもと給ひてんといひけり。物もいはごともり居て、つかふ人にも見えて、いと長かりける髪をかい切りて、手づから尼になりにけり。つかふ人集りて泣きけれど、いふがひもなし。いと心憂き身なれば、死なんと思ふにも死なれず。かくだになりて、行をだにせん。かじがましく、かくな人々いひ騒ぎうとなん云ひける。

○大方はなおほしう云々、つかふ人の詞なり。最早や平仲の事は思ひ給ふな。これにのみ限るべき御身にもあらずとなり。○人には知らせ云々、平仲に逢ひたることは、人には知らせで、又他の人にもあひ給へとなり。○いと心うき云々、女の詞なり。

かゝりけるやうは、平仲その逢ひけるつとめて、人おこせんと思ひけるに、司の長官、俄に物へいますとて、よりいまして、寄り臥したりけるをおひ起して、今まで寐たりけるとて、逍遙しに遠き所にあていまして、酒のみのことりて、更にかへり給はず。辛うじて歸るまゝに、亭子の帝の御供に、大井にあておは



しましぬ。そこに又二夜さぶらふに、いみじう酔ひにけり。夜ふけて歸り給ふに、この女のがりいかんとするに、方の塞りければ、大方皆違ふ方へ、院の人々類していにけり。この女いかに覺束なく怪しと思ふらんと戀しさに、今日だに日も疾く暮れなん。いきて有様もみづから云はん。且つ文をおくらんと、酔ひ覺めて思ひけるに、人なん來てうち叩く。誰ぞと問へば、猶尉の君に物聞えんといふ。さしのぞきて見れば、この家の女なり。

○かゝりけるやうは、かくありし次第はの意。○つとめて、翌朝をいふ。○司の長官、兵衛の督なるべし。○物へいますとて、物はろこと定かに云はざる詞。或所の意。いすは行くの敬語。○よりいまして、平仲方に立寄り給ひてなり。○寄り臥したりけるをねひ起して、平仲の物に寄り掛りて臥し居たるを、無理に起してなり。○今まで寐たりける、かみの詞なり。かく遅くなるまでも寐たるを、呆れたる意なり。○夜ふけてかへり給ふ、院のなり。○この女のがり云々、がりは許への意。○類して、伴ひてなり。この詞、上にも見ぬたり。○暮れなん、暮れよかしの意。なんは希望の辞なり。○いきて有様も云々、かく音信もせざりし、この程のさはりを、みづから具さに語らんとなり。○人なん來て云々、武藏守の女のもとより、使の來りて、平仲の家の戸を叩きたるなり。○尉の君に物聞えん、尉は平仲をいふ。當時この官なりしなるべし。物聞えんは物申さんなり。○この家の女なり、この

家は武藏守の女の家を指す。

胸つぶれて、ちこと云ひて、文を取りて見れば、いと香ばしき紙に、切なる髪をすこしかい縮ねて包みたり。いと怪しうおぼはて、書いたる事を見れば、

あまの川そらなるものと聞きしかどわが目のまへの涙なりけり

とかきたり。尼になりたるなるべしと見るに、目もくれぬ。心肝をまどはして、この使に問へば、早う御ぐしおろし給うてさ。かゝれば御達も昨日今日、いみじう泣き惑ひ給ふ。下衆の心地にも、いと胸痛くなん。さばかりに侍りし御髪をと云ひて泣く時に、男の心いといみじ。なでふかゝるすさありさをして、かく佞しき目を見るらんと思へどかひなし。泣くく返事かく。

世をわぶる涙ながれてはやくともあまの川にはさやはなるべき

いとあさましさに、え物も聞えず。みづから只今まありてとなん云ひたりける。かくてすなはち來にけり。そのかみ女は塗籠に入りけり。事のあるやう、さばかりをつかふ人々に云ひて、泣くこと限なし。物をだに聞えん。御聲をだにし給へと云ひけれど、更にいらへをだにせず。かゝるさはりをば知らて、



猶たゞいとほしさにいふとや思ひけんとしてなん、男は世にいみじきことに  
しける。

○こちこ、 此方へ来よなり。○あまの川の歌、 あまの川のあまは、天に尼をうへたり。我  
が目のまへの云々は、涙のいたく流れ出づるをたとへて、涙川といふことあれば、天(尼)の川  
は、我が目のまへの涙にてありしよとなり。○目もくれぬ、 目もくらむなり。○げす、 い  
やしきものをいふ。○さばかりに侍りし御髪をと云ひて云々、 早う御髪をろし給うてきより、  
これまで使の詞なり。さはどに長く、美はしかりし御髪なるものをと、あたらしがりて泣ける  
なり。すべて昔は、美人の相といへば、まづ髪の長さを、第一にかそへしものにて、大鏡師尹  
の傳に、宣輝殿の女御(芳子)の、たぐひなき美人にてはするよしを云へる所にも、うちさま  
あり給ふとて、御車にたてまつり給ひければ、わが御身はのり給ひければ、御ぐしのするは、  
もやの柱のもとにそれはしける。一すぢをみちのくに紙にねきたるに、いかにもすきま見給  
はずとぞ申しつたへためる云々など見えて、むねと髪長の長さことのみいへるはどにて、今の世  
よりも、一入女の大事とすべきは髪なりしなり。○男の心いといみじ、 平仲の心いと堪へか  
たく覺ゆるなり。○なでふかゝるすきありきをして云々、 何とて斯様なる好色事(すきごと)の歩(あゆ)きをし  
て、かくもつらき目を見るならんとなり。○世をわぶるの歌、 いか世を侘(わ)ぶる涙の、堰(せき)  
あへず流るればとて、さやうに早くあまの川とやはなるべきとなり。女の一圖に尼となりしを、

さはどまでにはあるまじと云へるなり。さて女のかく世を遁れたるは、平仲ゆゑなれど、平仲  
の心には、露ばかりもかはれる事なければ、恨まるべきよしもなきより、わざと大方の世を侘  
びたるやうによめるなり。○かくてすなはち來にけり、 すなはちはやがての意。○ろのかみ  
女は塗籠に云々、 ろのかみは、こゝにては當初にて、是より先の意。塗籠は土にて塗りめく  
らして、家の奥まりたる所にあれば、人などに逢ふまじとする時、かくれ居るには使あるなり。  
○事のあるやうさばかりを云々、 平仲の、訪ひがたかりし子細を、つかふ人々にことわれる  
なり。○かゝるさはりをば知らで云々、 平仲の心なり。女の、かく遁れ難き障ありしは知ら  
で、たゞ不便さに慰むる詞とや思ひしならんとてとなり。○よに、 殊の外にの意。

滋幹の少將に、女、

戀しさに死ぬる命をれもひ出で、問ふ人あらばなじとこたへよ

少將、かへし、

骸(か)にだにわれきたりてへ露の身の消えばともにと契り置きてき

○滋幹、 藤原滋幹なり。大納言國經の男にて、延長六年左近少將となり、承平元年卒す。○  
戀ひしさにの歌、 問ふ人あらばは、我を問ふ人あらばなり。意は聞ひたり。この歌、新古今  
集戀四に、よみ人しらすとして載せたり。○からにだにの歌、 さたりてへは、來たれりとい  
へなり。てへはといへの約。



中興の近江の介が女、物怪にわづらひて、淨藏大徳を驗者にしけるほどに、人とかく云ひけり。なほしもはたあらざりけり。忍びてあへりて後、人の物云ひなどもうたてあり。猶世にへじなど思ひ云ひてうせにけり。鞍馬といふ所に籠りて、いみじう行ひ居り。さすがにいと戀しう覺えけり。京を思ひやりつゝ、よろづのこといとあはれにおぼれて行ひけり。泣くくうち伏して、傍を見れば、文なん見はける。なその文ぞと思ひて、取りて見れば、この我が思ふ人の文なりけり。書けることは、

すみ染のくらまの山に入るひとはたどるくもかへり來なとんとかけり。

○物怪、生靈死靈などの崇るを云ふ。○人とかく云ひけり、二人の中に、情由あるやうに云ひしなり。○なほしもはたあらざりけり、たゞにもあらざりしとなり。實事ありしをいふなり。萬葉集に、默然を、たゞにとも、なほにともよめり。○うせにけり、世のまじらひをいひて、山に隠れたるなり。○鞍馬、山城國愛宕郡にあり。○墨染の歌、墨染は、くらまぞ云はんために置きたる詞ながら、法師にも縁あり。たゞるくも云々は、忍びやかに、折々は京へ歸り給へかしとなり。この歌、後撰集(戀四)には、淨藏の山へなん入ると云へりければあり。

ればあり。

いと怪しく、誰しておこせつらんと思ひをり。持て來べきたよりもおぼはず、いと怪しかりければ、又一人まごひ來にけり。かくて又山に入りけり。さておこせたりける、

からくして思ひわする戀しさをうたて鳴きつるうぐひすの聲かへじ、

さても君忘れけりかしうぐひすの鳴くをりのみや思ひ出づべきといへりける。又淨藏大徳、

わがためにつらき人をばおきながらなにの罪なき世をや恨みんともいへりけり。この女は二なくかじづきて、皇子だち上達部よばひ給へど、帝に奉らんとてあはせざりけれど、この事いでさければ、親も見ずなりにけり。

○からくしての歌、やうやくのことにて忘れたりしに、又も文なを送り給へば、うたてや戀しざの、再び止めがたくなりしとなり。女の消息したるを、鶯の鳴きたるよしに云へるなり。○さても君の歌、淨藏の、からくして思ひ忘、と云へるを受けて、さては、君は早や、忘



れ給ひにたり。若し常に思し給ふものならば、此方より音信るゝ時にのみ、思ひ出だし給はんやとなり。○わがためにの歌、世を憂しと云ひ、佗しと云ふも、皆我につらき人あるによりてなれば、實は何の罪もなき世を、いかで恨むべきや、ろのつらき人をこそ恨みもすべきわざなるにとなり。○二なくかしづきて、たぐひなく、大事に養育してなり。○上達部、三位以上の公卿をいふ。○あはせざりけれど、あはせは婚せにて、嫁することなり。○この事いできしより云々、淨藏と通じてより、初よはひつる人々は更なり、親も管はぬやうになりしとなり。

故兵部卿の宮、この女のかゝること、まだしかりける時、よばひ給うけり。親王、

をぎの葉のそよぐごとにぞうらみつる風にうつりてつらき心を

○故兵部卿の宮、元良親王なり。○かゝること云々、淨藏のここのなかりし時なり。○よばひ、戀ひ慕ふを云ふ。○萩の葉の歌、萩の葉の風のままに靡く如く、いづ方へも移りやすき女の心を、つらしと恨みたるなり。前に、みこたち上達部など、この女をよばひしよし見ゆれば、それらにもあひしことあるなるべし。

これも同じ宮、

あさくこそ人は見るらめせき川の絶ゆる心はあらごとそおもふかへし。

せき川の岩間をくゞるみづ浅み絶えぬべくのみ見ゆることを

○浅くころの歌、せき川は堰き止めたる川なり。されば流は浅けれども、なほ水は絶えぬものなる如く、我も絶ゆる心は持たじと云へるなり。この歌、新勅撰集戀四に、二の句、人は見るともどかはりて入れり。○せき川の歌、水浅みは水が浅くてなり。かく絶えぬにのみ見給ふ御心を、いかで浅く思ひ侍らざらんやとなり。これも同じ集に、かへしとて。

かくてこの女出で、物聞えなごすれど、逢はでのみありければ、みこおはしまじたりけるに、月のいと明かりければ、よみ給うける。

よなくいづと見しかど果なく入りにし月と云ひてやみなんどの給ひけり。かくて扇をおとし給へりけるを、取りて見れば、知らぬ女の手にてかく書けり。

忘らるゝ身は我からのあやまちになしてだにこそ君をうらみめと書けりけるを見て、その傍に書きつけて奉りける。



ゆゝしくもおもほゆるかな人毎にうとまれにける世にこそありけれ  
となん。

○物聞のなご云々、物はさすがに承れど、しみじみ逢ひなどもせざりしなり。○よなくは毎夜の意。歌のころはよく聞けたり。○かくて扇をれどし給へりけるを云々、親王の扇をれどし給へるを、中興の女の取りて見ればなり。○忘らるゝの歌、我にはさるあやまちもなく忘れられたれば、いかに恨みまゐらせても恨み足らぬゆゑ、切めて其の罪をば我が身に歸してなりとも、君を恨み申さんとなり。○ゆゝしくも歌、ゆゝしくは忌々しうなり。もは歎辭なり。人毎に疎まれにけるは、人毎に君より疎まれたるなり。世は男女の間をいふ。かく人毎に、君よりはうとまれたる世なれば、必ず我にも未遂げ給ふまじく、いと忌々しう思はれ侍るよとなり。

又この女、

わすらるゝときはの山のねをぞなく秋野の虫のこゑにみだれて  
かへし、

なくなれどおぼつかなくもおもほゆる聲さくとの今はなければ

○忘らるゝの歌、忘らるゝときはの山は、忘れらるゝ時といふを、常磐山にいひかけたり。

常磐山は山城國にあり。ねは音なれど、山の峯といふ意につゞけたり。峯を、みねといふは、みといふ美稱を添へたるなり。○なくなれど歌、なくなれどは、こゝは、泣くかは知らねどなごの意。おぼつかなくは不確なるをいふ。

また同じ宮、

雲井にて世をふるころは五月雨のあめの下にぞいけるかひなき  
かへし、

降ればこそ聲も雲井にきこえけめいとゞはるけき心地のみして

○雲井にての歌、雲井は禁中を云へり。禁中にのみありて、久しく、女の許へも通ひ給はぬほどの歌なるべし。ふる(經、降)といふより五月雨を受け、あめ(天、雨)とつゞけたり。○降ればころの歌、季吟の抄に曰く、雨のふればころこゑは聞けけめとなり。其雲井に聞ゆらんにつけても、猶はるけきは知らるゝとなり。中絶たる事をよめり。雲井といふよりいとゞ遙けきと受けたり。

おなじ宮に、こと女、

逢ふことのねがふばかりになりぬればたゞにかへし、時ぞ戀しさ

○逢ふことの歌、宮の引き續されはしまさず、絶えしなるをよめり。はじめのはきは打ち頻り訪はせ給ひしに、今は却りて、我より願ふはこになりたれば、はじめうるさく慕はせ給



ひし折、逢はで徒にかへしまゐらせし時の、いと戀しく思はるゝよとなり。  
南院の今君といふは、右京の大夫宗子の君の女なり。それ太政大臣の、尙侍ないしのかんの君のかたにさぶらひけり。それを兵衛の君、あやきみと聞はける時、曹子にしはく、おはしけり。おはし絶江にければ、とこ夏の枯れたるにつけて、かくなん、

かりそめに君がふしみしとこ夏の根もかれにしをいかで咲きけん  
となんありける。

○南院の今君、後撰集の作者。○尙侍の君、貴子。天慶元年尙侍となる。文彦太子の御息所なり。さて尙侍は、内侍司の長官にて、供奉、常侍、奏請、宣傳等の事を掌る官なれど、百寮訓要抄にも、執柄の女などは是に任ず、女御、更衣同程の事なり云々と見えて、平城天皇、尙侍薬子を寵し給ひしより以來、尙侍以下、君の寢席に侍する例多かり。○とこ夏、撫子の一名。夏のうちより、秋のすゑまでかけて咲く花なれば、夏を常しへにする意にて、常夏といふとぞ。○かりゆめの歌、とこ夏には床を、根には寢を、枯れには、離れをかけたなり。いかで咲きけんは、根があればこそ、花も咲くべけれど、この花は、かく根は枯れ果てたるに、いかにして咲きたるならん。わが身もこれと同じく、君の絶えず訪ひ給はらばこそ、戀しくも思

ひまゐらせらるべきを、かく打ち絶ねればしまさで、離れ果て給へるに、なほいと戀しうのみ  
思ひまゐらすは、如何にせし事ならんとの意なり。  
おなじ女、巨城が牛を借りて、又後に借りたりければ、奉りし牛は死にきと云  
ひたりける返事に、

わがのりしことをうしとや消えにけん草にかゝれるつゆの命は  
○巨城、源巨城なり。作者部類に、敦固親王の子とあれど定かならず。○牛を借りて、今君の、車にかくる牛を、巨城より借りて乗りしなり。○奉りし牛は云々、巨城の詞なり。御貸し申し、牛はの意。○わがのりし歌、うしは、愛しに牛をうへたり。草にかゝれる云々は、牛は草にてかふ者なれば云へり。この歌、後撰集(雜二)には、四の句、草葉にかゝるとあり。  
おなじ女、人に、

おほそらはくもらずながらかみな月年のふるにも袖はぬれけり

○大空はの歌、神無月は十月にて、時雨の多き月なれば、空は曇らざれども、年のふる(經、降)にも、なほ袖はぬれしよとなり。逢はで年ふる歎きに、袖も涙に時雨るゝよしなり。  
大膳の大夫公平の女ども、縣井戸と所に住みけり。おほい子は、後の宮に少將の御といひてさぶらひけり。三にあたりにけるは、備前守信明、まだ若男なり



ける時になん、初の男にしたりける。すまざりければ、よみてやりける。  
この世にはかくてもやみぬ別路の淵瀬をたれに問ひてわたらんと  
となんありける。

○大膳の大夫、大膳職の長官なり。大膳職は、宮内省に屬して、御膳部の事を司る所。○公  
平、橘公平なり。○縣井戸、拾芥抄に、一條北、東洞院西角と見ゆ。蛙、山吹などの名所  
なり。後撰集春の下に、あがたの井戸といふ家より、藤原治方につかはしける、橘公平女「都  
人來ても居らなん蛙なくあがたの井戸の山吹の花」○ねほい子、大子にて長女といふ。○備前  
守信明、源公忠の男なり。三十六歌仙傳に、承平七年正月十六日補藏人、父公忠朝臣辞五位  
藏人補之、八月三日任右衛門權少將云々、天曆元年二月任備後守、同二年正月十四日叙  
從五位上云々、應和元年十月十三日任陸奥守、安和元年十二月五日叙從四位下、天祿元年卒  
云々とあり。○はじめの男にしたりける、第三女を信明に婚せたるなり。○この世にはの歌、  
別路の淵瀬は三途川をいふ。女のはじめて逢ひたる男に、この川にて手を引かるとぞ。歌の意  
は、かく捨てられても、この世にては、兎も角もありぬべけれど、かの三途の川をば、如何に  
して渡らんとなり。

おなじ女、後に兵衛尉庶正もろたけに逢ひて、よみておこせたりける。風吹き雨降り  
ける日のことになん。

こち風はけふ日ぐらしに吹くめれど雨もよにはたよにもあらじな  
とよみけり。

○兵衛尉庶正、藤原庶正なり。中納言兼輔の四男にて、天慶九年藏人右兵衛尉となる。○こ  
ち風はの歌、こちの吹く時は、大方雨の降るものなるが、ろのこち風は、今日一日吹くやう  
なれど、雨はよに降ることもあるまじとなり。現在雨の降れる時に、かくしも云ひたるは、雨  
のふるを、男の來るよによろへて、君は我をすさめ給はぬやうに見ゆれば、よもればしますこ  
とはあらじとのこゝろなり。

兵衛尉はなれて後、臨時の祭の舞人にさゝられていきけり。この女ども物見に  
出でたりけり。さて歸りてよみてやりける。

むかし着てなれしをすれる衣手をあなめづらしとよそに見るかな

○臨時の祭、茂加の臨時祭をいふ。十一月下の酉日なり。亭子院の御世に始りしよし大鏡に  
見ゆ。○むかし着ての歌、昔着て云々は、昔着なれ給ひし装束の模様を摺りたる袖をなり。  
衣手は袖に同じ。ろでのろは衣の義なり。よそに見るかなは、中絶おし後にて、今は他人の間  
なればなり。

かくて兵衛尉、山吹につけておこせたりける、



もろともに井手の里こそ戀しけれひとりをりうきやまふさの花  
となん。かへしは知らず。

○もろともにの歌、昔もろともに添ひ居たりしを戀ふる意なり。ひとりをりうきのをりは、居りと折とをかけたり。

かくて、これは、女、通ひける時に、

おほ空もたゞならぬかな神無月われのみ下にしぐるとおもへば

○女通ひける時に、兵衛尉の通ひける時に、女のみみけるとなり。○大空もの歌、かの心なき大空も、神無月には、時雨がちなるを見れば、たゞにてはあらざりけるよ。人知れず思ひ亂れて、涙の時雨に袖をぬらすは、我ばかりかと思へばとなり。下にしぐるは、大空の時雨にむかへて云へり。

これも同じ人、

逢ふことはなみのした草みがくれてしづ心なくねこそ泣かるれ

○逢ふことは歌、逢ふことはなくて、音のみ泣かるよよしなり。あふことはなみは、あふことはなしといふを、波に云ひかけたり。みがくれては、水に隠れてなり。音こそ泣かるれば、草の根の流るゝに添へていへり。

柱のみこ、七夕のところ、忍びて人にあひ給へりけり。さてやり給へりけり。

袖をしもかさゞりしかど七夕のあかぬわかれにひぢにけるかな

○袖をしもの歌、袖をしも云々は、七夕に衣などかすことあればかくいへり。ひぢにけるのひぢは濡るゝをいふ。

右のおと、頭におはしける時に、小貳の乳母のもとによみてたまひける、

秋の夜を待てとたのめしことの葉に今もかゝれる露のはかなさ

となん。

○右のれとど、定方なるべし。さて右大臣は、上にもしばし出でたれど、註し落したれば、こゝに其の職掌をいふべし。官職難儀に、右大臣は、左大臣のさはり有時、諸公事を奉行する事左大臣と同じ、左大臣關白の時、與存にて一上になる云々と見ゆたり。○頭、藏人頭なり、職原鈔に、頭二人、四位殿上人中、清撰之職也、辨方一人、近衛司方一人補之、常例也、凡頭常職之時不依位次、著諸侍臣之上、有參議關必任之、仍古來爲重職、又奉行大小公事之間、非器無才之輩不能競望者也、以之思之、雖末代可謂清撰、歟とあり。○小貳の乳母、村上天皇の御乳母にて、後撰集の作者なり。○秋の夜をの歌、秋まで待ち給はゞなど、女のたのめたることありしに、はゞなく心かはりて、あだし男に靡きなどしたるを、かくよめるや。言



の葉に今もかゝれる云々は、秋になれば、露などしげくたくより、木の葉の色かはりて紅葉するものなれば、言の葉といふを、まことの木の葉に擬して、露のふりかゝりて色のかはれるよしを、契りし言のたがひたる意にいへるなるべし。後撰集戒仙の歌、「朝ごとに露はれけども人戀ふる我が言の葉は色もかはらず」などもあり。

秋も来ずつゆもおかねと言の葉はわがためにこそ色かはりけれ

○これも同じ人の、同じころの詠にやとせばし。歌の意はまへのにて明なり。

公平の女死ぬとて、

長けくもたのみけるかな世の中を袖になみだのかゝる身をもて

○長けくもの歌、袖に涙のは、かゝると云はん料ながら、まことに涙にくれたるさま見えて哀にきこゆ。

桂のみこ嘉種に、

露しげみ草のたもとをまくらにて君まつむしのねをのみぞなく

○露しげみの歌、君を待ちつゝ音をのみ泣くとなり。

閑院のおほい君、

むかしより思ふ心はありそらみの濱のまさごはかずもしられず

○閑院のねほい君、源宗子の女にて、後撰集の作者なり。○むかしよりの歌、昔より、思

第百十六段

第百十七段

第百十八段

第百十九段

ふ心は限もなしとなり。

同じ女に、みちのくよの守にて死にし、藤原の眞樹がよみておこせたりける、病いと重く去ておこたりける頂なり。いかでたいめ給はらんとて、

からくしてをじみとめたる命もて逢ふことをさへやまんとやする  
といへりければ、おほい君、かへし、

もろともにいざとは云はで死出の山などは一人越えんとはせし  
といひたりけり。

○たいめ、對面の字音。○からくしての歌、さへは物の添ひ加はる意。やまんは、止まんに病まんを添へたり。○もろともにもにの歌、いざは誘ふ詞なり。俗言のサアといふにあたる。歌の意は、死出の山をも、共にこゝ越え侍るべきに、さばかりの御所勞のはぢをも、なごてかは知らせ給はざりし。若しうせ給ふこともあらば、我をば後かして、一人にて越え給ふにやとなり。

さて来たりける夜も、逢ふまじきとやありけん、得逢はざりければ、歸りにけり。さてあしたに、男の許より云ひおこせたりける、

あかつきはゆふつけ鳥のわび聲におとらぬ音をぞなさてかへりし



の葉に今もかゝれる云々は、秋になれば、露などしげくたくより、木の葉の色かはりて紅葉するものなれば、言の葉といふを、まことの木の葉に擬して、露のふりかゝりて色のかはれるよしを、契りし言のたがひたる意にいへるなるべし。後撰集戒仙の歌、「朝ごとに露はれけども人戀ふる我が言の葉は色もかはらず」などもあり。

秋も來ずつゆもおかねど言の葉はわがためにこそ色かはりけれ

○これも同じ人の、同じころの詠にやとればし。歌の意はまへのにて明なり。

公平の女死ぬとて、

長けくもたのみけるかな世の中を袖になみだのかゝる身をもて

○長けくもの歌、袖に涙のは、かゝると云はん料ながら、まことに涙にくれたるさま見えて哀にきこゆ。

桂のみと嘉種よしなに、

露しげみ草のたもとをまくらにて君まつむしのねをのみぞなく

○露しげみの歌、君を待ちつゝ音をのみ泣くとなり。

閑院のおほい君、

むかしより思ふ心はありそうみの濱のまさごはかずもしられず

○閑院のれはい君、源宗子みなもとのの女にて、後撰集の作者なり。○むかしよりの歌、昔より、思

第百十六段

第百十七段

第百十八段

第百十九段

ふ心は限もなしとなり。

同じ女に、みちのくよの守にて死にし、藤原の眞樹がよみておこせたりける、病いと重くまておこたりける頂なり。いかでたいめ給はらんとて、

からくしてをしみとめたる命もて逢ふことをさへやまんとやする  
といへりければ、おほい君、かへし、

もろともにいざとは云はて死出の山などは一人越えんとはせし  
といひたりけり。

○たいめ、對面の字音。○からくしての歌、さへは物の添ひ加はる意。やまんは、止まんに病まんと添へたり。○もろともとの歌、いざは誘ふ詞なり。俗言のサアといふにあたる。歌の意は、死出の山をも、共にこゝ越え侍るべきに、さばかりの御所いんぎょ勞のほごをも、なごてかは知らせ給はざりし。若しうせ給ふこともあらば、我をば後かして、一人にて越え給ふにやとなり。

さて來たりける夜も、逢ふまじきとやありけん、得逢はざりければ、歸りにけり。さてあしたに、男の許より云ひおこせたりける、

あかつきはゆふつけ鳥のわび聲におとらぬ音をぞなさてかへりし



おほい君、かへし。

あかつきの寢覺の耳に聞さしかど鳥よりほかのこゑはせざりき

○あした、翌朝なり。○あかつきはの歌、木綿着鳥は、袖中抄に、ゆふつけぞりとほ、に

はとりをいふなり、世の中のさわがしき時、四境の祭とて、おほやけのせさせ給ふに、にはどりにゆふをつけて、四方の關に至りてまつるなりとあり。○あかつきの歌、鳥にも劣らぬ音を泣きしとはの給へど、更に鳥より外には、聞ゆる聲もなかりしとなり。

太政大臣は、大臣になり給うて、年ごろおはするに、枇杷の大臣は、えなり給はでありわたりけるを、遂に大臣になり給ひける御よろこびに、太政大臣、梅を折りてかざし給うて、

遅く疾くつひに咲さける梅の花たが植ゑおさし種よかあるらんとありけり。

○太政大臣、忠平なり。○枇杷の大臣、仲平なり。忠平の兄ながら、久しく大臣になり後れたり。すなはち忠平は、延喜十四年八月二十五日、右大臣に任せられたれど、仲平のはじめて右大臣となりしは、承平三年二月十三日なれば、其の間、實に十九年の久しきを經たり。かくて承平七年正月左大臣に進み、天慶八年九月七十一にて薨す。○遅く疾くの歌、二人を、

梅の花の、遅きと速きとあれど、終には、何れの花も咲き出づるにたとへて、兄弟ながら、うち揃ひ、大臣になりしを悦びたるなり。たが植ゑれきし種とは、我々の、かく顯職に陞り得るも、是併しながら、先考基經公の、なし置かれたる御恩徳ぞとなり。

その日の事どもを、歌など書さて、齋宮に奉り給ふとて、三條の右の大殿の女御、やがてこれに書さつけ給うける、

いかでかくとしぎりもせぬ種もがな荒れゆく庭のかげとたのまんとありけり。その御返し、齋宮よりありけり。忘れにけり。かくて願ひ給うけるかひありて、左の大臣の中納言、渡り住み給うければ、種みなひろごり給うて、蔭多くなりけり。さりける時に、齋宮より、

花ざかり春は見にこん年ざりもせずといふたねは生ひぬとか聞く

○齋宮、柔子内親王なり。宇多天皇の皇女。○三條の右の大殿の女御、三條の右大臣の女なる女御にて、善子なり。三條の右大臣は、上にしばし出でたり。○いかでかくの歌、としぎりは、としぎらひの約にて、樹木の年によりて、實をむすぶことなきをいふ。この歌、後撰集雜一に、三條右大臣みまかりて、あくる年の春、大臣めしありと聞きて、齋宮のみこにつかはしける、むすめの女御、「いかでかの年ざりもせぬ種もがな荒れたる宿に植ゑて見るべく」とありて、下の句やゝたがへり。○左の大臣の中納言渡り住み給うければ、左の大臣の中納



第二百一十二段

言は、小野宮左大臣實頼の、中納言なりし時をいへり。渡り住み給うは、實頼の、女御の許へ通ひ給ふなり。○種みなひろごりて蔭多く云々、ひろごりてはひろがりてなり。蔭多くは、子孫多く一族さかゆるをいふ。○さりける時、しかありける時なり。○花さかりの歌、これも後撰集雜一に、かの女御の、左のれはいまうち君にあひにけりと聞きてつかはしける、齋宮のみことありて、花さかり春は見にこんを、春ごとに行きてのみ見んとしたり。

實任の小貳といひける人のむすめの男、

笛たけのひとよも君とねぬ時はちぐさの聲に音こそ泣かるれ  
といへりければ、女かへし。

千々の音はことばのふさか笛竹の胡竹の聲もさこえこなくに

○笛たけの歌、一夜は竹の節とつゞけたり。ちぐさの聲は、笛には色々の音の出づるものなれば、それによせて、一夜も君と逢はざる時は、千々に心の乱れて、うち歎かるよよとの意なり。○ちぐさの音はの歌、ことばのふさかは、ことばの云ひなしかといふ意を、笛の縁にてかくいへり。胡竹は竹の笛をいふ。こなくには、來ざるになり

第二百一十二段

とし子が志賀に詣でたりけるに、増基君といふ法師ありけり。それは比叡にすむ院の殿上もする法師になんありける。それこの俊子の詣で來たる日、志賀に詣であひにけり。端殿に局をして居て、よろづの事をいひかはしけり。

今は俊子かへりなんとしけり。それに増基のもとより、

逢ひ見ても別るゝことのならせばかつゝ物は思はざらまじ

かへし、俊子、

いかなればかつゝ物を思ふらん名残もなくぞわれはかなしき

となんありける。詞もいと多くなんありける。

○志賀、近江國にあり。○増基君、後撰集の作者に、増基法師とあるを、袋草子に、大和物語に侍る増基君歟、件の人殿上法師云々とあり。○端殿、御殿のはしつ方なり。○あひ見てもの歌、かつゝは、ひたすらの反對にて、何となく物の思はるゝをいふべし。この歌、後撰集(戀三)には、あひ語らひける人、これもかれも包むことありて、離れぬべく侍りければつかはしける、よみ人しらすとあり。○いかなればの歌、これなるかつゝは、僅かに、聊かなと譯すべし。各残もなく云々は、極めて悲しき意なり。

おなじ増基君、やれる人の許は知らず、かうよめりけり。

草の葉にかゝれる露の身なればやこゝろうごくに涙おつらん

○草の葉にの歌、露のは露の如きの意。心動きて涙おつるを、草の動けば露の落つるに比して云へり。

第二百一十四段

本院の北の方、まだ帥の大納言の妻にいますがりける折に、平仲がよみて



聞えける。

春の野にみどりにはへるさねかづらわが君さねとたのむいかにぞ  
といへりける。その後左の大臣の北の方にて、のしり給うける時、よみて  
おこせたりける。

ゆくすゑの宿世もしらすわがむかしちぎりしことはおもほゆや君

となん云へりける。そのかへし、それよりまへへも、歌は多かりけれど、え  
聞かず。

○本院、時平なり。大鏡裏書に、本院贈太政大臣時平公、昭宣公一男、母四品彈正尹人康親  
王女云々、昌泰二年二月十四日任左大臣、年二十九云々、延喜七年正月七日叙正二位、同九年  
四月四日薨、年三十九、同五日贈太政大臣正一位と見ゆたり。○北の方、在原棟梁の女に  
て、初め國經に歸ぎたりしを、時平奪ひて我が妻とせり。○帥の大納言、藤原國經なり。長  
良の一男、基經の兄(基經は長良の實子なり)にて、時平の伯父に當れり。なほ古今集目錄に、  
寛平六年正月七日從三位、四月十六日兼太宰權帥、五月五日任權中納言、延喜二年正月廿六日任  
大納言、三年正月七日正三位云々とあり。○いますがりけるをり、ねはしけるをりに同じ。  
○春の野にの歌、上の句は、同音の語を重ねて、(我が君をへだて)とさねと云はんために置  
きたる序詞なり。わが君さねのさねは、まらうとさねなどいふさねと同じく、實の字にて、わ

が實の妻とたのみたさが、いかに思召すぞとの意なり。○左の大臣の北の方にてのしり給う  
ける云々、左の大臣は時平なり。のしり給うは時めき給ふ意。○ゆくすゑの歌、ゆ  
くさきはかく、本院の北の方となり給ふべき宿縁のありとも知らず、るのかみ君に契りま  
らせし事は、なほ忘れで思ひぬ給ふや否やとなり。契りしとは、我が君さねの歌をさして  
しへり。

泉の大將、故左のおほいどのにまうで給へりけり。外にて酒などままり、酔  
ひて、夜いたく更けて、ゆくりもなくものし給へり。大臣驚き給ひて、いづく  
に物し給へるたよりにかあらんなど聞え給うて、御格子あけさわぐに、壬生  
の忠岑御供にあり。御階のもとに松ともしながら、ひざまづきて御消息まう  
す。

かさゝぎのわたせる橋の霜の上を夜はに踏みわけことさらこそ  
となんの給ふと申す。

○泉の大將、藤原定國なり。高藤の男にて、從三位大納言兼右近衛大將たり。延喜六年七月  
三日薨す。年四十。さて、大將は、近衛府の長官にて、職原鈔に、大將相當從三位、  
山名羽林大將軍、當云三將府、又  
幕下、又云三太樹、又柳登、總取將軍之稱也、非譜第之花族者更不任之、多是大納言中、譜第上藤  
任此、於執柄息者、越次所任也、又多彼任左也、至大臣帶之、爲規模、又中納言任之、於



凡人稱為眉目、參議時任例、後二條關白師道公也、近代不可有此比量者歟、又任大將人其儀大略同大臣、只守位次著座計也、其外作法不混余人者也見たり。○故左のねはいどの、時平をいふ、大殿は大臣にねなじ、○ゆくりもなくものし給へり、ゆくりもなくは、思ひがけもなくなり。不意になり。ものし給へりはまゐり給へりの意。○壬生の忠岑、古今集目錄に、右衛門府生御厨子所、定外膳部、攝津權大目、忠實之父、和泉大將定國隨身云々と見ゆ、又作者部類に、從五位下安綱の男とあり。有名なる歌人にて、古今集の撰者なり。○松ともしなから、松は松明なり。松明を燈すは、庭上の明を取らんとてなり。○かさぎの歌、上の句は「鶴の渡せる橋にねく霜の白さを見れば夜を更けにける」といふ歌によりて、夜の変更けたるをいへり。下の句の、ことさらにこそは、時平の、いづくにもものし給ふたよりにかあらんと云へるを受けて、他所へゆきたる序には侍らす、わざりこの殿をさしてこそ、まうでたるなれとなり。○となんの給ふと申す、と大將の給ふと、忠岑が申すなり。

あるじの大臣、いとあはれにをかしたればして、その夜一夜大御酒まあり、遊び給うて、大將にものかづけ、忠岑も祿賜りなごしけり。この忠岑が女ありとき、或人なん得んと云ひけるを、いとよきことなりと云ひけり。男のもとより、かのたのめ給ひしこと、この項のほどにとなん思ふといへりける返事に、

我が宿のひととす、さうらわかみ結びとときにはまだしかりけり  
 となんよみたりける。まことにまだいと小さ女になんありける。

○ものかづけ、纏頭を賜はりしなり。○祿、纏頭なり。○或人なん得んと云ひけるを、或人が娶らんと云ひしになり。○かのたのめ給ひしこの項のほどに云々、かのたのめ給ひしとは、いとよき事なりと承諾したりしをいふ。この項のほどに云々は、近きうちに貰ひ受けたしと思ふとなり。○わが宿の歌、むすめのまだいと小く、嫁するには早きを、薄によせてよめり。伊勢物語「うら若みねにげに見ゆる若草を人の結ばんことをしそ思ふ」

筑紫にありける檜垣の御といひけるは、いとらうありをかしくて、世を経たるものになんありける。年月かくてあり渡りけるを、純友がさわぎにあひて、家も焼け滅び、物の具も皆捕はれ果て、いといみじうなりにけり。かへりとも知らで、野大貳うての使に下り給うて、それが家のありしわたりを尋ねて、檜垣の御と云ひけん人に、いかで逢はん。いづくにか住むらんとの給へば、このわたりになん住み侍りしなど、供なる人も云ひけり。

○檜垣の御、初は筑前の太宰府に住みし白拍子なるが、後にはねどるへて、肥後の白川のはとりに住みしよし謠曲に見ゆ、又袋草子にも、肥後國の遊君檜垣など見ゆ。歌に長じて、檜垣



姫家集一卷あり。所載の詠、僅に三十首ばかりなれど、遂に常人の作に勝れたれば、後撰集な  
 ど、勅撰の歌集にも載せられ、又はしがきの文は殊に多くて、扶桑拾葉集にも採録せられたり。○  
 らう、 勞の字なり。よく物になれたるをいふ。○をかしくて、 風流にてなり。○年月かく  
 てあり渡りけるを、 年頃かく風流にて過したるをなり。○純友がさわぎ、 朱雀天皇の御宇、  
 藤原純友、亂を南海に起し、やがて太宰府に走りて、いたく管内を騒がしければ、その時の事  
 をいへり。○物の具、 調度なり。道具をいふ。○いとみじうなりにけり、 甚しく衰へた  
 るをいふ。○かゝりとも知らで、 かく衰へてありとも知らでなり。○野大貳、 小野好古な  
 り。純友と共に上に註せり。○わたり、 あたり(邊)なり。

あはれかゝるさわぎに、いかになりにけん。尋ねてしがなとの給ひけるほど  
 に、頭白き<sup>あか</sup>姫の水汲めるなん、前より怪しきやうなる家に入りける。人ありて、  
 これなん檜垣の御といひけり。あはれがり給うて、呼ばすれど、耻ぢて來て、  
 かくなん云へりける。

うばたまの我が黒髪はしら川のみづはぐむまでなりにけるかな  
 とよみたりければ、あはれがりて、着たりける柏一襲なんやりける。

○尋ねてしがな、 尋ねたきこととなり。○姫、 老女なり。○前より怪しきやうなる家に入

りける、 前よりは野大貳の前よりなり。あやしきは賤しき意。賤しく見苦しげなる家に入り  
 しどなり。○呼ばすれど、 供人になり。○うばたまの歌、 うばたまのは、黒にかゝる枕  
 詞。白川は、我が黒髪も白くなれりといふ意に云ひかけたり。みづはぐむは、みづはさすと云  
 ふも同じ。老人の齒抜けて、又小齒の生ずるを云へり。さてこゝは、水を汲むといふに云ひか  
 けて、かく自身にて水汲むまでに衰へたる意を含ませたり。この歌、後撰集(雜三)には、つくし  
 の白川といふ所に住み侍りけるに、大貳藤原興範朝臣のまかり渡るついで、水たべんとて、打  
 ち寄りてこひ侍りければ、水をもて出で、よみ侍りける。年ふれば我が黒髪も白川のみづはぐ  
 むまで老いにけるかな。また家集には、老いにきはめて、すみかのなくなりて、手づから水く  
 むきはになりて、桶をひきさげて出づるにしも、國の守しばし出でらるゝ道にさしあひて、め  
 かもなるもの見つけて、なごかくはなご見答むるに、名高き檜垣なりと人のいへば、はたかく  
 るゝに、呼び出づ、恥しけれど、かくれ所もなく、桶を岸にたきて居たれば、いかでいどか  
 くはありしぞ、あはれなごあれば、思ひわびて、「わいはて、かしらの髪はしら川のみづはぐむ  
 までなりにけるかな」とありて、何れも詞書はさらなり、歌もやゝたがへり。○柏、 女の下  
 着なり。和名抄に、女人近身衣也と見ゆ。

また同じ人、大貳の館にて、秋の紅葉をよませければ、

鹿の音はいくらばかりのくれなゐぞふり出づるからに山のそむらん

○同じ人、 檜垣の姫をいふ。○大貳の館、 野大貳の旅館なり。○鹿の音はの歌、 この



第百二十八段

歌、家集には、白川の歌の次に、立ち去らで紅葉をよませしとあり。鹿の鳴くと、紅葉するとは、同じ頂なればかくよめり。くれなゐはくれのゐる(吳の藍)の約。ふり出づるは、聲をふり立て、鳴くをいふ。さて紅色に染むる時は、るの物を染草の水に入れて、しばし振動かし、色深く染出すものなれば、るの意をかねて云へり。古今集夏の部、(よみ人しらす)「れもひ出づるときは山の時鳥からくれなゐのふり出てそなく」

この檜垣の御、歌なんよむといひて、すきものども集りて、よみがたかるべきすゑをつけさせんとて、かくいひけり。

わたつみの中に立てるさを鹿はとて、末をつけさせるに、

秋のやまべやうこに見ゆらん

とぞつけたりける。

○すきもの、物好なる人といふ。好事者なり。○わたつみの云々、わたつみは海なり。海の中に立てる鹿といふにて、實際あるまじき事の難句を云ひ掛けたるなり。○秋の山べや云々、家集には山べそとあり。秋の山が水の底にうつりて見ゆるならんとなり。

筑紫なりける女、京に男をやりてよみける。

人を待つ宿はくらくそなりにける契りし月のうちに見えねば

第百二十九段

となん云へりける。

○筑紫なりける女、この段の歌、檜垣の家集にも出でたれば、この女は檜垣にやと思へど、また新後拾遺集(戀三)には、監命婦として出でたれば、にはかに誰とも定め難し。○人をまつ歌、男の京へ行かんとするをり、かねて歸るべき月を契り置きて出でしが、るの月のうちに見えざりければ、かくよみしものなること、新後拾遺集のこの歌の詞書に、男の人の國へまかりて、かへりこんといひけるは、過ぎにければ、よみてつかしはけるとあるにて明なり。さて右の集には、やどをかど、契りしをたのめしとあり。

これも筑紫なりける女、

秋風のころやつらき花すゝき吹さ來る方をまづむくらん

○この歌も、檜垣の家集に見ゆ。

先帝の御時、四月の朔日の日、鶯の鳴かぬをよませ給うける、公忠

春はたゞさのふばかりを鶯のかざれるごともなかなぬ今日かな

○先帝、醍醐天皇を申す。○春はたゞの歌、春は昨日にてつきたれば、最早や鶯の、春のものに限れるやうに、今日よりは鳴かぬことよとなり。

同じ帝の御時、躬恒を召して、月のいとおもしろき夜、御遊などありて、月を

第百三十段

第百三十一段

第百三十二段



弓張といふは、何の意ぞ。ろのよし仕うまつれと仰せ給うければ、御階の下にさぶらひてつかうまつりける。

照る月を弓張としもいふことは山邊をさしていればなりけり  
祿に大褂かづきて、

白雲のこのかたにしもかりゐるは天つ風こそ吹きて來つらし

○ろのよしつかうまつれ、ろのよしを歌によめなり。○照る月の歌、弓張は、和名抄に、弦月、劉濤釋名云、弦月月之半名也、其形一旁曲一旁直若張弓弦也、弦和名由美八利とあり。いればなりけりのいるは、入るに射るをかけたなり。○大褂、婦人の上衣なり。○しら雲の、歌、白雲は大褂をたとへ、このかたは此方と此肩とをかけたなり。ろは纏頭を賜りたる時は、肩にうちかけて、拜舞するものなればなり。さて天つ風には、帝をたとへまつりて、このかたに白雲のれりゐるかと見ゆる、この美事なる大褂は、帝より賜りたるものにて、實に一家の面目、身にあまりたるよろこびよとなり。この段、大鏡にも出で、其のすゑに、いみじかりしものかな。さばかりのもの（躬恒の地位いやしきをいふ）をちかくめしよせて、勅祿たまはずべきことならねど、ろしり申す人のなきも、君のおもくれはしまし、また躬恒が和歌の道にゆるされたるどころ思ひ給へしか云々とあり。

おなじ帝、月のおもしろき夜、みそかに御息所たちの御曹子どもを、見あり

かせ給うけり。御供に公忠さぶらひけり。それにある御曹子より、濃き袿一襲着たる女の、いと清げなる出で來て、いみじう泣きけり。公忠を召して見せ給うければ、髪を振りおほひていみじう泣く。なごて泣くぞといへど、いらへもせず。帝いみじう怪しがり給うける。公忠、

思ふらんころのうちは知らねどもなくを見るころかなしかりけりとよめりければ、いと一なくめで給うけり。

○みろかに、密になり。○いらへ、返事なり。○思ふらん歌、意は明なり。

先帝の御時に、ある御曹子に、きたなげなき童ありけり。帝御覽じて、みそかに召してけり。これを人にも知らせ給はで時々召しけり。さての給はせける、あかでのみふればなるべし逢はぬ夜もあふ夜も人をあはれと思ふとの給はせけるを、童の心地にも、かぎりなくあはれにおぼえければ、忍びあへで、友たちにさなんの給ひしと語りければ、このあるじなる御息所聞きて追ひ出し給うけるものか、いみじう。

○あかでのみの歌、意は明かなるべし。この歌、新勅撰集戀三に、題しらず、延喜御製として出で、ふればなるべしを、ふればなりけりとしたり。○忍びあへで、忍び能はでなり。○



ものか、さはあるまじきこと、驚き嘲るやうの所に用ゐる詞なり。

三條右大臣の女、堤の中納言に逢ひはじめ給うける間は、内藏助にて、うち  
の殿上をなんし給うける。女は逢はんの心やなかりけん、心もゆかずなんい  
ますがりける。男もみやづかへし給うければ、えつねにもいままさざりけるこ  
ろ、女、

たさもののくゆる心はありしかごひとり絶えてねられざりけり

返しは、上手なればよかりけめど、え聞かねばかかず。

○三條右大臣、定方なり。○内藏助にて、兼輔この時内藏助なりしとなり。内藏助は、内  
藏寮の次官にて、職原鈔に、内藏寮唐名倉部、又云三小府、掌御服御膳等事とありて、助用名倉部員外郎、近  
代多者降陰二道任之勤仕賀茂祭内藏使者也と見えたり。○心もゆかず、氣も進まずなとい  
ふ意。○たさものの歌、くゆるはふすぶるといふ意と、悔ゆるをかけ、ひとりは一入と、  
黄爐ひいろとをかけていへり。黄爐とは董物たからものをたくに用ゐる火入なり。

また、男、日ごろさわがしくてなんえまゐらぬ。かくいそぎまかりありくろ  
ちにも、えまゐり來ぬことをなん、いかにとかざりなく思ふ給ふるとありけ  
れば、女、

さわくなるうちにも物はおもふなりわがつれどを何にたとへん  
となんありける。

○男、兼輔をいふ。○えまゐり來ぬとをなん云々、我の心等らぬとを、如何にねばし給ふ  
にかど、それのみ心にかゝりてればえ侍るとなり。給ふるは下二段活用にて、おのれの動詞に  
添へて、敬意を示すに用ゐる詞にて、侍るといふに同じ。○さわくなるの歌、しかさわがし  
き時にさへ、物は思はれ侍るを、ましてわがつれどなるほどの思ひは、何にかはたとへ侍ら  
んとなり。

志賀の山越の道に、岩江といふところに、故兵部卿の宮、家をいとをかしり  
つくり給うて、時々おはしましけり。いと忍びておはしまして、志賀に詣づ  
る女どもを見給ふ時もありけり。大方もいとおもしろう、家もいとをかしり  
なんありける。俊子、志賀に詣でける序に、この家に来てめぐりつゝ見て、あ  
はれがりめでなごとして、書きつけたりける。

かりにのみくる君待つとふり出で、鳴くしかやまは秋ぞかなしき  
となん書きつけていにける。

○志賀の山越、袖中抄に、しかの山こえとは、北白河の瀧のかたはらよりのぼりて、如意  
の峯たけこえて、志賀へ出る路也、經頼卿記云、後一條院、御とき、殿上人紅葉逍遙のために、し



かの山越すといへり、經於瓜生山面歩行云々、瓜生山とは、白河の瀧、上なり云々とあり。○故兵部卿の宮、元良親王なり。○志賀に詣づる女ども、志賀に詣づるとは、志賀の崇福寺に詣づるをいふべし。崇福寺は天智天皇の健立し給ひしものにて、世に志賀寺といひ、昔はいたぐ諸人の信仰せし寺なり。○大方もいとねもしろう、ろこのさまの、ねしなべて面白さをいふ。○かりにのみ歌、かりはかりそめの意。君は元良をさす。ふり出で、は聲を振立てゝなり。猿丸大夫「ねく山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲さく時そ秋はかなしき」

第三百十八段

小薬師久曾といひける人、ある人をよばひてれこせたりける、

かくれぬの底の下草みがくれて知られぬこひはくるしかりけり、  
かへし、女、

みがくれにかくるばかりの下草は長からじともれもほゆるかな  
この小薬師といひける人は、丈たけなんいと短かかりける、

○小薬師久曾、不詳。○かくれぬの、歌、かくれぬは物蔭などに隠れたる沼。みがくれては水の中にかくれてなり。上の句は、次の知られぬと云はん序詞なり。○みがくれにの歌、水の中に隠るゝほどの草は、短かゝるべしといへるにて、この人の丈低きとを戯れてよめり。先帝の御時に、承香殿の御息所の御曹子に、中納言の君といふ人さぶらひけり。それを故兵部卿の宮、わか男にて、一の宮と聞えて色好み給うけるころ、

第三百十九段

承香殿は、いと近き程になんありける。らうあり、をかしき人々ありと聞き給うて物などの給ひかはしけり。さりけるころほひ、この中納言の君に、忍びて寐給ひそめてけり。時々おはしまして後に、この宮をさく訪ひ給はざりけり。さるころ、女のもとよりよみて奉りたりける、

人をとくあくた川てふ津の國のなにはたがはぬ君にぞありける

かくて物もくはで、泣くく病になりて戀ひたてまつりける。かの承香殿の前の松に、雪のふりかゝりたりけるを折りて、かくなん聞えたてまつりける、  
來ぬ人をまつの葉にふる白雪の消えこそかへれ逢はぬ思ひに  
とてなん、ゆめこの雪おとすなと、使にいひてなん奉りける。

○一の宮、元良は陽成院第一の皇子なれば、かく聞えしなり。○物などの給ひかはしけり、「御息所どしたしみ給ふなり。○人をとくの歌、芥川はあくど云ひかけたり。なには、名にはに難波をうへたり。芥川、難波ともに攝津國なり。歌の意は、人をとく忘れ給ふ、いとあだなる君にてありしよとなり。この歌、五の句、拾遺集(戀五)には、ものにぞありけるとあり。○こぬ人をの歌、まつの葉は、こぬ人を侍つといひかけたり。消えこそかへれば、消え入ることを強くいひたるなり。この歌、後撰集(戀四)には、二の句、まつのねにふるとあり。○ゆめ、決してなり。



故兵部卿の官、昇の大納言の女にすみ給うけるを、例のおまじごころにはあらで、庇におまし敷きて、ねほとのごもりなどして、歸り給うて、ほどひさしうればしまさざりけり。かくての給へりける、かの庇に敷かれたりしものは、さながらありや。とりたてやし給ひてことの給へりければ、御返事に、

じさかへずありしなからに草まくらちりのみぞあるはらふ人なみとありければ、御返しに、  
くさまくらちりはらひにはから衣たもとゆたかにたつをまてかしとあれば、また、

から衣たつをまつまのほどこそはわがじきたへのちりもつもらめとなんありければ、おはしまして、また宇治へ狩しになんいくとの給ひける御返しに、

みかりするくりこま山の鹿よりもひとりぬる夜ぞわびしかりける  
○昇の大納言、源昇なり。河原左大臣融の男にて、延喜十四年大納言となれり。○すみ給うける、通ひ給ふをいふ。○例のれましごころ、常の御座所なり。○庇、母屋の四面にあつる狭き間をいふ。○さながらありやとりたてやし給ひてし、ろのまゝなほありや。はた取り

のぞかれきやとなり。○しさかへずの歌、ありしなからにはありしまゝにてなり。草枕は旅の枕詞なれど、こゝは枕のとに用ゐたりと聞ゆ。はらふ人なみは拂ふ人なければなり。拂ふ人なしとは、宮の訪はざるをいへり。○草枕の歌、ゆたかには充分になり。ゆるやかになり。我のかく訪ひまゐらせぬは、ろの枕の塵を拂はんために、袂をばゆたかにたつほどなれば、しばらく待ち給へとなり。○から衣の歌、しきたへは枕をいふ。○み狩するの歌、ぬるはねるなり。

良殖といひける宰相のはらから、大和の掾といひてありけり。それもとの妻のもとに、筑紫より女をゐて来てすゑたりけり。もとの妻も心よく語らひ居たりけり。かくてこの男は、こゝかして、人の國がちにのみありきければ、二人のみなん居たりける。この筑紫の妻、忍びて男したりけり。それを人のとかく云ひければ、よみたりける、

よはに出で、月だに見ずばあふとを知らずがほにもいはましものをとなん。

この段、檢垣姫家集にもあり。○良殖、樹良殖なり。參議常主の孫にて、從五位上吉雄の二男、延喜十九年參議となり、二十年二月卒す。○人の國がちに云々、受領などにて、他國がちなりしなり。○二人、前妻と後妻となり。○よはに出で、この歌、わが密夫に逢ふとを、



夜なしの月は見給ふべけれど、他に誰人としてなければ、若しこの月さへ見ぬことならば、無實の浮名とも云ひて、遣れんものをとなり。この歌、檢垣の家集には、二の句、月に見給はずばとあり。

かゝるわざをすれど、もとのめ心よき人なれば、男にもいはでのみなんあり渡りけれども、外のたよりより、かく男すなりと聞きて、この男思ひたりけれど、心にも入れて、たゞさるものにて置きたりけり。さてこの男、女こと人に物いふと聞きて、その人と我と、いづれをか思ふと問ひければ、女、

花すゝき君がかたにぞなびくめる思はぬ山のかせはふけども

となんいひける。よばふ男もありけり。世の中心うし、なほ男せじなど云ひけるものなん、この男をやうく思ひやつさにけん、この男のかへりことなごしてやりて、このもとの妻のもとに、文をなん引き結びておこせたりける。見ればかくかけり。

身をうしと思ふ心のこりねばや人をあはれとおもひそむらん

となん、こりすまによみたりける。

○この男、大和掾なり。○花すゝきの歌、意は明なり。此歌、檢垣の家集にはなし。○世

の中こゝろうし云々、わがあだなる心もて、大和の掾にも疎まれ、かく心愛き目にもあへば、又よばふ男あれど、最早や男などはせじといひたる者(後妻が、このよばふ男に、やうく思ふ心の出で来やしけん、うの返事なごして、このもとの妻のもとに、左の歌をれくりたりとなり。○身をうしとの歌、意はよく聞たり。○こりすまに、こりもせずになり。

かくて心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに、男は心かはりにければ、ありしごとくもあらねば、かの筑紫に、親同胞などありければいさけるを、男も心かはりければ、とゞめてなんやりける。もとの妻なん諸共にありならひにければ、かくていくとをいと悲しと思ひける。山崎にもろともにいきてなん、船にのせなごしける。男も来たりけり。このうはなりこなみ、ひと日ひと夜、よろづの事をいひ語らひて、つとめて船にのりぬ。今は男もとの妻は、歸りなんとして車にのりぬ。これもかれもいと悲しく思ふほどに、船にのり給ひぬる人の文をなんもてきたる。かくのみなんありける。

ふたり来し道とも見えぬ浪の上を思ひかけてもかへすめるかな  
といへりければ、男ももとの妻も、いといたう哀がり泣きけり。漕ぎ出でいぬれば、え返事もせず。車は船の行くを見てえいかず。船にのりたる人は



車を見ると、面をさしいで、漕ぎゆけば、遠くなるまゝに、顔はいと小くなるまで見おこせければ、いとかなしがりけり。

○いとあはれと思ふほどに、もとの妻がなり。○ありならひにければ、あり馴れたればなり。○山崎、山城國乙訓郡にあり。こゝより船に乗りて、淀川を下りしなるべし。○うはなり、後妻にて筑紫の妻なり。○こなみ、前妻にてもとの妻なり。○ふたりしての歌、つくしより上りし時は、男と二人にて來たる道ながら、一人のみ歸る悲しさには、うれども見えぬ浪の上を、男は何の思ひもなく、歸し給ふと見ゆるよとなり。この歌、檢垣の家集には、浪の上を、浪の上に、かへすめるをかへるめるとしたり。

故御息所の御姉、おほい子に當り給ひけるなん、いとらうくじく、歌よみ給ふとも、おとうとたち、御息所よりも勝りてなんいますがりける。若き時に、女親はうせ給ひにけり。まゝ母の手にいますがりければ、心に物の叶はぬ時もありけり。さてよみ給うける、

ありはてぬ命まつまのほどばかりうさことしげくなげかずもがな  
となんよみ給うける。梅の花を折りて、また、  
かゝる香の秋もかはらずにほひせば春こひしてふながめせましや

とよみ給へりける。

○おほい子、第一の姉なり。○らうくじく、物事になれて巧者なるをいふ。○れとうと、妹なり。○ありはてぬの歌、この世と共にありはつべき命にもわらず、やがて死なざるを待つ間の、僅かなるはせなりとも、いかで愛さ事おほく、歎かすてありたしとなり。この歌、五の句、思はずもがなとかはりて、古今集雜下に、「うさ世には門させりとも見ぬなくなどかわが身のいでがてにする」といふ平定文が歌にならびて出でたり。○かゝるかの歌、かゝる梅の香の、秋もするものならば、春をこひしと思ふながめをせんやとなり。ながめとは物思ふ時は、何となく物のうち眺めらるゝものゆゑ、物思ひのさまをいへり。

いとよしづきて、をかしくいますがりければ、よばふ人もいと多かりけれど返事もせざりけり。女といふもの、遂にかくてはて給ふべきにもあらず、時々は返事し給へと、親もまゝ母もいひければ、責められて、かくなんいひやりける。

思へどもかひなかるべみしのぶればつれなきともや人の見るらんとばかりいひやりて、ものもいはざりけり。かくいひける心ばへは、親など男あはせんといひけれど、一生に男せてやみなんといふとを、世と共にいひ



ける。さいひけるもとくるく、男もせて、廿九にてなんうせ給ひにける。

○よしづきて、よしありげに見えてなり。○思へども歌、我もひたすら思はざるにはあらねど、たゞ忍ぶことの深ければ、れのづから人にもつれなきやう見ゆるならん。さればかく思ふも、その甲斐なかるべきとよとなり。まことに思へるにはあるまじけれど、責められわびてかくいひのべしなり。○しるく、いちじるくなり。

むかし在中將の御息子、在次君といふがめなる人なんありける。女は山蔭中納言の御姪にて五條の御となんいひける。かの在次君の妹の、伊勢の守の妻にて、いますがりけるがもとにいきて、守のめしうごにてありけるを、この妻のせうとの在次君は、忍びてすむになんありける。我のみと思ふに、この男のはらからなん、又あひたるけしきなりける。さりければ女のもとに、

忘れなんと思ふ心の悲しさはうきさもうからぬものにぞありける

となんよみたりける。今は皆ふることになりたることなり。

○在中將、在原業平なり。拾芥抄に、平城天皇孫、阿保親王五男、從四位上藏人頭右近中將と見ゆたり。○在次君、滋春にて、古今集目錄に、藏人頭右近中將業平之二男、字在次君是也とあり。○山蔭中納言、藤原高房の男にて、從三位中納言たり。○めしうご、妾のこと

にて、五條の御なり。○この男のはらから、滋春の兄弟なり。棟梁などなるべし。○忘れなんの歌、忘れなんは、滋春より女を忘れんなり。同じ人を同胞してよばふもいと淺ましければなり。悲しさは、悲しさにはなり。うきさもうからぬ云々は、憂きとも憂しとればえぬまで、たゞかなしさの切なるよしなり。

この在次君、在中將のあづまにいきたるけにやあらん。この子ども、人の國かよひをなん時々しける。心あるものにて、人の國のあはれに心細き所々にては、歌よみて書きつけなどなんしける。小總の驛といふ所は、海邊になんありける。それによみてかきつけたりける。

わたつみと人を見るらん逢ふことのなみだをふさになきつめつれば又箕輪といふ驛にて、

いつはとはわかねど絶えて秋の夜ぞ身のわびしさは知りまさりけるとよみて書きつけたりけり。かくて人の國ありきくして、甲斐の國にいたりて、住みけるほどに、病じて死ぬとてよみたりける、

かりそめのゆきかひごとぞおもひしを今はかざりのかごでなりけりとよみてなん死にける。この在次君の一所に具して知りたりける人、三河の



國よりのぼるとて、この驛どもにやどりて、この歌どもを見て、手は見知りたりければ、見つけていとあはれと思ひけり。

○在中將のあづまにいきたるけにやあらん、あづまは東國をすべていふ。日本書記卷七、日本武尊東征の條に、亦進相摸欲往上總、望海高言曰、是小海耳、可立キチハレリコト跳渡、乃至于海中、暴風忽起、王船漂蕩而不可渡、時有從王之妾曰弟橘媛、穗積氏忍山宿禰之女也、啓王曰、今風起浪泌、王船欲沒、是必海神心也、願以妾之身、隨王之命而入海、言訖乃披瀾入之、暴風即止船得著岸、故時人號其海曰馳水也云々、於是、日本武尊曰、蝦夷凶首、成伏其辜、唯信濃國、越國、頗未從化、則自甲斐北轉、歷武藏上野、西逮于碓日坂、時日本武尊每有願弟橘媛之情、故登碓日嶺而東南望之、三歎曰、吾孀者耶、竊此云三故因號山東諸國曰吾孀國也とあり。けは故の意。業平の東下りのこと、伊勢物語にも、古今集にも見ゆたり。○小總、相摸にあり。○わたつみとの歌、あふことの涙は、あふとのなくといひかけたり。ふさには久にの意なり。さて涙をふさにといふに小總をかくせり。歌の意は、京に思ふ人などあれど、絶えて逢ふこともなくて、久しき間泣きつめたれば、ろの涙のつもりして、海ども人の見るならんかとなり。○箕輪、これも相摸にあり。○いつはとはの歌、いつはとは云々は、いつとて侘しからぬ時はなけれとなり。みのわびしさは、箕輪をかくして入る。古今集秋上「いつはとは時はわかぬと秋の夜ぞ物思ふことのかぎりなりける」○かりろめの歌、ゆさかひ

ぢは、往き來の路といふに甲斐路をかけたなり。歌の意は、この旅をば、たゞかりろめの往き來の旅と思ひたりしに、ろの時は早や暇乞の門出にてありしよとなり。この歌、古今集(哀傷の部)には、かひの國に、あひ知りて侍りける人とぶらはんとて、まかりける道中にて、にはかに病をして、いましとなりければ、よみて京にもてまかりて、母に見せよといひて、人につけ侍りける歌とありて、三の句、思ひこしとあり。○ひと所に具して、一緒に連れてなり。

第百四十五段

亭子の帝、河尻におはしましてにけり。うかれめにしろといふものありけり。召しにつかはしたりければ、参りてさぶらふ。上達部、殿上人、みこたちあまたさぶらひ給うければ、下に遠くさぶらふ。かう遙にさぶらふよし、歌つかうまつれと仰せられければ、すなはちよみて奉りける。

濱千鳥飛び行くかぎりありければ雲たつ山をあはとこそ見れとよみたりければ、いとかしこくめで給うてかづけ物たまふ。

いのちだに心にかなふものならば何かわかれの悲しからましといふ歌も、このしろがよみたる歌なりけり。

この設、大鏡にも見ゆたり。○河尻、攝津國河邊郡なり。○うかれめ、遊女なり。○し



る、古今集の作者に、しるめとあると同人なり。大江玉淵の女にて、攝津國江口の遊女なり。○下に遠くさぶらふ、下座の未はるかに居たるなり。○すなはち、即座の意。○濱千鳥の歌、我は濱千鳥の飛び行くに限ある如く、身分卑しければ、雲の立ちてある山をば、あれは何ぞと見るまでに、遙なる下にひかへて待るとなり。○いのちだにの歌、古今集離別の部に出でたる歌にて、其の詞書に、源のさねがつくしへゆあみんとて、まかりける時に、山崎にて、わかれをしみける所にてよめるとあり。歌の意は、命さへ思ふ如く心に叶ひて、死なずに居らるゝものならば、何ゆゑ別るゝとの悲しからん、悲しきことばあるまじとなり。

第四百十六段

亭子の帝、鳥飼の院におはしましにけり。例のごと御遊あり。このわたりのうかれめどもあまたまありてさぶらふなかに、聲おもしろく、よしあるものは侍りやと問はせ給ふに、うかれめばらの申すやう、大江の玉淵が女といふものなん、めづらしう参りて侍ると申しければ、見させ給ふに、さまかたちも清げなりければ、あはれがり給うて、うへに召し上げ給ふ。そもくまことかなど問はせ給ふに、鳥飼といふ題を、人々によませ給ひにけり。仰せ給ふやう、玉淵はいとらうありて、歌などよくよみき。この鳥飼といふ題を、よくつからまつりたらんにしたがひて、實の子とはおもはさんと仰せ給うけり。うけたまはりてすなはち、

浅みどりかひある春にあひぬれば霞ならねど立ちのぼりけり  
とよむ時に、帝のこりあはれがり給うて、御しほたれ給ふ。

この段、大鏡にも出で、また十訓抄にも見えたり。○鳥飼院、攝津國島下郡にあり。○うかれめばら、遊女どもなり。○大江玉淵、音人の男なり。○まことか、玉淵の女といふは實かとなり。○浅みどりの歌、大鏡には、一の句、深みどり、三の句、あふときはどあり。浅みどりは浅みどりの草をいひ、立ちのぼるは萌え出づることといへり。いやしき我が身も、院の面目ある御見出しにわづかりて、かくさし出でたりとの意を、草の萌え出づるとに寄せて云へるなり。さて浅みどりかひあるといふに、鳥飼をかくせり。○のこりあはれがり給うて御しほたれ給ふ、いみじくはめはやし、あはれに思して、御感涙に御袖をぬらさせ給ふとなり。

人々もよく酔ひたるほどにて、酔泣いと二なくす。帝、御掛一かさね、袴たまたふ。ありとある上達部、皇子達、四位五位、これに物ぬぎて取らせざらんものは、座より立ちねとの給うければ、かたはしより上下皆かづけたれば、かづきあまりて、二間はあり積みて置きたりける。かくて歸り給ふとて、南院



の七郎君といふ人ありけり。それなんこのうかれめの住むあたりに、家つくりて住むと聞し召して、それになんの給ひあつけゝる。かれに申さん事院に奏せよ。院より賜はせんものも、かの七郎がりつかはさん。すべてかれに佐しき目な見せそと仰せられければ、常になんとぶらひかへりみける。

○上下、上の人も、下つかたの人もなり。○南院の七郎君、是忠親王の第七子源清平のこどなり。

むかし津の國に住む女ありけり。それをよばふ男二人なんありける。一人は、その國に住む男、氏は菟原になんありける。今一人は、和泉の國の人になんありける。氏は血沼となんいひける。かくてその男ども、年よはひ、かほかたち、人のほど、たゞ同じばかりになんありける。志のまさらんところはあはめと思ふに、志のほどたゞ同じやうなり。暮るればもろともに来逢ひぬ。物かこすれば、たゞ同じやうにおこす。いづれまされりといふべくもあらず。女思ひわづらひぬ。この人の志のおろかならば、いづれにもあふまじけれど、これもかれも、月日をへて、家の門に立ちて、よろづに志を見えければ、しわびぬ。これよりもかれよりも、同じやうにおこする物ども、取りも入れねど、

いろくりに持ちて立てり。

この段は、萬葉集卷九に、過葦屋處女墓時作歌一首并短歌、古之益荒丁子各競妻問爲那牟葦屋乃菟名日乃處女與城矣音立見者永世乃語爾爲乍後人思爾世武等王梓乃道邊近盤橋作冢矣天雲乃退部乃限此道矣去人每行因射立嘆日感人者啼爾毛哭乍語爾德繼來處女等與城所吾并見者悲蒙昔思者一反歌「古乃小竹山丁子乃妻問石菟會處女乃與城叙此」語繼可良仁文幾許戀布矣直目爾見兼古丁子」また見菟原處女墓歌一首并短歌、「葦屋之菟名負處女之八年兒之片生乃時從小放爾髮多久麻庭爾並居家爾毛不所見虛木綿乃半而座者見而脚香跡他伯時之垣廬成人之詠時智奴壯士宇奈比壯士乃廬八燈須酒師競相結婚爲家類時者燒大刀乃手預卍禰利白檀弓朝取負而入水火爾毛將入跡立向競時爾吾妹子之母爾語久倭文手纏賤吾之故太夫之荒争兒者雖生應合有哉完申呂黃泉爾將跡隱沼乃下延置而打嘆妹之去者血沼壯士其夜夢見取次寸追去那禮婆後有菟原壯士伊仰天叫於長妣踏他牙喫建怒而如已男爾負而者不有跡懸佩之小劍取佩冬著積都良尋去那禮婆親族共射歸集永代爾標將爲跡遺代爾語將繼常處女墓中爾造置壯士墓此方彼方二造置有故緣聞而雖不知新裳之如毛哭泣鶴鴨」反歌「葦屋之宇奈比處女之與柳乎往來跡見者哭耳之所泣」墓上之木枝靡有如聞陳勢壯士爾之依倍家長信母」また卷十九に、追和處女墓歌一首並短歌、「古爾有家流和射乃久須婆之伎事跡言繼知努乎登古宇奈比壯士乃宇都勢美能名乎競爭登玉剋齋毛須底氏相爭爾孀問爲家留孀婦等之聞者悲左春花之爾太婆盛而秋葉之爾保比爾照有借身之莊尙大夫之語勢美父母爾啓別而離家海邊爾出立朝暮爾滿來湖之八隔浪爾



爾靡球藻乃節間毛惜命乎露霜之過麻之爾家禮與墓乎此間定而後代之間繼人毛伊也遠爾思努比爾  
 勞餘等黃揚小櫛之賀左志家長之生而靡「乎等女等之後能表跡黃揚小櫛生更生而靡家長思母」な  
 せあるをもととして、いさゝか趣をかへ、竹取物語の文体に似せて作れり。○菟原、攝津國  
 にあり。○血沼、和泉國にあり。いづれも其の地名を氏としたるなり。○同じばかり、ば  
 かりはほどなり。○あはめ、嫁せんの意。○物れこそれば云々、女に物をおくれば、二人  
 共になじやうに贈るとなり。○思ひわづらひぬ、いづれに嫁すべきかと思ひ煩ふなり。○こ  
 の人の志のねろかならば云々、この男の、ねろそかなる志ならば、いづれにもあはじと思へ  
 ざるなり。○しわびぬ、あふべきか、あふまじきか、いづれとも決しかぬるをいふ。  
 親ありて、かく見苦しく年月をへて、人のなげきをいたづらにおふもいとほ  
 し。ひとりトにあひなば、今一人が思ひは絶江なんといふに、女トにもさ  
 思ふに、人の志のおなじやうなるになん思ひ煩ひぬる。さらばいかゞすべき  
 といふに、そのかみ生田川のつらに、ひらばりをうちてぬにけり。かゞれば、  
 そのよばひ人ごもをよびにやりて、親のいふやう、誰も御志のおなじやうな  
 れば、このをさなきものなん、思ひ煩ひにて侍る。今日いかにまれ、この事を  
 定めてん。あるは遠き所よりいまする人あり。あるはこゝながら、そのいた

づきかぎりなし。これもかれもいとほしきわざなりといふ時に、いとかしこ  
 くよろこびあへり。

○人のなげきをいたづらにおふもいとほし、おふは負ひ持つ意。いとほしは氣の毒なり。詞  
 花集雜上(和泉式部)「あしかれと思はぬ山の峯にだにねふなるものを人のなげきは」○ひとり  
 一人にあひなば、二人のうち、いづれか一人にあひたらばなり。竹取物語に、ねもひ定め  
 て、ひとり一人にあひ給へや云々とあるも、同じ詞なり。○こゝにもさ思ふに、我もさや  
 うに思ふになり。○そのかみ、當時なり。うの時なり。○生田川、攝津國八部郡にあり。  
 ○つら、水面なり。○ひらばり、和名抄に、ヒラバ、周禮注云、平、張曰、亦羊羴反和名とあり。  
 たひらに張りて、日のねほひとしたる天幕なり。○このをさなきもの、女をいふ。○いかに  
 され、いかにもあれなり。○遠き所より云々、和泉の國より來たる男をいふ。○こゝなが  
 ら、この國ながらなり。○いたづき、勞苦なり。○いとかしこく、かしこくは甚しくな  
 り。二人の男の限なく喜びあひたりとなり。

申さんと思ふ給ふるやうは、この川に浮きて侍る水鳥を射給へ。それを射あ  
 て給へらん人に奉らんといふ時に、いとよき事なりといひて射るほどに、一  
 人は頭の方を射つ。今一人は尾の方を射つ。そのかみいづれといふべくもあ



らぬに、女思ひわづらひて、

住みわびぬわが身なげてん津の國の生田の川は名のみなりけり

とよみて、このひらばりは川にのぞみてしたりければ、つぷりと落ち入りぬ。

○射あて給へらん人に奉らん、射あて給ひたらん人に女を奉らんとなり。○ろのかみ、前  
にあると同じく、るの時の意。○住みわびぬの歌、住み佐びぬは、この世に存命ふることの  
つらくて、いやになりたるをいふ。名のみなりけりとは、生田川の生といふは、たゞ名のみに  
て、我が身はこの川にて死ぬる事よとなり。さて我が身は、一本、うき身とあり。○つぷりと  
落ち入りぬ、つぷりは水に落ち入る音なり。このさまは、川に臨みてつくりたる平張の所  
より落ち入りたるよしなり。

親あわて騒ぎの、しる程に、このよばふ男二人、やがて同じ所に落ち入りぬ。  
一人は足をとらへ、今一人は手をとらへて死にけり。そのかみ親いみじく騒  
ぎて、取り上げて泣きの、しりてはふりす。男どもの親も來にけり。この女の  
塚のかたはらに、又塚どもつくりて掘り埋む。時に津の國の男の親いふやう、  
同じ國の男をこそ同じ所にはせめ。こと國の人のいかでかこの國の土を犯  
すべきといひて妨ぐる時に、和泉の方の親、和泉の國の土を船に運びて、こゝ

にもてきてなん遂に埋みてける。されば女の墓をば中にて、左右になん男の  
塚ども今もある。

○一人は足をとらへ云々、一人は女の足を捕へ、又一人は手を捕へて死にたりとなり。○は  
ふり、今はむを添へてはふむりといふ。葬送の事なり。もと、はふるは放るにて、棄つるこ  
となるを、太古は人死する時は、これを山野に放棄せしより、遂に葬送の事をもかくいふやう  
になれり。○あなる、あるなる略。

かゝる事どもの昔ありけるを、繪に皆かきて、故後の宮に人の奉りければ、こ  
れがうへを、皆人々、この人にかはりてよみける。伊勢の御息所、

かげとのみ水の下にてあひ見れどたまなさからはかひなかりけり

○後の宮、温子なり。○皆人々この人にかはりて云々、故後の宮に仕へたる官女たち、こ  
の塚の人々にかはりて歌をよみたりとなり。○伊勢の御息所、はじめに伊勢の御とありし人  
なり。○かげとのみの歌、かげは形の意にて、影をかくすなをいふ影なり。たまなさから  
は、魂のなき骸にて死骸をいふ。女の形とのみ水の底にて相見れど、魂のなき骸は何のかひも  
なしとなり。男の心になりてよめるなり。

女になり給うて、女一の宮、

かぎりなくふかくしづめる我が魂は浮きたる人に見えんものかは



○女になり給うて、女の心になり給ひてなり。○女一の宮、宇多天皇の皇女均子内親王にて、御母は温子なり。異母兄敦慶親王に配し、延喜十年二月薨す。年廿一。○かぎりなくの歌、伊勢の歌に答へてよまれたるなり。うさたるは浮薄なる意。

また、宮、

いづこにか魂をもとめんわたつみのことかしことも思はえなくに

○いづこにかの歌、これは臨功道士、太真が魂魄を求めて、海中の蓬萊宮に至りし故事によせてよまれたるなり。されば生田川を海に取成して、わたつ海とはの給へり。

兵衛の命婦、

つかのまもゝろともよとぞ契りけるあふとは人に見えぬものから

○兵衛の命婦、藤原高経の女にて、古今集の作者なり。○つかのまもの歌、つかの間は僅の間をいふ。萬葉集卷四(人丸)「夏野去小壯鹿之角乃東間毛妹之心乎忘而念哉」。さてこゝは、つかに塚をうへて、かく塚を並べて諸共に契りけりとなり。

糸所の別當、

かちまけもなくてやはてん君によりれもひくらぶの山は越ゆとも

○糸所の別當、典侍治子朝臣にて、古今集の作者なり。三代實錄卷十七に、貞觀十二年二月十九日辛丑、參議從三位春澄朝臣善繩薨、善繩字名達、左京人也、本姓猪名部造云々、長女治子爲

正四位下典侍。また寛平遺誠に、日給之物等類、總可處分、治子朝臣自昔知糸所之事、一生之間猶令兼知之云々など見ゆたり。糸所は拾芥抄に、在采女町北、又曰縫殿之別所也。○かちまけもの歌、くらぶ山は山城にあり。二人の男の、心をくらぶるといひかけたり。

生きたりし折の女になりて、あふことのかたみにうゝるなよ竹のたちわづらふと聞くが悲しき

○あふことこの歌、あふことのかたみは、あふ事のかたさといひかけたり。かたみはかたまの轉じて、細き籠の類なり。さてかたみにうゝる云々は、籠などに植ゑたる竹は根ざしかぬるものゆゑ、次の立ち煩ふといはん序詞としたり。

また、人、

身をなげて逢はん人と人にちぎらねごうさ身は水にかげをならべつ

○身をなげての歌、男になりてよめる歌にて、こも治子のにや。

又一人の男になりて、

おなじえに住むはうれしきなかなれどなど我のみと契らざりけん

○註なし。

かへし、女、







くなりて、家もとぼれ、使ふ人なども徳ある所にいきつゝ、たゞ二人住みわたるほどに、さすがにげすにもあらねば、人に雇はれ使はれもせず、いとわびしかりけるまゝに、思ひわびて、二人いひけるやう、なほいとかうわびしうてえあらじ。男はかくはかなく、いますかめるを見捨てゝは、いづちもくゝえいくまじ。女も男を捨てゝは、いづちかいかんこのみいひわたりけるを、男、おのれはとてかかても経なん。女のかく若きほどに、かくてあるなんいといとほしき。京に上りてみやづかへをもせよ。よろしきやうにもならば我をもとぶらへ。れのれも人のごともならば、必ずたづねとぶらはんなど、泣くくいひ契りて、たよりの人に云ひつきて、女は京に來にけり。

○わたらひ、活計なり。○徳ある所、有福なる所なり。○とぶらへ、訪へなり。○人のごともならば、人らしきはとにもならばなり。

さしはへいづこともなくて來れば、このつきて來し人の許におて、いとあはれと思ひやりけり。前に萩、薄いと多かる所になんありける。風など吹きけるに、かの津の國を思ひやりて、いかであらんなど悲しくてよみける。

一人していかにせましとわびつればそよとも前の萩ぞこたふる

となんひとりごちける。さてとかう女さすらへて、或人のやごとなき所に宮に宮立てたり。さて宮づかへしありくほどに、装束さよげにし、むつかしき事などもなくてありければ、いと清げに、顔かたちもなりにけり。かゝれど、かの津の國を片時も忘れず、いとあはれと思ひやりけり。たよりの人に文つけてやりたりければ、さいふ人も聞えずなど、いとあはれと云ひつゝ來けり。我が睦しう知れる人もなかりければ、心ともえやらず、いとあはれと云ひつゝ來けり。いとあはれと思ひやりける。

○さしはへ、さしあたるの意。○いとあはれと思ひやりけり、津の國の男をなり。○一人しての歌、うよは、萩の葉の風にうよよと音するを、それよと答ふるよしに取り成したり。○ひとりごち、一人言をいふなり。○とかう女さすらへて、女どかく流浪してなり。○宮立てたり、この所、脱文あるべし。○みやづかへ、宮は内裏の事、つかへは此方より使はれ奉るをいふ、さて轉りては、大宮ならぬ所に仕ふるをもすべてみやづかへと云へり、と源氏物語評釋に見えたり。○むつかしきと、むさくるしきとなり。○心ともえやらず、心のまゝにも使をえやらぬなり。



かゝるほどに、このみやづかへする所の北の方うせ給うて、これかれある人を召し使ひなどするうちに、この人を思ひ給うけり。思ひつきてめになりけり。思ふ事もなくめでたげにて居たるに、たゞ人知れず思ふ事ひとつなんありける。いかにしてあらん。悪しうてやあらん。よくてやあらん。我がありどころもえ知らざらん。人をやりてたづねさせんとすれど、うたて我が男さうて、うたてあるさまにもこそあれと、念じつゝあり渡るに、猶いとあはれに覺ゆれば、男にいひけるやう、津の國といふ所の、いとをかしげなるに、いかで難波に秣しがてらまからんと云ひければ、いとよき事、我も諸共にといひければ、そこにはな物し給ひそ。おのれ一人まからんといひて、出で立ちていにけり。

○この人を思ひ給うけり、 攝津の女を主人の思ひたりとなり。○いかにしてあらん云々、  
攝津の男を思ひやる心なり。○わが男、 今の男をいふ。○うたてあるさま、 面白からぬこといふほどの意。○念じつゝ、 堪へ忍びてなり。○をかしげ、 面白さうなり。○ろこにはな物し給ひる、 御身はれはしますなどなり。

難波に秣して歸りなんとする時に、このわたりに見るべき事なんあるとて、

今少しとやれかくやれといひつゝ、この車をやらせつゝ、家のありしわたりを見るに、屋もなし。人もなし。いづかたへいにけんと思ひけり。かゝる心ばへにてふりはへ來たれど、我が睦しきずさもなし。かゝればたづねさすべき方もなし。いとあはれなれば、車を立て、眺むるに、供の人は日暮れぬべしとて、御車うながしてんといふに、しばしといふほどに、蘆になひたる男の、かたゐのやうなる姿なる、この車の前よりいさけり。これが顔を見るに、その人といふべくもあらず、いみじきさまなれど、わが男に似たり。

○とやれかくやれ、 車添の男に、此方にやれ彼方に行けと指圖するなり。○かゝる心ばへにてふりはへ來たれど、 もとの男に逢はんとて、わざ／＼來たるをいふ。○かたる、 乞食なり。道の傍などに居るとて、傍居の義。○いみじきさまなれど、 淺ましく見苦しきさまなれどなり。

これを見て、よく見まほじさに、この蘆もちたるをのこ呼ばせよ。かの蘆買はんといはせけり。さりければ、用なき物買ひ給ふとは思ひけれど、主の給ふことなれば呼びて買はず。車のもと近くになひ寄せさせよ。見んなご云ひて、この男をよく見るに、それなりけり。いとあはれに、かゝる物あさなひ



て世にふる人、いかならんと云ひて泣きければ、供の人は、なほ大方の世を哀  
がるどなん思ひける。かくてこの蘆の男に物なごくはせよ。物いと多く蘆の  
價に取らせよと云ひければ、すゝろなるものに、何か物多く賜はんなど、ある  
人々いひければ、強ひてもえいひにくく、いかで物を取らせんと思ふ間に、  
下簾のはざまのあさたるより、この男まれば我が妻に似たり。怪しさに心  
をさめて見るに、顔も聲もそれなりけりと思ふに、思ひあはせて、我がさ  
まのいといらなくなりけるを思ひ計るに、いとはしたなくて、蘆もうち捨  
て、走り逃げにけり。しばしと云はせけれど、人の家に逃げ入りて、かまの  
しりへに屈まりをりけり。

○うれなりけり、我が思ふろの男にてあつたワイなり。○なほ大方の世を云々、やはり普  
通一般の世を哀がるものと思ひたりとなり。○すゝろなるもの、むやみなる者など云はんが  
如し。○まもれば、よく見ればなり。○いらなく、いみじくに同じ。○はしたなくて、  
恥かしく面目なき意なり。○かま、籠なり。

この車より、なほこの男尋ねいてこといひければ、供の人手をあがちてもど  
め騒げり。人、そこなる家になん侍ると云へば、この男に、かく仰事ありて召

すなり。何のうち引かせ給ふべきにもあらず。物をこそ賜はせんとはすれ。切  
さ者なりといふ時に、硯を乞ひて文を書く。それに、

君なくてあしかりけりと思ふにもいと難波のうらそ住みうさ

とかきてふんじて、これを御車に奉れといひければ、怪しと思ひてもて来て  
奉る。あけて見るに、悲しきこと物に似ず。よとぞ泣きける。さて返しはい  
かゝしたりけん知らず。車に著たりける衣脱ぎて、包みて文など書き具して  
やりける。さてなんかへりける。後はいかゝなりにけんしらす。

あしからじとてこそ人のわかれけめ何かなにはの浦はすみうさ

○尋ねてこ、さがして連れて来よなり。○手をあがちて、手を分けてなり。あがつは和  
訓彙に、神代紀に散字、皇代紀に班字、類字などよめり、わかつの義とあり。○人ろこ  
なる家に云々、或人、かの男のかくれたる家を知らせしなり。○君なくての歌、あしかり  
は悪しかりに蘆を刈るといふを添へたり。意は明けし。この歌、拾遺集雑上にも出でたり。○  
かへしはいかゝしたりけん云々、拾遺集には、「あしからじよからんとてそ別れけん何かなに  
はの浦はすみうさ」といふかへしあり。○車に著たりける云々、車の中にて着て居たりしき  
ぬの意。○あしからじの歌、右に引きたる拾遺集の返歌を、すこしかへて、後人の書き加へ



しものならんど、井上文雄の云へるは、まことにさる事なるべし。

昔、大和國葛城郡に住む男女ありけり。この女、かほかたちいと清らなり。年ごろ思ひかはしてすむに、この女、いとわろくなりければ、思ひ煩ひて、限なく思ひながら妻をまうけてけり。この今の妻は、富みたる女になんありける。殊に思はねどいけばいみじういたはり、身の装束いと清らにせさせけり。かくにぎはしき所にならひて來れば、この女いとわろげにて居て、かく外にありけど、さらにねたげにも見えぬなどあれば、いとあはれと思ひけり。心地にも限なく妬く心憂く思ふを、忍ぶるになんありける。とゞまりなんと思ふ夜も、なほいねといひければ、わがかくありさするを、ねたまでことわざするにやあらん。さるわざせずば、恨むることもありなんなど、心のうちと思ひけり。さて出ていくと見えて、前裁の中にかくれて、男やくると見れば、端に出で居て、月のいとみじう面白きに、頭かいつりなどして居り。夜ふくるまでねず。いといたううち歎きて眺めければ、人まつなめりと見るに、使ふ人の前なりけるにいひける。

風吹けば沖つしら浪たつたやま夜はにや君がひとり越ゆらんとよみければ、我が上を思ふなりけりと思ふに、いと悲しうなりぬ。この今の妻の家は、立田山越えていく道になんありける。

この段は伊勢物語にもあり。○いとわろくなりければ、家計の貧しくなりしをいふ。○ならひて、なれてなり。○この女、もとの妻なり。○心地にも云々、もとの妻の女にも、限なく妬くは思へど、堪へ忍ぶにてありしとなり。○ことわざするにや、他の男と密通などするにやとなり。○端に出で居て、女がなり。○つかふ人の云々、つかふ人の、女の前に居たるになり。○風吹けばの歌、一二の句は、立つといはん序詞なり。よは、夜中の意。歌の意は、晝さへも、立田の山越は道いとけはしく、越え苦しと聞くに、君は今より出で立ち給へば、夜中頃にや、ひとり彼の山を越え給ふならん。さそ佗しく難儀におはしませんが、いとほしきこととなり。

かくてなほ見居りければ、この女うち泣きて、臥して、鏡に水を入れて、胸になんすゑたりける。あやし、いかにするにかあらんとてなほ見る。さればこの水、あつゆにたぎりぬれば、湯ふてつ。又水を入れる。見るにいと悲しくて、走り出で、いかなる心地し給へば、かくはし給ふぞといひて、かさ抱きてな



んねにける。かくて外へもさらにかて、つと居にけり。かくて月日多くへて思ひやるやう、つれなき顔なれど、女の思ふことといふいとみじき事なりけるを、かくいかぬを、いかに思ふらんと思ひ出で、ありし女のがりいきたりけり。久しくいかざりつれば、つとましくて立てりけり。さてかいまめば、我にはよくて見えしかど、いとあやしきさまなるさぬを着て、大櫛をつらくしにさしかけて居り。手つから飯もり居りける。いとみじと思ひて、來にけるまゝにいかずなりにけり。この男はれほさみなりけり。

○鏡かがみ、金屬にてつくりたる櫛なり。○あつゆ、熱湯なり。○ふてつ、棄てつなり。○つれなき顔、知かず顔なり。更に恨みたる氣色もなきさまなり。○つとましく

て、遠慮せられての意。○かいまめば、かいま見ればなり。物の間より覗き見るをいふ。○

面櫛つらにさしかけて、櫛を前髪にさすとなり。賤しげなるさまなり。○れほさみ、王なり。

むかし、ならの帝に仕うまつる采女ありけり。かほかたちいみじう清らにて、人々よばひ、殿上人などもよばひけれど、逢はざりけり。そのあはぬ心は、帝を限なくめでたきものになん思ふ奉りける。帝召してけり。さて後、又も召さざりければ、かざりなく心うごとと思ひけり。夜晝心にかゝりて覺え給ひ

つと戀しく佗しくおぼえ給ひけり。帝は召し、かど、事ともればさす。さすがに常には見え奉る。なほ世にふまじき心地しければ、夜みそかに出で、猿澤の池に身を投げてけり。かく投げつとも、帝はえしらしめさざりけるを、事のついでありて人の奏しければ、聞し召してけり。いといたう哀がり給うて、池のほとりに大行幸し給うて、人々に歌よませ給ふ。柿本の人丸、わぎもこがねくたれ髪をさる澤の池のたまもと見るぞかなしきとよめる時に、帝、

猿澤の池もつらしなわぎも子がたま藻かづかばみづぞひなまし

とよみ給うけり。さてこの池に墓せさせ給うてなん、歸らせおはしましけるとなん。

○ならの帝、大和の奈良に都し給ひし帝といふ意。○采女、禁秘鈔に、陪膳采女尤可然事也、近代漸零落無極、尤可有沙汰事也、陪膳采女典侍仰之、應和例也、即折藏人依神祇官中。内侍宣也。また百寮訓要抄に、采女と申は、國々より可然美女をも撰びて、天子に參らせし也云々と見ゆたり。○めしてけり、或夜采女を召し給ひしなり。○ればへつと云々、こゝは采女が上を云へるなれば、二つの給ふといふ詞似つかはしからず。削るべし。○事ども



おぼさず、心にもとめ給はぬなり。○さすがに常には見え奉る、帝は何とも思召さねど、采女は陪膳などに仕へまつれば、さすがに常にはまみ奉るとなり。○柿本の人丸、孝順天皇の皇子天押帶日子命の後胤といへど、父祖も傳も詳ならず。○わぎもこがの歌、わぎもこは我が妹子がにて、采女をさして云へり。なくたれ髪は寝起の亂れたる髪をいふ。この歌、拾遺集に出でたり。○猿澤の歌、つらしなはつらさ心かなの意、なは歎辭なり。玉藻かづかは云々は、采女が身を投げんには、水を潤して死なぬやうにすべきをとの意なり。玉藻かづかは入水するをいふ。○この池に、この池のほとりへの意。

百五十一段

おなじ帝、立田川の紅葉いとおもしろさを御覽むける日、人丸、  
立田川もみぢばながるかみなびのみむろの山にしぐれふるらし  
みかど。

立田川もみぢみだれてながるめり渡らばにしさなかや絶えなん  
とぞあそばしたりける。

○立田川、大和國平群郡にあり。○立田川もみぢ葉ながるの歌、立田川に紅葉の流るゝを見れば、最早や神南備の三室山には、時雨が降ると見ゆるとなり。神南備三室は立田川の川上にあリ。この歌、古今集秋下にも、拾遺集冬の部にも出でたり。○立田川もみぢ亂れての歌、紅葉の流るゝを、錦に見做してよめるにて、意は叫けし。これも古今集同じ部に。

百五十二段

同じ帝、狩いとかじこく好み給うけり。みちのくに岩手の郡より奉れる御鷹世になくかじこかりければ、二なる思して御手鷹にし給うけり。名をば岩手となんつけ給へりける。それをかの道に心ありて、預り仕うまつり給うける、大納言に預け給へりける。夜晝これをあつかりて、とりかひ給ふほどに、いかゞし給ひけん、そらし給うてけり。心肝をまどはしてもとむるに、さらへ見え出でず。山々に人をやりつゝもとめさすれど更になし。みづからも深き山に入りて、惑ひありき給へどかひもなし。

○預り仕うまつり、御鷹の役に仕へたるなり。○つらし、鷹をとりにかしたるなり。この事を奏せざればしもあるべけれど、二日に三日あげず御覽せぬ日なし。いかゞせんとしてうち参り、御鷹の失せたるよしを奏し給ふ時に、帝ものも給はせず。聞き召しつけぬにやあらんとて、又奏し給ふに、面をのみまもらせ給うて物もの給はず。たいどしと思したるなりけりと、我にもあらぬ心地して、畏まりていますがりて、この御鷹のもとむるに待らぬこと、いかさまにかし侍らん。なごか仰事もし給はぬと奏し給ふ時に、帝、



いはで思ふそいふにまされる

との給ひけり。かくのみの給はせて、ことごともの給はざりけり。御心にいとふがひなく、口惜しく思さるゝになんありける。これをなん世の中の人もとをばとかくつけゝる。もとはかくのみなんありける。

○たいくし、怠りがましきをいふ。なほざりなる意なり。○我にもあらぬ心地して、大納言の我を忘れて、心を感はしたるなり。○いかさまにか、どのやうにかなり。○いはで思ふそ云々、いはでといふに鷹の名をうへ給へり。○ことごと、他の事なり。○もとをばとかくつけゝる、もとは上の句をいふ、古今六帖(第五)に「心には下行く水のわさかへりいはで思ふそいふにまされる」なをあり。○もとはかくのみ云々、このもとは舊なり。

ならの帝、位におはしましける時、嵯峨の帝は坊におはしまして、よみて奉つれ給うける。

みな人のその香にめづるふぢばかま君がみためとたをりつるけふ帝、御かへし、折る人のこゝろにかなふぢばかまうべ色ごとくにほひたりけり

○ならの帝、平城天皇なり。桓武天皇第一の皇子にて、皇胤紹運録に、寶龜五年八月十五日

降誕、延暦四年十一月廿五日立太子、十三、同七年正月十五日元服十五、同廿五年三月十八日受禪廿一、同年五月十八日即位、大同三年十一月十三日大嘗會、同四年四月一日禪位、同日尊號、天長元年七月七日崩五十一號奈良帝と見たり。○嵯峨の帝、平城天皇の同母弟にまして、皇胤紹運録に、延暦五年九月七日降誕云々、大同元年五月十九日爲皇太弟廿一、同四年四月一日受禪廿四、同十三日即位、弘仁元年十一月十八日大嘗會、同十四年四月十七日禪位三十八、同日尊號、承和九年七月十五日崩五十七、葬山城國葛野郡淡名、依遺制不置山陵國忌と見たり。○坊、東宮を申すこと上に註せり。○みな人の歌、意は聞たり。○折る人の歌、これらも。

大和の國なりける人の女、いと清らにてありけるを、京より來たりける男の、かいま見て見けるに、いとをかじげなりければ、ぬすみてかさ抱きて、馬にうち乗せて逃げていにけり。いとあさましうおそろしう思ひけり。日くれて立田山にやどりぬ。草の中に障泥を解き敷きて、女を抱きて臥せり。女恐しと思ふこと限なし。佗しとおもひて、男のものいへど、いらへもせてなさければ、男、

たがみそぎゆふつけ鳥かゝらごころも立田のやまにをりはへてなく



女、かへじ、

たつだ川岩根をさして行くみづのゆくへも知らぬわがごとやなく  
とよみて死にけり。いとあさましうてなん、男抱さもちて泣きける。

○いとあさましう云々、女の心なり。○障泥、馬の兩脇を覆ふ具なり。○たがみそぎの歌、たがみそぎとは、誰が身褌をするどて、放ちたるゆふつけどりかとなり。さてかく云へるは、身褌するには、鶏に木綿をつけて放ちて、我が犯せる罪を鶏に負せて、殺すればなり。から衣は、裁つといふ意にて立田にかゝれる枕詞。をりはへてなくは、久しく積きて鳴くをいふ。女をゆふつけ鳥に寄せてよみたるなり。なほ袖中抄に、ゆふつけどりはにはどりを云也、よの中さわがしき時、四境、祭とおはやけのせさせ給に、鶏に木綿をつけて、四方、關にいたりて祭也云々、又大和物語云、大和の國なりける人の女云々、私云、このたがみそぎの歌は、古今第十八讀人不知歌也、又無返歌、而大和物語如此、有見事歟、平城、京にては、龍田山は攝津國へかよふ道なれば、西の關にて、夕つけどりによまんにたよりあり云々と見ゆたり。

第五百五段

○立田川の歌、上の句は、ゆくへも知らぬといふ序詞なり。  
昔、大納言の女、いと美しうて持ち給ひたりけるを、帝に奉らんとてかしづき給うける。殿に近う仕うまつりける内舍人にてありける人、いかにか見けん、この女を見てけり。かほかたちいと美しげなるを見て、よろづの事おほ

えず心にかゝりて、夜晝いとわびしく病になりておぼえければ、切に聞えさすべき事なんあると云ひ渡りたりければ、あやし、何事ぞといひて出てたりけるを、さる心設して、ゆくりなくかさ抱きて、馬に棄せて、みちのくにへ夜ともいはず晝ともいはず逃げていにけり。安積の郡安積の山といふ所に庵をつくりて、この女をすゑて、里に出でつゝ、物などもとめて來つゝくはせて、年月をへてありへけり。

この段は、萬葉集卷十六に「安積香山影副所見山井之淺心乎吾念莫國」とある歌をもとにして作れり。○内舍人、職原鈔に内舍人唐名通非舍人、可然之侍任之、攝政關白給内舍人隨身時、殊撰其器召任之、帶劍之官也とあり。○さる心設して、ぬすみさるべき心がまへをしてなり。

この男いぬれば、たゞ一人物も食はで山の中に居たれば、限なくわびしかりけり。かゝるほどに孕みにけり。この男物もとめに出でにけるまゝに、三日四日來ざりければ、侍ちわびて、立ち出で、山の井にいきて影を見れば、我がありしかたちにもあらず、怪しきやうになりけり。鏡もなければ、顔のなりたらんやうも知らでありけるに、俄に見ればいとおそろしげなりけるを、



いとばづかしと思ひけり。さてよみたりける。

あさか山かげさへ見ゆる山の井の淺くは人をおもふものは  
とよみて、木に書きつけて、庵に来て死にけり。男、物などもとめてもて来て、  
死にて伏せりければ、いとあさましと思ひけり。山の井なりける歌を見て、  
歸り来てこれを思ひしに、傍に臥せりて死にけり。世のふる事になんあり  
ける。

○この男いぬれば、ものもどめに里などへ行くをいふ。○あさか山の歌、上の句は、淺く  
といはん序詞なり。男のかく里に出で、久しく歸らざるを恨みて、かやうに淺く人をば思ふ  
ものかはとなり。○山の井なりける歌、木にかきつけたる歌なり。

信濃國更級といふ所に男住みけり若き時に親は死にければ、をばなん親の  
如くに若くよりあひ添ひてあるに、この妻の心いと心憂きこと多くて、この  
姑の老いかゝまり居たるを常にくみつ、男にもこのをばの、み心のさが  
なく悪しさを云ひ聞かせければ、昔の如くにもあらず、おろかなること多  
く、このをばのためになりゆきけり。このをばいといたる老いて、ふたへにて  
居たり。これをなほこの嫁所せがりて、今まで死なぬことと思ひて、よから

ぬ事をいひつゝ、もていまして深き山に捨てたうびよとのみ責めければ、責  
められわびて、さしてんと思ひなり月のいと明き夜、れうなどもいさ給へ、寺  
にたふとさわさすなる見せ奉らんと云ひければ、限なくよろこびて負はれ  
にけり。

この段は、古今集雜上(よみ人しらす)に、「我が心なくさめかねつさらしなや娘捨山にてる月  
を見て」とある歌をもととして作りたるなり。○更級、更級郡にあり。○この妻、この男  
の妻なり。○いと心憂き、心よからぬ者にて、いとつらき意。○さがなく、よからぬな  
り。○ふたへにて、腰の折れ屈まりたるさまをいふ。○所せがりて、窮屈がりて嫌ふな  
り。○もていまして、連れ行き給ひてなり。○捨てたうびよ、捨てたまへよなり。○たふ  
とさわさ、佛事を云ふ。

高き山の麓に住みければ、その山にはるくと入りて、高き山の嶺のかりく  
べくもあらぬに、置きて逃げて來ぬ。やといへどいらへもせて、家に來て思  
て居るに、云ひ腹立てけるをり、腹立ちてかくしつれど、年ごろ親のごと養ひ  
つゝあひそひにければ、いと悲しくおぼえけり。この山のかひより、月もい  
と限なく明くて出でたるを眺めて、夜一夜いもねられず、悲しくおぼえけれ



ば、かくよみたりける。

わがこころなぐさめかねつさらしなや姨捨山にてる月を見て  
とよみてなん、又いきて迎へもて來にける。それより後なん姨捨山といひけ  
る。慰めがたしとはこれがよしになんありける。

○やよといへき、をばのやよと男を呼ぶなり。○いひ腹立てけるをり、妻と詞争なぞして  
腹立てたる時なり。○腹立ちてかくしつれと、一旦は妻の詞を信じて、腹立ちて、かく山に  
は捨てたれとなり。○かひ、山と山との間をいふ。○わが心の歌、古今六帖にも出でた  
り。歌の意は、この姨捨山に照る月を見て、何となら悲しく、わが心を慰めがたしとなり。

第百五十七段

下野國に男女住みわたりけり。年ごろ住みけるほどに、男妻をまうけて、心  
かはりはて、この家にありける物どもを、今の妻のかりかさ拂ひもて運び  
いく。心うしと思へど、なほさせて見けり。塵ばかりの物も残さず、皆もてい  
ぬ。たゞのこりたるものは、馬槽のみなんありける。それをこの男のすさ、  
眞楫といひける童を使ひけるして、この槽をさへ取りにおこせたり。この童  
に女のいひける、さんぢも今はこゝに見えじかしなどいひければ、なごてか  
さぶらはざらん、ぬしはせずともさぶらひなんなど云ひ立てり。女、ぬしに

消息聞えば申してんや。文はよに見給はじ。たゞ詞にて申せよといひければ  
いとよく申しさぶらはんと云ひければ、かくいひける。

船もいぬまかぢも見えとけふよりはうさ世の中をいかて渡らん  
と申せといひければ、男にいひければ、物かさふるひいにし男なん、しかなが  
ら運び返して、もとの如くあからめもせて添ひ居にける。

○馬槽、はみをけなり。○使ひけるして、しては、をもつての意。○さんぢ、汝なり。  
○船もいぬの歌、意は聞けし。○しかながら、さながらなり。うのまゝにの意。○あから  
めもせず、わざ目もせずなり。

第百五十八段

大和國に男女ありけり。年月かぎりなく思ひ住み渡りけるを、いかゞとけん、  
女を得てけり。なほもあらず、この家に居て來て、壁をへだて、住みて、我が方  
には更に寄り來ず。いとうしと思へど、更にいひも嫉まず。秋の夜の長さに、  
目を覺して聞けば、鹿なん鳴さける。物もいはて聞きけり。壁をへだてたる  
男、聞き給ふや、西こそと云ひければ、何事といらへければ、この鹿の鳴くは  
聞き給ふやといひければ、さ聞き侍りといらへけり。男、さてそれをいかゞ  
聞き給ふと云ひければ、女ふといひける。



われもしかなきてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲をのみ聞け  
とよみたりければ、限なくめで、この今の妻をおくりて、もとのごとなん  
住みわたりける。

○なほもあらず云々、 たゞ、こと女を得たるのみにもあらで、その女をもとの妻の家に連れ  
來たるなり。○我が方、 もとの妻の方なり。○聞き給ふや西ころ、 男の詞なり。西とはも  
との妻を云へり。西の方に住みたるゆゑ、その所をもてかく云ひしなり。こそは人を呼びかくる  
詞。○さ聞き侍り、 女の返事なり。○我もしかの歌、 しかはさやうにの意にて、鹿を添へたり。  
染殿の内侍といふ人いますがりけり。それを能有の大臣と申しけるなん、時  
々住み給うける。物をよくし給ひければ、御ぞどもをなんあつけさせ給ひけ  
るに、綾ごもを多くつかはしたりければ、雲鳥の紋の綾をや染むべきと聞け  
たりしを、ともかくもの給はせねば、得なんつかうまつらぬ、さだめうけたま  
はらんと申し奉りければ、大臣御返事に、  
くもとりのあやの色をもおもほえず人をあひ見て年のへぬれば  
どなんの給へりける。

○染殿の内侍、 西三條右大臣良相の女なり。○能有のれとゞ、 古今集目錄に、文徳天皇第

一源氏、母伴氏、承和十二年乙丑生云々、寛平八年七月十六日任右大臣、  
源氏三十一號、近院右大臣とあり。○物をよくし給へりければ、 裁縫のとをよくし給ふとなり。  
○あつけ、 任する意。○雲鳥の紋、 雲鶴の紋なり。○ぬなんつからまつらぬさため云  
々、 かく返事なきは、わが身に頼まずと思ひ定め給ひしならんが、うは如何なるわけにか、  
承りたしとなり。○雲鳥の歌、 人を逢ひ見での逢ひには藍をうへたり。歌の意は、久しく  
御身に逢ひ侍らで、侘しきまゝに、何事も覺えずといふを、あやの色をもといへり。この歌、  
續後拾遺集には、二の句、あやの色も、五の句、ほどのへぬればとあり。  
かなじ内侍に、在中將すみける時、中將の許によみてやりける、

あさ萩をいろどる風の吹きぬれば人のこころもうたがはれけり  
とありければ、かへし、

秋の野をいろどる風は吹きぬともこころはかれと草葉ならねば  
となん云へりける。かくて住まずなりて後、中將の許より、衣をなんしにれと  
せたりける。それにあらはひなどする人なくて、いとわびしくなんある。なほ  
必ずして給へとなんありければ、内侍、御心もてあることにかそあなれ。  
かほ幣となりぬる人の悲しさはよるせともなくしかぞなくなる



となん云ひやりたりける。中將、  
流るとも何とか見えん手に取りてひきけん人ぞぬさと知るらん  
となんいひける。

○在中將、業平なり。○秋萩をの歌、秋の萩を色に染むる風の吹きたれば、人の心も他の色に染みはせずやと疑はるゝとなり。この歌、後撰集(秋上)には、よみ人しらすとあり。古今集戀四(素性法師)「秋風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかゞと思ふ」○秋の野をの歌、「心はかれじは心は枯れじといふに、御身を離れじといふ離れじを添へたり。これも後撰集にかへしとて出で、一の句あきはぎをどあり。○衣をなんしに、衣を縫はせに送りたるなり。○あらはひ、洗濯なり。○御心もて云々、かくわらはひなぞする人もなきは、御身の心がらにて、あまりにあだしくおはする故ぞとなり。○大幣どの歌、大ぬさど云々は、大ぬさは積する時、人數多集りて、手に引くものなれば、人の心のこれかれと移り易きに譬へて、大幣の如く、引く手あまたになりぬる人といふを、大ぬさとなりぬる人といへるなり。よるせどもなくは、かの幣を御積して後、川へ流すに、更に寄る瀬もなく、流れ行くよしなり。しかぞなくは、さやうに泣くなり。御身の一つかたに心を定め、いづれをつひのよるべしとするともなくて、さやうにわらはひなぞする人もなしと信ひ給ふぞとなり。この内侍、中絶ぬたる後なればなり。○流るともの歌、たどひ定めなく流るとも、よしみもなく知らぬ人に

は、何ものとか見ぬん。御身の如く手に取りて引きけん人ころ、その幣の何とある事をも知るらめ。さればその昔のちなみあればこそ、かく衣をも頼むなれとの意なり。  
在中將(二條の)後の宮、まだ帝に仕うまつり給はて、たゞびとにてればしましけるよによはひ奉りける時、鹿尾菜といふものおこせて、かくなん、  
思ひあらば葎のやどにねもしなんひじきものには袖をしつゝも  
となんの給へりける。返しを人なん忘れにける。さて後の宮、東宮の女御と聞えて、大原野に詣て給うけり。御供に、上達部、殿上人、いと多く仕うまつり給へり。在中將もつかうまつれり。御車のあたり、なまぐらさ所に立てりけり。御社にて、大方の人々祿賜はりて後なりけり。御車のしりより奉れる、御ひとへの御衣をかづけさせ給へりけり。在中將たまはるまゝに、  
大原やをよほの山も今日こそはかみ代のこともおもひ出づらめ  
としのびやかに云ひけり。昔をおぼし出で、をかごとおぼしけり。

この段、伊勢物語にもあり。○二條の後、藤原高子なり。清和天皇の皇后、陽成天皇の御母にて、大鏡裏書に、贈太政大臣長其女、母贈正一位、  
元慶元年正月十九日爲皇太夫人(或中宮)、同六年正月七日爲皇太后宮、寛平八年九月廿二日廢后位、同廿三日賜封四百戸、



延喜十年三月廿三日、元年六十九、天慶六年五月廿七日追復本位と見たり。○また帝にも云々、いまだ入内なくて、家にあられる時なり。○思わらばの歌、思ひあらば、我を思ふ心あらばなり。律の宿は、律なま生ひ茂りて荒れたる宿なり。ひじきものは、引き敷き物といふ意にて、鹿尾菜をそへたり。○東宮の女御、季吟の抄に、伊勢物語勘物云、貞觀十一年二月貞明親王爲皇太子、于時高子爲女御、依東宮母儀也、去年十二月廿六日誕生高子年廿七とあり。さて東宮は皇太子のとなて、令養解に、穴云、御子宮在御所東、故爲東宮、伴云、四時氣自東發、即春准、此故爲東宮、春宮其義无別也。左傳正義に、四時東爲春、萬物生長在東、西爲秋、萬物成就在西、是以君在西宮、太子在東宮也と見たり。○大原野、山城國乙訓郡にあり。○御社、御神体は春日神社と同じく、天兒屋根命にて、藤原氏の祖神なり。○大原やの歌、この小鹽山にいつきまれる神も、かく藤原氏の子孫さかたて、女御も東宮の御母儀にわたらせ給へば、神世に天照大神の神勅ありしとも思ひ出して、今日ころは、いと嬉しく思召さんと云へるにて、下に、女御を山にたどへ、はやく昔の事を思し出で、や、人よりは殊に、御車よりかゝる美事なる御衣を賜ふならんとの意を含めたり。この歌、伊勢物語には、をじほの松もとあり。

又在中將うちなさぶらふに、御息所の御方より、忘草をなん、これは何とかいふと賜へりければ、中將、

わすれ草れふる野べとは見るらめどこはしのぶなり後もたのまんとなんありける、れなむ草をしのぶ草わすれ草といへば、それによりてなんよみたりける。

この段、伊勢物語には、むかし、男、後涼殿のはざまをわたりければ、あるやんことなき人の御局より、わすれ草を、しのぶ草とやいふとて、さし出させたまへりければ、たまはりてとあり。○御息所、高子なり。○忘草をなん云々、忘草を出して、契りしとは忘れたりやと問はせ給へるなり。○忍草れふるの歌、これまで中絶せられたれば、げに忘れたりと思召すならめど、この中將はさにはあららず、たゞ人目を忍ぶ故に、中絶せるなれば、なほゆくすゑをも頼みまつらんとなり。○れなむ草をしの草わすれ草といへば云々、和名抄に、わすれ草は草類の部に、萱草、兼名苑云、萱草一名忘憂萱草一名忘憂佐、俗云如三葉陵二音一と見え、しのぶ草は菅類の部に、垣衣、本草云垣衣一名烏菲和名之乃とありて、別種なることしるさに、こゝにかくいへるはいふかし。なほこの辨、袖中抄にも見えたり。

在中將に、後の宮より、菊召しければ、奉りけるついでに、  
植ゑしうゑば秋なき時やさかさらん花こそ散らめ根さへかれめや  
と書いつけて奉りける。



この段、伊勢物語には、人のせんさいに菊うゑけるにどあり。○うゑしうゑばの歌、植ゑし  
植ゑばは、植ゑしばにて、しは強辞なり。ぬれして、ゆきして、戀ひてなほいふと  
同じく、かく同じ詞を重ねて云ふは、其の意味をつよめんためにて、こゝは、よく植ゑてさへ  
置けばといふほどの意なり。秋なき時や云々は、菊は秋咲くものなれば、若し秋のなき時には  
咲かざるべけれど、年毎に秋の來ぬといふとなければ、咲かぬことはあらじとなり。花ころち  
らめとは、花ころは散るべけれど、根まで枯るべきか枯ればせずとなり。この歌、古今集秋の  
部にも出でたり。

第百六十四段

在中將の許に、人の飾粽をおこせたるかへしに、かく云ひやりける、

あやめかり君は沼にそまどひける我は野に出でゝかるぞわびしき  
とて、雉子をなんやりける。

○飾粽、美しく飾りたる粽にて、粽は和名抄に、風土記云、糰作黍反字亦作粽和名知菰木以菰葉裹之、以  
灰汁煮之、令爛熟也、五月五日啖之とあり。○あやめかりの歌、こゝなる粽は、あやめに  
て包みしにや。歌の意は、君は粽を賜はんとて、あやめを刈りに、こゝかしこの沼にまどひ給  
ひ、我はまた、雉子をまわらせんとて、野に狩して、倦しき目を見たりとなり。かく我が勞を  
も擧げて云へるは、御身のためには、これはどの難儀をも辞せそとゝのへたる進物なれば、充  
分御賞翫に預りたしとの意を含めたるなり。

第百六十五段

水尾の帝の御時、左大辨の女、辨の御息所としていますがりけるを、帝御髪おろ  
し給りて、後に一人いますがりけるを、在中將忍びて通ひけり。中將、病いと  
重くして煩ひけるを、もとの妻どもありけり。これはいと忍びてある事な  
れば、えいさもとぶらひ給はず、忍びくになん訪ひける事日々でありけり。  
さるに訪はぬ日なんありける。病もいとれもりて、その日になりけり。中將  
の許より、

つれづれといとゞ心のわびしきに今日はとはずてくらしてんとや  
とておこせたり。弱くなりたりとて、いといたく泣きちわぎて、返事なども  
せんとするほどに、死にけりと聞きて、いとみじかりけり。死なんとする  
事、今々となりてよみたりける。

つひにゆく道とはかねて聞きしかどさのふけふとは思はざりしを  
とよみてなん絶えはてにける。

○水尾の帝、清和天皇の御弟なり。文徳天皇の皇子にて、御母は太皇太后藤原明子なり。皇  
胤紹運録に、嘉祥三年三月廿五日降誕、同年十一月廿五日立太子、天安二年八月廿七日受禪、



九同年十一月七日即位云々、貞觀十八年十一月廿九日禪位、二十七日、十二日尊號、元慶三年五月八日入道三十、法諱素實、從宗敎僧正御灌頂云々、同四年十二月四日於圓覺寺崩三十一、葬水尾山陵、置御骨山城國栗田山、號水尾帝、幼主童帝始と見えたり。○左大辨、誰とも知るべからず。○これは、辨の御息所をいふなり。○つれづれの歌、病中のつれづれをも、御身の消息にこそ慰みしに、けふは病もおもひ、いとゞ倦しさに堪へぬ折しも、訪らひ給はで暮さんどやとなり。○つひにゆく歌、つひにゆく云々は、死にてゆく道は、誰も必ず行く道なりとは、かねてより聞きてありしがとなり。この歌、古今集哀傷の部にも、伊勢物語にも出でたり。

第百六十六段

在中將物見に出で、女のよしある車のもとに立ちぬ。下簾のはざまより、この女の顔いとよく見てけり。物など云ひかはしけり。これもかれもかへりて、あしたによみてやりける。

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなく今日やながめくらさんとあれば、女、かへし、

見も見ずも誰と知りてか戀ひらるゝおぼつかなみのけふのながめやとぞいへりける。これらは物語にて、世にある事どもなり。

この段、伊勢物語には、むかし、右近の馬場のをりの日、むかひに立てたりける車に、女の顔のしたすだれより、ほのかに見えければ、中將なりける男の、よみてやりけるとありて、女のかへし、「知る知らぬ何かあやなくわきていはん思ひのみころしるべなりけれ」とあり。古今集(戀一)も同じ。○下簾、婦人の車筋なり。車の簾の内にかくるとばりにて、すゞしのさぬなごを、するごなどに染めたるものなり。○見ずもあらずの歌、あやなくはわけもなくなり。見ざるにもあらず、又見たるにもあらず人のかく心にかゝりて戀しきに、わけもなく、今日一日うつら〜と、物思ひに暮すならんとなり。○見も見ずもの歌、おぼつかなみは、ねぼつかなきといふ意なり。人を戀ふるは、たしかに其人を見知りてこそ、忘れがたしなごも思ふべけれ。たゞ見もせず、又見ずもあらずはどの人を戀ひ給ふとは、いとおぼつかなき御ながめよとなり。○これらは物語にて云々、物語とは、伊勢物語をさせるなるべし。

第百六十七段

男、女の衣を借り着て、今の妻のかりいきて更に見えず。この衣を皆さやりて返しおこせとて、それに雉、鴈、鴨を加へてれこせ。ひとの國に、いたづらに見えけるものどもなりけり。女かくいひやりける。

いなやさじひとにならせるかり衣わが身にふればうさかもぞつく

○今の妻のかりいきて、前妻の衣を着て、後妻のもとへゆきてなり。○さやりて、着破りてなり。○いなやさじの歌、いなやは否やにて、いやとよなり。さじは着じに雉を、かりは



借りに雁を、うさかもは、愛さ香もに浮鴨をうへたり。

深草のみかど、申しける御時、良少將といふ人いみじき時にてありけり。いと色好になんありける。忍びて時々あひける女、同じうちにありけり。今宵必ず逢はんと契りたる夜ありけり。女いとけさうして待つに、音せもず。目をさまして、夜やふけぬらんと思ふほどに、時まうす音のしければ、聞くに丑三つと申しけるを聞きて、男のもとにふと云ひやりける、

人心うしみつ今はたのまじよ

といひやりけるに、驚きて、

夢に見ゆやとねぞ過ぎにける

とぞつけてやりける。しばしと思ひてうち休みけるほどに、寝すぎたるになんありける。

○深草帝、仁明天皇なり。嵯峨天皇の皇子にて、御母は皇后嘉智子なり。皇胤紹運録に、弘仁元年降誕、同十四年四月十九日立太子、十四、同八月一日加元服、天長十年二月廿八日受禪、二十四、同三月六日即位、同十一月十五日大嘗會、嘉祥三年三月十九日落飾、同廿一日崩清涼殿、四十一葬山城國深草山陵、號深草帝と見えたり。○良少將、良岑宗貞なり。左近衛少將なりし

かば良少將といへり。桓武天皇の孫、安世の男にて、有名なる歌人遍照のことなり。三十六歌仙傳に、承和十三年正月十三日任左近衛少將、嘉祥二年正月補藏人頭、三年正月七日叙從五位上、同三月廿一日帝崩、出家爲僧、先皇寵臣也、先皇崩後哀慕無止、自歸佛理、以求報恩、時人愍云々、仁和元年十月廿三日轉僧正云々と見えたり。○いみじき時、得意なる時なり。

○女いとけさうして、けさうは假粧なり。かたちなぞつくるひて待ちたるなり。○時まうす音のしければ聞くに丑三つと申しける、丑三つは一時を四つにわけて、一二三四とやうにせるなり。さて漏刻博士時をはからひて申し上ぐるなり。○人心うしみつ云々、うし三つは人愛心しといひかけたり。○夢に見ゆやと云々、ねは寝を子にかけたり。この連歌、拾遺集にも出でたり。

かくて世にもらうあるものに仕うまつる。帝限なく思されてあるほどに、この帝うせ給ふ。御はふりの夜、御供に皆人つかうまつりける中に、その夜よりこの良少將うせにけり。友たち妻もいかならんとて、しばしはこゝかこともとむれども、音耳に聞えず。法師にやなりにけん。身をや投げてけん。法師になりたれば、さてなんあるとも聞えん。なほ身を投げたるなるべしと思ふに、世の中にもいみじう哀がり、めとどもは更にもいはず、よるひるさうじいもひをして、世間の神佛に願を立て惑へど、音にも聞えず。妻は二人なん